るものぞおりのゝへる物も狼中より来るとどのれて狼の生きのなりなり或も婬をこのむ
物がたりを悦び人々においせらるゝものは鸚鵡の中より生をうけあるなり邪婬をすな
るものは又おのれが女房にのみあらずそれで親におしくおたり不孝おなるは名つく婬の
つみよりもまたふかしおきらのものは斬舌地獄におちてくるしみをうくとぞ説せ玉ふ
誠お三界に人をつなぐきづなは是れ婬欲なれぞいづれもやめ玉へしかしながらとまら
ぬは此色のみちなれぞこのなく往生成佛はなりがまいかとぞんじ候ふきのふゝたる如
く戒をたもち威儀をたゞしてや念佛にもあらず成佛しがたき所のおの〳〵われらを助
けましとてさいさゝう思しめされぞも願はくはすおしにても苦労をかけ来るがうとま
し又おのが積犯の悪業つよきもそのづのらおのもと引さかりてちのひの網によきな
んも浅ましけれぞ二百戒五百戒もなもたずとも先さしおたりたる所のは法度の邪婬を
おかしておられぬむちをさらし玉ふなどや事にわるうきかせ玉もずともすおしおても
おしき事はせぬやうおんをそち扨その方への念佛題目れいく〳〵ほぐれて佛もうきし
とおやえめそべしなゝ種の字は今の因果のたね木の實にて有と日おろ合点まてござれ

これまでにて邪婬のさたもすみはなしな其うちはた〳〵はおしやさんあおかしこく
○扨も一休和尚は活佛にてましましけると世上に風聞しけるがあまりにいはんとて去人や
ありけるはこの間一休へ参りければよく来るとのたまひ虚空に座し玉ひては庭のまつの枝に
は腰をかけられはすゝみなされしなり不思議なる事にあらずやとおの〳〵とかたりけれ
ば皆人それは偽にこそ人間と生をうけしゝる自在のなるべしやと取沙汰しける事をはの
うに聞めし一條の辻に札を立らきし書に
佛法の修行までに道なり天眼通を得たり虚空に座せんとすれば則ち座し座せまし
とれもへは則座せず通力自在を得たり若うたがふ人あらば見物すべし
とのゝれたり皆人是を見て此間人の評判しけるがのく書せらるゝ上も更にうたがふ所な
し去ながら魚ほくひて生して吐と仰られしも誠ならず左なる事おてやはらむといふ人も
ありしがいや〳〵それとは品かはりたるとてすこびたる人二三人つきたち一休の庵室へ
行は札の表ぢたがひはあるましけれと直々おがみや度いてこきまで参りなりとや一休出
お　玉ひ中々の事天眼通を得や候と仰られければ其中にすゝみたるものすゝみ出やける

と是れ〻つゐにてあるべし虚空の事思ひもくらず先この扇の上よりあがりては覺われと
ヤけれバいとやすきことなり去ゐから其わふぎの上へものらんと思ふ心出れば乘る今日い
早天よりのらふとれそふ心なし虚空へものぼらんと思はねどのぼらず重ねては出ゐれの
ぼらんとおそふと況上りて見せんと仰られゐれバ皆人あきれて歸りゐる其中の人ヤゐる
はいのよしても一休おり人のあまりよいはんとて天眼通を得玉ふゐ〻ふをおかしくおや
ーめしいましめ玉ふなりと感ゐて歸るとゐり
○或旦那きたりてヤけるゐはのは寺へ出入致〻候人々ヤけるゐ話則の一そくもぬけたるの
なゐどとてわれらの愚痴なるをゐなどり何とも迷惑いたし候間何にてを一そくはじひよ
示し玉へとヤけをば安事ゐりさらば参じられよと有ゐれば参ずるとは何なる事にて侍る
とヤすいや何ゐりとも佛の道ゐて合点の行ぬことを尋られよかしこはつて候とて佛殿さゑ
てはしりいづる和尚おかしく思し召見ぬ顔してゐたしけるせつなの間よ走り歸る況いづ
くへ行れしとのたまへバ佛の道ゐ不審あらばヤせと仰せられしにより佛の道とて佛殿へ
行ゑ道なりとぞんじ一走見て参りましたがいのよりがてんのまゐらぬ事こそ候ゐの山門

の邊りの松に巣をかけて候が何の巣とも更ゐ合点まゐらず大方鷺の巣とも見況て候得共
ゑのとわきまへす候とヤけれたいや〻〻このらすこそ今時分よ巣をこのくれとのたはへい
やゐてものは事ゐは慈悲をたれて示し給はをゐヤけれど其儀ならばたしお況持てのぼり
見玉ゐと仰られけをばこのものいそぎのぼりて彼巣をおろし見れどなのに鳥の子をなく
何とも見況ぬなり一休何なるぞとのたまへバ何も中ゐはぼざなく侍るとヤせど

鷺の巣をおろしてみれはからすよ

てきゐつけて見たまへよ〻が一そくなるとおはせられゐれは彼ものなか〻〻何ともつ
ゐヤべきこ〻ろとゐくとヤけをど一休仰られけるはりよなるとは我も汝よ一則さづけしら
すへき感えなしとし況し玉へどこのものおどろきさては一休和尚さまも仰らをかたと侍
るのとヤけれど自感自佛と答へたまへどよよ手況うつてかへり終に自得しけるとゐり
○洛湯よりある遁世しやゐりゐをゐると況一休の草庵へたづね行い参めて見参ゐ入奉らんよ
しヤゐる折ふ〻和尚は病氣ゐて此間はたをゐてもは目よの〻る事まこのりならずしは用の
事もとかくかさねては出ゐるべき由ヤ出さる〻よ此坊主のさねてヤやうは病氣のよしは

尤なりしのじあがら立ながらは見参よ入ぬきよしたつてゞけり一休かるきは僧もゑあそ
まゑきといゝさて臆したりとおもゝれんもいかゞとやがてたち出たまひたい迄んした
まふ此坊主ゞけるゑ某ゝ洛湯よまこのりある坊主にてゝ天台の法門をもかたのとくうけた
まはりてゝしかれどもは坊へすこし不審をゑづねゞたくそんじ参ゝ一休ゝのあるふしん
ばゑゝや我等は愚僧の身ゑてゝゐゑゝいろゑの講釋もしらぬべら坊にて返答ゞさんもおも
ひもよらざる事ありゑのたまふ其とゑ僧のゝばくゝのなる埃りこれ草木成佛一休答へて
云く艸木成佛よりなんぢが成佛をゝるゞや又ゑんせいしゃその成佛はゝのある所にのある
一休なんぢが心にとへと答へたまふときゞやがて此坊主閉口ゝて歸りける自心の成佛をも
しらずしてなんぞゞ外をたつぬる事愚なりたとへゝ盲目が黒白をわらそひゑんからが月
をのぞむよさを似たりそれ道人といつゑ生死の一大事を心にかゝてゞゝのりんゑをたし
そゑをそるをゑそ道人といゝふべきにおのれが心をさへ悟らずして外を求といふぞをかし
とて笑ひたまふ

○一休和尚ころしも春の半の事なるに花にこゝろをゝせ玉ひて幾枝もあつめ花籠わたてま

じへて酒など参りこゝろもわかゝゝとなりてゐたします所へ一休の旦那の奥がた参りけ
るよくまそ來り玉ふとてさゝゝおぞそゝめおのしたとなぞはとゑゑ云ありてゝひたもの酒のみ
て遊ばれけれど日もとゞや西山おおちまちのたつきをしらぬは寺ゑ彼女房もべんゝゝどと
なし居ゑる和尚いのゝおぼしめしけんまよひとはとまりあれと仰られゑる女房のゞける
とのりそめに参りながあそひ仕ゝそへおあとやらん似合ぬやうに侍るゑ一夜とまゑゞさ
ばうき名やたちゞべし其うる夫ある身の事よゝへばいのゑ心とさとおもひのなひがたく
侍るまづはいとまゞをとて立かへりしを一休袖よすがゑゑらにこゝひとまゑ玉へと引
ゞゝめ玉ふに女房ゞやういまゝでゝ一休さまと生釋迦のゞゑゑ思ひしがわらとゑはゝ心あ
ゑてとゝめ玉ふかゞ狂がるおゞせのあとゞけれゝ一休笑ひ玉ひて其方へ心をかくればこ
そ愚僧も是非にと止めゞせ心かけぬ者がはとまりあれとゞものかと仰られけれゝ沙汰の
かぎりゞ夫ある身がのゝる事侍るべきかとふり切て興ゑ乘立かゑり給るさて夫にあひて
一休と佛のやうゑ思ひそなた樣もれぼし迄さんがいたづらなるは坊なゑわらとゑ酒をす
ゝめ玉ひて今はで引とめ剩さゑこよひゝ一夜とまれとのなに仰られ給るかならずあの寺

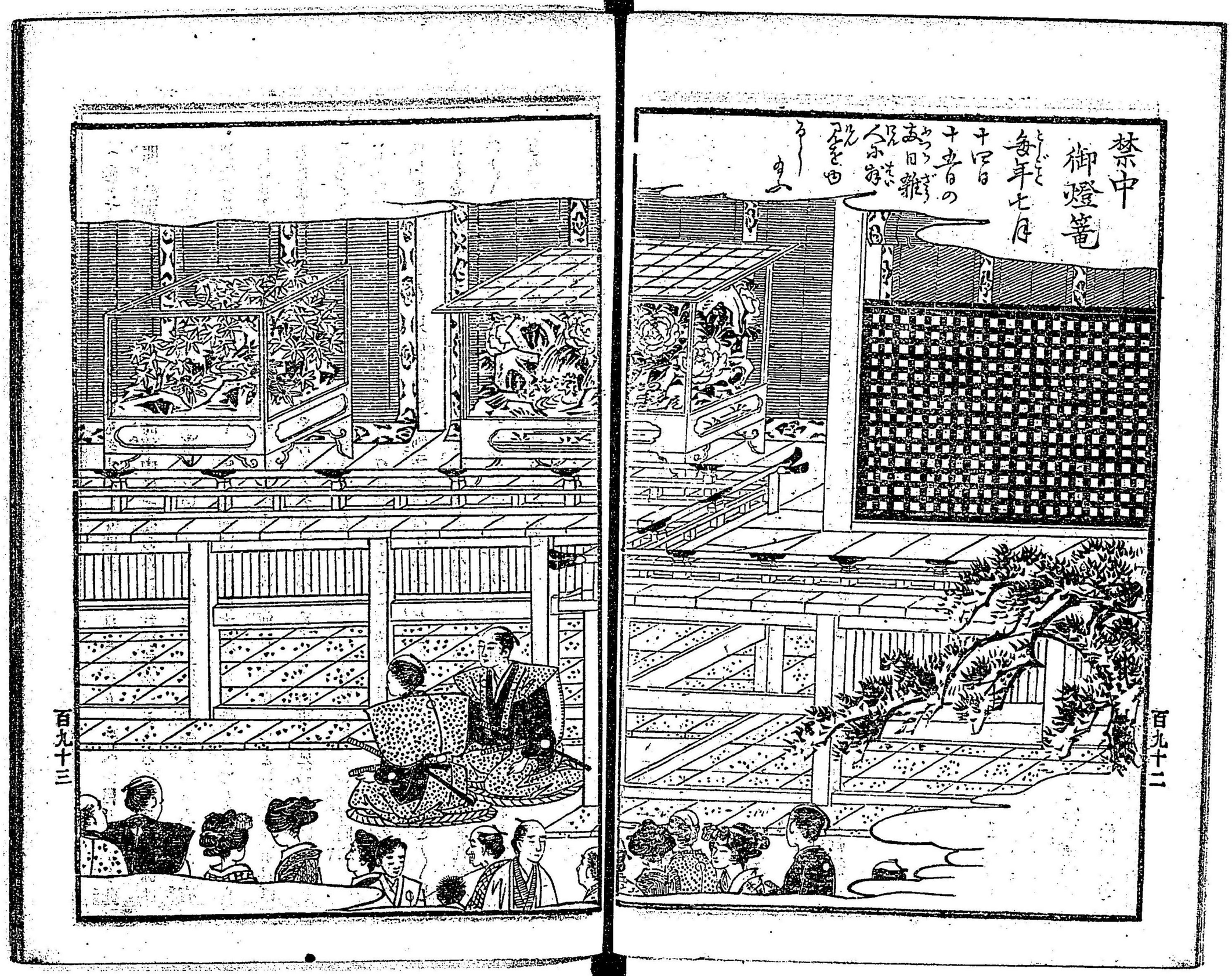
へ参り玉ふなと二心なきいおん誓をりかへ〳〵やける夫いさるものゐて手を打てわらひさりとてゝ佛おり汝がかくいふを斷なりよく思ひ見くいのなるものにても我をたのむ旦那の女房になれ〳〵しげゐ一夜おまれとゝなか〳〵出家の身よていひがたしよし一休和尚と枕をならぶれゝ今生後生のうつたゑ成べし我等をこのね侍らず急ぎ行て一夜遊びたまへなゐ〳〵の誓言ぞ我等のねたみ心となしとやせゞ左あらば引のゑし参るべしはよろこびあるべしとやけれゝ急ぎ参りてもる〳〵と和尚をなぐさめ玉へとやおれゞ女房よろこび一間の處へたちまもりおしろい口紅きつねの化たるがとく引つくろひ衣裳をかざり急ぎ興ゐれゝ一休へまそ参りけり一休とや寐玉ひしに門はゝ〳〵たゝをおどろき立出玉へゝかの女いかゐを細々としたる壁ゐてさきよと是非に一夜とまれと仰られけれども夫の心うこゝしてふりきり立歸ゝしが余りは殘り多くて夫ゐんとまを乞ひへと苦しのらんとやもゑおゝとづこのしながらおまり引参りたるとやせゞ一休いや〳〵もとやんやゐていはこのへりゐれさゝ程とおなゐへ心ゐしゝたるがとや心か〳〵らずいとやはこのへゝとゐれ〳〵とて門戸をのたくしめ音もせずさりとてゝはなぶりいこのとやおれどもゐへて音もせ

ず是非なくこのへりて夫にしの〳〵お語けれゝざあらんと思ひけるこゐゝて笑ひて天下老和尚之心うおくとさゝ動かゝうゝこのざれゝうゝこのしたまゝずもとやいやとゝ誠ゐ行水の如きは心やいさぎよし〳〵とかく凡人ゐてゝなしとていよ〳〵尊みゐる

○扨一休和尚の時代までゝ方々の寺々より七月十四日にゝ大内へ灯籠献ゝゝげける大德寺にも開山大灯國師ゝりもゑゐゐゝてさ〳〵げしこのば後々まで例ゐなりやめがたくありけれゝ一休ゐむつこのしくや思召けんゐると沈大理へ灯籠をゐけるとて狂詩を一首つくり灯籠よそへさ〳〵げ玉ひける

性靈今日出來迎　雨露直供二万葉棚一
挑得灯明天上月　松風流水讀經聲

と遊しけれゝ　帝叡覽ま玄〳〵てまとゐ一休の詩ゐるものをやうなゝ灯籠をもとめけるなゝ自今以後大德寺よりも何方の寺よりも七月に灯籠をさ〳〵ぐる事あるべからずと仰出されけるとなゝ世の人これとゝ〳〵さてもく名僧のなか〳〵るは心さしにてゝ定ては寺ゐも性靈祭りゝゐるまゝ玄若あらゝとさこそかゝりたるとにてやあるべしいざ人々一休のは寺


禁中
御燈篭
毎年七月
十四日
十五日の
あつまり雑
人ふ家
ん
ふを四
ら
ま
百九十二
百九十三

へ参りて見物し末代の語り句ともおすべしとて四五人つれまて参り一休へは目みかゝり此
間禁裡へさゝげ玉ひし灯籠の詩洛中にて是のみさた仕い定処てこの〳〵るは忍ざしにいは
い性霊まつりを遊しや間敷いかゝ者をむいやゝ〳〵われらを三界の衆生をおもふもゑよ有
縁無縁の悪鬼をはつりて〳〵もゝ〳〵の物を手向いもゑ廣大無邊なる性霊まつり仕いと仰ら
れけるを皆人衆よ相違して此は寺よい見ゐやさずいが何れあてはまつりいぞとやおれば
こをより四五町みさをかをていと仰らる皆人やおるはとてものは事に見物仕度いは人そ
るられ下されてかしとやけれたきぞく成事をいひ玉ふ方々や人までもなし我等同道やべ
し水むゝ一玉へと誠しやのに仰られければ皆々ところびは跡よ付て行けれを東の河原へ
は出あつてこを〳〵見たまへとて両手をひろげ玉ふ皆々ぞこもとにていぞとうと〳〵し
けれを一休是見玉へとてそる〳〵と舞ゐ手をゐろげたまへども皆がてん行ざりおれをお
の〳〵は見物がおるまじたそといて死かそべし只耳にては聞われと仰らをおれを皆人あ
きれて立居たを一休一越調あげて仰られけるを

山城のうりやなすび城そのまゝお

たひけよなれや賀茂川の水

聞玉ひけるが是大なる性霊たおあてはおきかと仰られけれを皆人さても〳〵いやともい
はをぬは意やとて感にたゐてかへをける

あるとを蜷川新右衛門來て佛法ばなしなをーてあらひゐけるに一休の仰らるゝい今を
きの出家心ざしちすゝ佛は五百戒をさへたもち玉ゐ〳〵とかやせ処て其かず取の五戒を
ばよゝさをつべきとなりとのたまへバ新右衛門やされけるは眞に沙門はやゐおゝばず
俗のうへよてをせ処て五戒いたをちゐき事ゐおやゐ一休いや俗は是非なきとを出家よ
はもたせたく思ふを去おから目よ見て耳に聞もるもの五戒をたもちがたしをづか一尺
の扇さへ五戒をやぶるうへいまして僧俗生としいけるをのたもちがたきはとゝりおり
新右衛門これをさゝて此扇子さる五戒をやぶりいや中よやぶりたりこれ又和尚の出來
口にて侍らんいで一々とひやさん答へてきこのせ玉へいつものは頓作のはこのる口うけま
るらせんとやけれをさらを一々とひ玉へ新右衛門とゝで曰

如何是殺生戒　答て曰　竹を切て滑とはなさいるや

如何是偷盗戒　答て曰　虚空の風をぬすまざるや

如何是邪婬戒　答て曰　かなめおゝあはせゝや

如何是妄語戒　答て曰　繪そらとをかゝざるや

如何是飲酒戒　答て曰　開てさゝんさいゝさるや

こを扇の破戒ならずやと仰られおれど今おはしめぬに口ありけれども一入ありがたく

そんじたてまつるさりおがら五戒のうち偷盗戒のれん答よ不審ヤたくゝ和尚の曰いの

あるふしんゝぞや新右衛門のいはく古語わ

扇是日本扇　風不日本風。

ときくときこ扇とそ日本のあふぎをうおかしめ風ゝ日本ばかりとはのぎらず千里同風

とあるのらはぬずそところいかやとおもて一句ヤけを心一休新右衛門とのたはふや

ひとゝふ

君もなく香もなき人のこゝろわて

よべはこだふるぬしもぬすびと

とあるとしけれいさてもこきに口や先はもこゝとの問答をに六のしながら一筆あそばさ

れとて書てもらひてうのまゝ掛ものよそゝれけるとなり此の者もの都の中よ持たる人

ありこれを闘す

○或人一休ふて云く何と和尚さま世の中に化もれゝ人毎にさもそふ志ぎとヤもよそと覺

ゐ候さやうよて候や一休答て曰いや只中よぶらりとこたへたまふこのをとは大よゝらを

たてさてもに坊はきこゐヤそぬに返事かなそれ人の物をとひのくるに凡そ法こそ有べき

に中にぶらりおいふあいさいつねにうけ為まゝらずそれは人をおぶりたまふのに出家わ

は似合ぬきぶんや是非とも此うへは子細をたづねヤさで置はし坊主とはいはせまゝ識訪

八まんもに示現ゐれて大にいのりヤゞる一休この有さま娑見玉ひさてもゝ其方ゝたん

きなおそろしき人かなそなたのやうなる人とゝものゝ咄しもならぬ子細ゝ其はなしくゝ

ふといふ氣ぶんあり先ゝく合点しておみやきそなたはそのゝ不思議をとふもあよそなた

へ幾度もヤ聞せる事なるお同じ事を又はいひ又云おめさるおがてんのもかぬ人かおとお

もひて只今のやうに返事いたす事之ろれもれゝふしにを立れはふしき不思議もなきと思

へむふしぎ成事ハ一ツもなしまた佛も神も有とおもへとあり無とおもへとなしされはあるともあらず無にもあらず扨あるときは中ゝふらりといふ物でなきかといとるれば此人手を打てかんじ者るとなり

一休諸國物語圖繪卷之四

○一休和尚の御弟子に雲知坊といふ者あり江州に住けるが年月幾經て師の御をとへとそらどんとて紫野へ參り寺門へ入らんとそるを小法師棹をもつてうたんとそこは何事そといはんとすをとも物かいはをすにげ去ぬ是といの成事やらんいす〳〵思ひたちて來りしがゐもなくむなしく歸るべきかとおもひて又行ときに小法師此うしいのさは思ふ事のあるやらん度々來といひてまつかたはらを引入つなぎれく其時我身を見れと牛なり心うき事かぎりなし是ハ日來の信施のつゝふかきもあるよてとれもひて尊勝陀羅尼おそーんせのつみをせう免つする功德あをとさそこの聞置て誦せんと思へどもならはざる事なれゝかないせ免て經の名なりともとなへんと思ゐども舌はりていはれず只そゝ免々ゝかと此牛は病のあるゐや卿もくはず水ものまずそゝめくと人言けをとも心うきに食物の事をもうちゐそれて三日三夜そゝめきーが心さ免のつもるおや尊勝陀羅尼といとれたりけるとき本の法師になりぬさてつあをときて和尚の御前に行ぬ和尚仰らるゝとは坊はいつき

たれりといひ玉ふに三日巳前に参りたりと答ふいづくに今まで有つるぞと〳〵ひ玉ふに馬屋にさふらふつるとて有し次第をのたまふる和尚不便におぼし召して彼尊勝だらにをおしへたまふるなんと〳〵此坊主得道し給ふるとなり淺ましき事なりおろるべしと〳〵

○江州志やうれん寺に一休おはしましける時ある夜ふしぎの夢を見たまふ其隣家に角助て一休へ夢中にのたりたやうにおもひ出れた死て雉子になりたりいつ幾日にと地頭よりは狩に出たまふさらば我命れたそのりがたし此寺へにげ入事はらはのがしてたべ生々世々にうれしとおもひん我もとよりはそんじのとくかた目志いたりしかは其折からなれた定見てきしのすき多く飛入る事あるべけれども片目しいたるをしるしにたすけたまへとものおもひたるそがたにてなく〳〵のたるを見て夢覺ぬあやしく思し召す所に次の日あんの如く地頭たのゝり有来るしかるにきし一羽寺のうちへ飛入め和尚に覺志て扱とのの夢に見つるに志ゝ是ならんと取て見たはふに彼かいひ志とく片目なーやがてのまの中へかくしてふたをなしさわちぬ体にもてなし玉ふとまろへかり人ちち入て爰のしを見志れども おら

ず力おくして出けり和尚此きじを取出して今の世繼角介に〳〵志うをくわしく語ったまへ

○角介なみだを流し此鳥をそらひ飼おろしたるて聞たべるふしぎなりし事ども

○江州に竹林寺といふ寺あり此住持生質脊低くして三尺ばかりなりけるがさる方に思ひ入たる美少年あるをしをひそのにのたらひ折々寺へ〳〵びよせねんおろせられしが何とかしてうちゑへ久しくきたらざれど此住持大に氣をくさらかし何事もうちとてね間にうちふしけるに下人少しのぶちやうはふありしを腹だちまぎれに枕をなげうちしてさん〴〵に悪口しける所へ一休もとより竹林寺はした〳〵れいたるらず來らを此体を見て是は何事をいひて腹立し玉ふぞまづ〳〵のんにん召されと何とをしいたされしやとやされければ住持ゐそのにのゐりてかや〳〵の子細ゆゝて此ろは打たへまゐらず何おぞしてよび度いか親兄弟の前をしのふよし承るが何り夫となきかこつけしてうちたへきたらざるはいかなる事そとひやを度候に坊ゐい才覺人なれバよろしく頼むといふに一休うちわらひ夫い何とり易き事おゝ此ころ澤山ゐある菜と錢と小糠とをすこしづゝ紙おつ〳〵で遣り玉へ竹林それていのなる事ぞ一休やさる〳〵いなせおこぬうといふ事なぞ竹林さいて一だ

んおもしろく候さらば明日いおをもたせやるべし今日は雨中にて猶さら心さびし幸ひ
坂本にて珍酒をもらひたり一つまゐられよ我もたべやうとて爲がにさいつさ〜れつ
酒宴なかゞゐ一休たつてかどらを茶るがせち哥に

君がゐぬとてまゝらがしろか。枕ななげそとがはなし。ちくりん〳〵ちんちく
りん。そなちくりん去やはどにきのそんとな。をどまいおんとさで。ちやせん
やあろさ

どうたゞかなで〜この為られけりおかしのりし事ともあり
○其頃江州鳥山村といふ所に六條なおがしどのゝ領分ゐてあまけるが久瀬又右衛門とヤ
家老どうとく心のもの成がもゐ百姓をひたものせぶまとりあまつさへ農具はでもとりつ
くすよまと百姓城のづこのら耕作もならず在所に住れずして一人ッゝ行方しれずのく程に
やう〳〵殘る百姓わづかになり何れもあれをなげきいかゝせんとひ去給ふあへまと其中に
一人がヤやういかに百姓あればとて是いあまり無道あるしやうこのゐ耕作は道具までも
とられでい何を以て作りをせん去かれゞ在所ゐありてもせんなしとても死する命なれど

此事を一先ぢつたへて其後いとゞかくもならんかおもふといのにとヤける此儀もつとも
と一同しさて訴狀を認むるわおにんでたれのれがいふといへども皆一文不知のものゞ
あてたれか書んとれふものもなし折ふし一休ちよ行玉ふを幸のとなりとて皆々立と
りて訴狀を書て玉れといふは一休きゝ玉ひて何事の訴へにやと問玉へゞしか〳〵のよ
ーをのたるよ一休聞ていや〳〵うれい訴狀まで迄及ふまし是をもちて六條どのへさゝ
げよとて歌を書てやり玉ふ

又もまたとりてもきの迯一村の
のふ具殘らずくせやとり山

とよみて是をつかはされければ百姓どもの、る事ゆて中〳〵とり上い事思ひもよらず
とヤけれバ一休いや〳〵これあてよー是非こゝをさゝげよと仰られて歸り玉へゞいづれ
をいの、わらんとおもへどもみな土百姓のあかぶりどものより合あれ之論ずれどもめ
づらしき分別も出されば是非なく考て彼うたをさし上げれた六條どのはらんありてめづ
らしき訴狀かな百姓の分とーてかゝる事い思ゞをゝらず定て人だのみて書つらん有のま

〜おヤべし若陳じおぢくせ事なりと仰らるゝとつて一休をたのみしよ一休こゝをわて事
足とヤせし趣をヤ上けれゞされゞおそ其おゞけ僧ならではゝ〳〵る事いばんもの有とも覺
ゆすと興ゞそせ玉ひて其のちゝ農具をもかゝしして百姓におさゝふの〳〵りしとゞ
扨も前冊についていて講談このたりつめ終り侍り去がまとおのやうに座をおなしちし詞を
かわすもをな他生の緣とヤそのいなす事もおやくあるひは役躰もない物がたゞに夜日
をあかーときをうつすは同じ事ながら日のつゐゐとさちいのに馬がゐひゐりとて人事
そしりてのたりわそぶいせんもない事たがゞおゞ罪よなりますれども此やうお講談說法
のまねをいたして一遍の念佛題目もとのうるいまづ惡緣ではなし座興よもおゞけにも
よい事のまねをすいぶんしたがよしとゝるゞはねばおるものよい事いちそわもまねられ
ぬつれ〳〵卿よも此こゝろをのいてれがをたゞふりたゞへい氣ちがひが丸いだかおな
つて大道をそしりゐるゞよなるゞゞど氣のちがはぬ人がおの狂人のまねをして見せんと
丸いだかになつて同しやうにそしりまゝらばこれもゞもよ氣ちがひといふものおり然
も其心い違いぬおれども形がうゞけゞ先誰を人ゆしても亂氣でないゞはいいぬたゞへ

内ゐ悪心があらふともまゝ身の行ひ心の持やう物のいひやうをまねびて儒者のやちゐ
身をもてた其儘じゆしやといふものなり扨内心い俗であらふともわたまをそつて衣を
着けさ袋かたちでもくびに引かけしやくでうふつて出もころさぬやうゐ形をもてばほ
出家さまなり誰か俗人といふべきや然をも悪のまねをすれば悪人善人のまねをすれば
善人といふものなりとかくといまねをすべしといまねとやたら身体のあらぬゐ金持衆
のまねをおされよといふ事でいおいせめて眞實より佛法えありがたい物といふ心いお
あらすとも身のうへゐまねをしてなゐとも善根をつむやうの手立てや事なゐ故に恵心
僧都は名利の二字を拜見し玉ひて

世をわたるはしと思ひてふみ見しに
まことの道ゐ入ぞうれしき

とゝませ玉ふ僧都もはじめとたい佛道をそれほど眞から底のらゐは思しめそゝず彼禁中
ゐおいて紫のほ衣などたまわりしやちなる事を手がひゐし人ゐ學文者といそれたや知
識となつて人ゐ用ゐられたやとひとゐゐ名聞利養ゐ修行し玉ゐたがいづの間ゐやら誠

の佛心ゐこのおゐゐ心がうこのひてやれ今までは名利ゐばかりこのゐいつて一大事の所をとり
失なはんとせしゝと急度心をとり直して見れば今かくのとく大道心の心いおこるはこ
しかゐの名利を求めんくとおそふて修行したるがもとゝおゐめれば世をわたるはし
と思ひてふみ見しゐそれがたねと おゐて眞の道に入たると此上もなきうれしさとゝ
はせられた此僧都さへい玄めと名利を心ゐの茶玉ひたとあゐ今ぞさの各何ほど後生を
ねがひだてなされてもさゐ今其方ばくびをきるがうれでゑ佛道が有がたく思ふかと釣
をふり上たらゞもとやすきと後生いねがひまほまひもるし下されとやゝ人多のるべし
すれば身命おしまぬ佛道者後生ねがひといいはれずもとゝり今生から釣ゐて身をさの
るゝといふい今世のちなる修羅道じやかちや悪僧などおのくそれほどの信心いれこ
りませぬ其くらゐゐ成てもひかぬ佛道者いまぞきとめづらしい事殊ゐ名利にそへ後
生をねがふと有はとのくまづ命かけるまでとちのひ事名聞に成共佛道願ふがまねゝき
と思しめしひたもの談義寺參りもなされたがよし又貧きもれもあらばほどゐすもよー
心くゐ叫ほど善根のまねをし玉へまねにつゐてはなしがほざるが次ゐ仕ませう

○さて一休江州にまゐりますときある寺の卒都婆がばけて八尺ばかりの入道となり〳〵そとだの影に立そふて居る下部のものどを是をおそろしがり用事をとゝのへる事ならず増てあたりへは猶参らずいのなる子細どと知人もあし或人和尚おのくとかたる一休その卒都婆を見たはらけるに文字のちがひあるさてはとてやがて改め書たてられける或ときくだんの妄霊夜半のあろあらはを一休の前にひざまづきてなみだをはら〳〵とあはして曰我地獄の中に入てさま〴〵の苦患受る事たへがたしあれば僧すみやかに救ひ玉へとさゝ泣わ〳〵とくどきける和尚のいはく汝圓通とり出て圓通おいたる何れの所おの地獄ありやと仰らるれい入道あたへて曰いやでくちうを論ずる事なかれたゞ此躰を見よ和尚のいわく其躰まつたく佛性同躰よへだてなしとのたまへど又入道ヤやうしのらと名を付てたべといふ一休れいとく本空追入禪定とヤさるゝとさ其まゝ霊さゑ〳〵とじて去せよ者り其後い二度出ざりけり一休におむらとれんが爲お來をりと皆人ヤあへるけるあはれおりし事おり者り

○あるとき一休病氣おておしをいた処のびのいをも自もうならず迷惑し玉ひいろ〳〵養生し玉べどもいたみやをかたーさる人來りてヤやう其ぜんぎい壇風呂がなにとゞもをくゝ其いさゝひ所をいく度をふさ付れはやはらぎて即時によくし私も此頃せんぎさしおありしを風呂にてふきしべい其まゝやそらきおくる日へもるゝと立おも自由よいたしい間は利の次郎太郎はのれなさをかれお其いたひとおろをゝくふかせ玉へとをしもるにさらばとてやがて壇風呂へ入玉ふ次郎太郎もとそに入げりさてかれいたひとおろをふけをとてふかせらるゝ二人のそのやがてふきにのりけゝ其ふきやうよちゝくしやちゝくしといふてひたとちたゝひてふくときに一休つゝくゝとき、玉ひて何との合点し玉ふやらんそのまゝ返答ゑ不奉公〳〵とあたへ玉ふ太郎次郎もふしんにれかひけれども主人の事なれどいかゝと問ふともならずしてうち過ぬおる人湯をゝけおがりかたそみにおてうゝくゝと聞てはらすちををれり此人がさどたまゝ居てあくる日和尚のそとへ行ヤげるい和尚さま夕部風呂へ次郎太郎を連させられば入なされいやされい此中はせんぎゑをめいひとくんたし居る所へおる人のおしへおわて風呂へ行てそのいたひ所をよくふのせよと者もへ夜前湯へ参りい其方い何とじて知りいぞいやさる人のいなしゑて夕部うけ玉ゑいじの

れば世よい風呂をふくものを多くぶのるゝものをおのきゐあんぞちくしやうくとふけ
どふのるゝ者不奉公くとおたへ玉ふはさてくめうらしきふきやうふかれやうと風聞
仕候さやうふきゝ又おたへ玉ふはいうなる事おていんそとゆゑれば一休それと次郎太郎が
ちくしやうくといふは合点まゐらず拙僧いきとり畜生おてもなしまたちくしやうと
いはるゝべき覺へなしいかしちくしやうなるーたざがもしあらば彼らが奉公のしやうが
ゐのしきもゐならんさるゐよつて不奉公くとおたへたることのたまへば此人おどり上り
手をうつて感じけるとおゑ

○江州堅田の浦お彌五郎といふ船頭一人ありけるおのがわざながらいやしけいとなみゑや
つれて一生が生穂の褥楫の枕をそはたて眞の道ふうとくして心ざしそながら名びとの
九重の花よりのそぶともがらゐいとるかおとりれのうからいやしきになれていを名のるべ
き事を露しらもこのたくなる尊きおしへをいちくやまされたいとわさましきとそがなりけ
るがつゐに身まかりて死ゑける妻子したひなげく事かぎとなくさてゐるべたゑわらされ
ど火おやせん土にやうづはんとかなしみけるせめていのなる知識をも頼みで後世のくげ

んをたとゐたゑと思ふ折のち一休風雲の行衛を思しめして浦のおたゑねまりおて四方の
致景をたの名をでおはします所ゑ妻子おれを見て衆のずそにすがりたい今のやうのわさ
ましきもの〳〵相果しがおとれにじひをたれて彼ものゝ後世のくるゝみを導きてたまれれ
かゝ生々の厚恩にてしべしとかな名みゐる一休おびんみ思〳〵めし何とん安き事おり引導
さづけ得させんとて此家に死たり玉ひ其ゝ玉ふ標てそふしんおれ先々死人を米ともおつ
〳〵めよとてたいちゑ入て綱とのけ丸太舟おかきのせ淵水の波にうかべけるれたにいたり
て聲とあげ高らかおのたはふやう

此俵はおれ元來米俵おもあらず豆俵ゑもあらず汝いこのたの彌五郎俵おり
江河にしずんでうくずのゑとおり佛果を得ゑ喝との玉ひ水の底ゑぞつ
さ入ける是成佛の引導之

○又一休堅田の庵おおとせしとき海ばたへ立出玉ひては毎日つりをたれては魚をとりてま
おりけるに門弟子兄弟乃僧達これい不律なる什合なりとて一休を一間のところへ上び入
口々ゑ異見しければ一休の日答くたちゑ學門切するとて何事をかし玉ふや我等を古しへ

の祖師の真似の禪宗の學問と心得たりしかれども例なき事ゝ仕らぬおいでゝ古の例を知らずと見せんとて何とよく繪はきやうなく蜆子の海老をつり玉ゝで喰ふ處ゝ繪

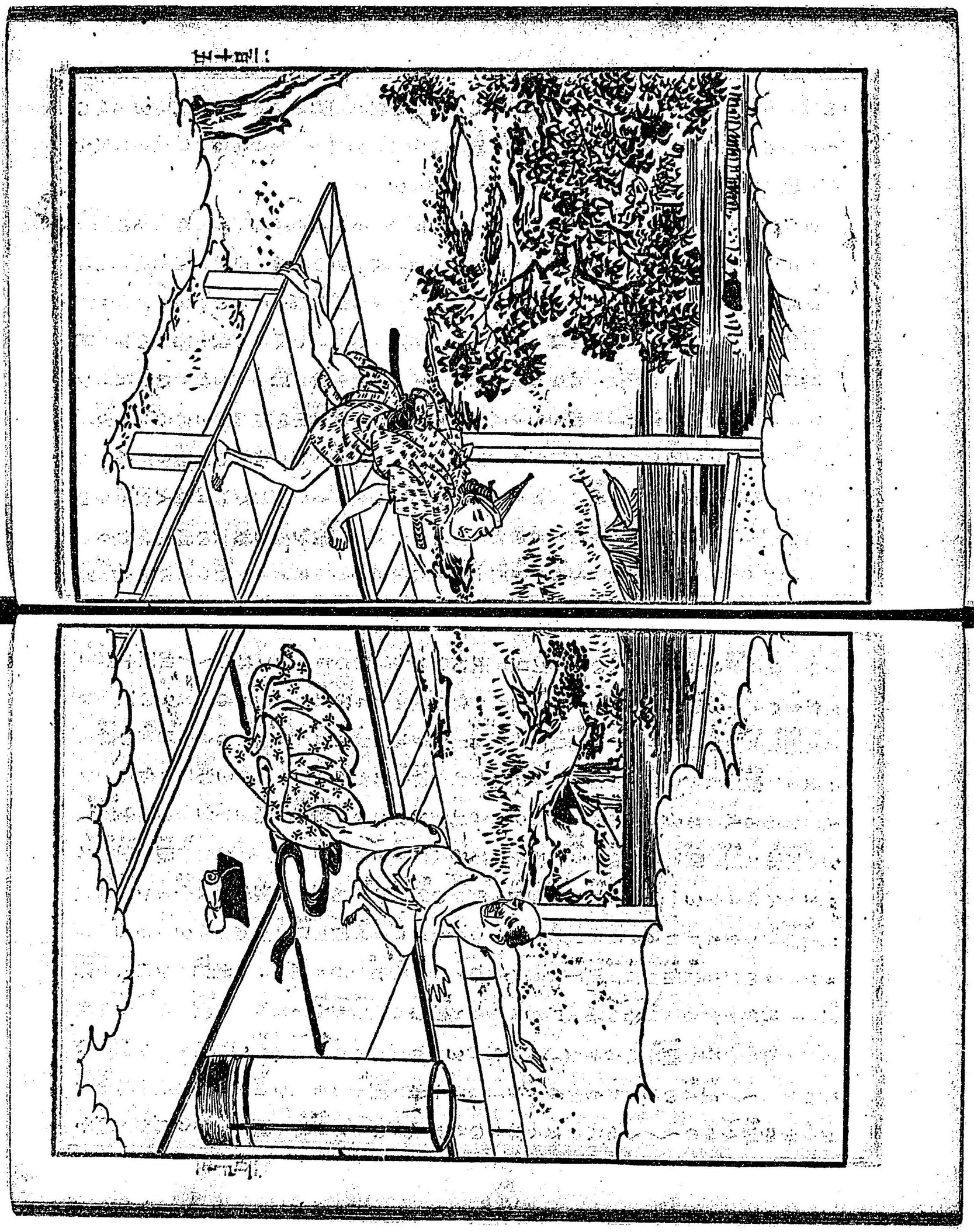
○此書一首の歌をかゝれける

いにしへの法をあを祖師しゝ蜆を釣し

我れゝおほうて魚をつりてくらふ

と遊ぶかの僧たちにもし伝へあらぬふりみて居られけるみなくの繪を見てさても奇容なる繪や見事なる歌の書ふりやと感ずる其中よりて老僧あざわらひ古の祖師の蜆を釣参りしとて貴僧の若さなりにて無をつとまゐらんと鵜の真似して烏か水をのむといひし類なりさて貴僧はこれ蜆子和尚のゑびつりてまいとしに心根をしろしめしけるこの中々及ぶ事やと笑ひれ一休少しもさはがず色塗もかへずそてく貴僧の愚なる心よりは蜆子海老を喰ふ心根がてんはまゐるまじそれ人は若よりもたらず老たるゝやうもたらず道みれぬれゝ老若はあるまじ老たるが悟道せば門外のむち犬と悟道すべし世尊も三十成道とうけ玉はる我等が祖達廣大師のいにしへを承るゝある時般若多羅尊者の來と玉ひて光明の

くやくたる璧をさゝげ二人の皇子に見せ玉ひつゝ心をためさんとゝれのく此玉を貴ゝ
ゝたまゝんやと問ひ玉ひしとき兄二人いまの璧にまさるたからと又わらしとの玉ひけ
るに達廣大師の七歳にて一の乙皇子なりおれども此玉は世寶みて貴ゝわらず智光の珠ま
そ又なき寶なれとて彼玉ばかりをうち玉ひけれ尊者れどろきゝるいとげなき身おして
ふしぎある人のなとて則名を達廣と付られけるゝためい菩提多羅とヤせしとかや達廣
とい萬事に達し通ゝて見かさ立たるやうなる人なりとの心とこゝろこれは悟道ゝ老若に
いよるべからずと一休手を打て彼老僧か異見の拙ゝ笑ひ玉へゝ老僧も人中よて込付ら
れ赤面してヤされけるゝのるゝ口ゝまのせてヤされたり如何に口れてはいおとても心いさ
もなきものなり貴僧い實ゝ蜆子のゑびまゐりしゝ心根としり玉ゝこの一休答へて曰中々存
知たり老僧ヤそるゝい各いかゝ思しめそそれ禪宗い真心偽心なゝいこので蜆子のゝ心か知
るべき蜆子の心は蜆子からずはしゝかたしとはさゝらへゝ皆々尤と打わらひて蜆子の
心いなこのくゝ凡人のもるべきにあらずしのしゝ休は蜆子よまゝてゝ覚しけるか一休少も
れくせ世扱々おのくもおろこのなる事をのゝ本我等ゝ蜆子よならねどゝ蜆子



の心はよく知りたりて言へばみな〳〵それとうはかたき返答ならん　佛法はれんとよおの〳〵は此一体が心なるとやれねん恋僧が蜆子の心になりたるのならざるべしれヤま玄と大よ笑ひ玉へいかの〳〵藤咲門にてもおげられげるとのや

さて爰ゐ善悪とも〻よ真似よとかと十事のはなしヤうちある人曾我そのがたとの淨るりあやつりを見物ゐ行き彼十番ぎりの虎がかもしろしとのみ思ひこんで彼五郎十郎が助經を討た所が不闘目に見もるやうよあつたときゐ日頃念頃なるものひとりきたりて酒に夜をふの〳〵てつひとよにねて前後をしらず高いびきしてねるゐ此十番切のすき男居ねむるゐ目がさへて寐られぬ折ふし彼夜うちの五郎十郎が淨るりをれもひいだしてそのしの祈經がうたれしも此とをね入つらめなやさみゐ兄弟が討ゐるとゐろを仕方して見んとふつと起てゐたりゐ刀脇さしゐるにはのぜ両鈔き込て其方れ工藤でなゐいの我こそ曾我の何がしなり親のこのたきのかさぬと刀をすちりと抜てながらね入たるものの討い死人をきるゐ異ならずのくもものたのにねるものの覺悟せよと枕元の縁におどりわのつて〻ふみおらせた此男目を覺考南無三寶とふんどしをせずよ〳〵げ行て次の間の屏風

の間ゐ飛のくれてふるひ〳〵さしゐどて去とてはゐたがひならんさら〳〵身ゐ覺ゐなし我は生たる鼠一疋ところしたる事侍らずと手を合て色青く其興を覺せしのはを見て此男をかしさのきりなく是いわやつりのまねをやと大笑ひにおつた各〳〵ゐとめるが此たとべゐありかたきといふい八万四千のぼんのふの敵ゐるきと念佛題目の利鈔ゐかの煩脳の中の大將無明や元品やといふ敵めい聲聞や緣覺といふ修行者さへ手ゐ余とまずまして〻なゐ方の千人万人の勇力でも行ぬ事じや是が行くらんならば何れもはねにおりとも名聞ゐ成とも後世願ねがいせられよ善人のまねを玄玉へとはヤさめとてもそれが行めにゐせめてもの事ゐよいまねを迄されとまねゐ成ともすれを今の如く人たがひでおざらうときもをつぶす敵もあをばとこそでい功をつみ德をのさぬて名聞の中と〻り眞實の道理があらいれて眞の道に入事が有ゐとヤ事を悪心僧都もくを〳〵仰られし事なりさて眞似にも物事さま〳〵多けれども此やうゐ經文のそしくれでもよみたゐ聞たりするまねが其中ではよし少でもとるゐまねゐどせぬがよい世話ゐ佛のまねはすれど人まねがならぬとんゐ金持どせやや位高な衆のまねおのが分に似合ぬまねがならぬと

いふ事じや今の眞似といふも其やう奇者のからな形すがゐのまねでいな去人心内を
あしく持すかたちにより取まはし煩うつせといふ事を宗たゞ
のしてゆうつせをなどかうつらざらん
花の色ある山ふきのいろ
とゝみゐるやうつそあず又まなぶと思はゞ品形はめん〳〵の生付貧福と過去の業
心はおどの〳〵しきとりのしきよ宗つさをうつらざらんと書たるをよく心得て眞似
なさきよと中事之今の聞まがひなゆやうよ身を持玉ゐ又まねゐ付でおのしきとなし次
にやませ宗

○爰ゑ一休の時代ゐ蜷川新右衛門尉親當のといふ人ありけるが禪法に身をやつ去心をなやま
しけるゝ一休の發明なる事をきゝ及ひて導師とたのみ奉るへゝとてあるとき一休の草庵
へたづね行柴の扉をほと〳〵ゐゝくゝ折節和尚出たまひていかなる人ぞと問ひ玉へはい
やくるしうもいゝず佛法修行の大俗はゐりていおやされければ一休とやとゝたまいく
おんぢはいづくの人ぞ　答曰和尚と同國

國には何事も侍らぬか
こゝはいづくとかしるや
いかんとしてか染けるや
ちりての後はいのん
原には何事か侍る
烏はかう〳〵雀はちち〳〵
ひらさきゝ染たる野邊
尾花朝のほ紅菊柴蘭
宮城野がいら
水は流れて沈々風い吹て颯々
よき哉やまれ〳〵と請茶をまゐられとて
おゝをがなはゐらせたくはおもへども
達广宗にい一物もなし

返歌

一物をなき煩たまはるまゝろこそ
本來空の妙味なり者り

とやされければ一休のたまひけるい聞及び去より蜷川どのにい道心者ありとて感せられ
けるさて四方山のとおし渦て親當やそれけるゝ少し承りたゆ事あり邪正一如といふ心得

はいかなるがとく侍るや一休聞玉へとて邪正一如の心を

生れて死ぬるなりけりお玄なへて

しかのもだるゞもねさを杓子も

又問空卽是色とはいかん答へて

しら露のおのがすがたの其まゝに

紅葉にれけどそれおゐの玉

又問色卽是空の心い

花を見て色香かともゝちり果て

こゝろなくても春い來おけり

又問世法えいかゝ

よの中ぞくふてゝこゝして寐ておきて

さてそのゝちてゝぬるばかりよ

又問佛法とゝいの成心得をゝしとし侍らんや

佛法はおべのさかやき石の髭

給おかく竹のとゝもずゝの聲

と一々問ふ言葉の下よ歌よみてこたへられけゝを親當舌をふるいのして聞及しとりたけき活僧かおと頼をしく思ひければいよ〳〵道を示したまれいつまで語るも濱の眞砂のおず〳〵なれゝ先ばいとまやそとてしばり垣の邊まで歸り來るが手をはたとうち立歸りて一大事の安心をすれたり佛よいいのゝして成けるゝとヤければ一休さやつゝくせものおなと思しめしそれはいと易き事ゝとてふんぞりのへりて目口をひろげてかくゝて佛よえなるよとのたまへゝ親當おゝろき活大禪師かなと心空及第去てこそのへヤ來る

○一休和尚ゝ奈良のたき木といふ處お折々はおはしまず其邊の村々は近衛どのゝ領地にて有來るが左近尉といふ家老百姓城ひたものせゝり取けるゝ百姓どもおれをなげきていのゝせんとひしめひあへり其内老人ヤ來るいいのに百姓にのたりきつゝとても武家とえはるの違べしに公家の長袖なれゝ訴へヤて見んとて訴狀をたくみける所へ折ふし一休鉢城ひらきさよ出玉ふ百姓ども一休を請玄おの訴狀をに書下されよとたのみければ安事なり

いかなる事ぞやとのたまふよしかゝの事のゝしやけをゞ長々しき狀までもなし是をもちて館へさゝげよとて

よの中い月よむら雲はなゐ風
近衛どのゝよい左近なりけり

とよみて是をさらゝとしたゝめつゝのいされけれバ村々の百姓かゝる事よて免多くたまはる事思ひもよらずとヤ者れを一休むらさら此歌茂のみさゝげよと仰られて歸り玉へバせんかたなくあれをば館へさゝげ者れバあれと何もの〳〵よみけるゞと仰出され者る百姓ヤ者るゝ薪木の一休の作ゐてひとヤせはその放者ならでとかゝる事いたん人今の世ゐ覺ゑずゝと興ゞ玉ゐで多くの銭を下されける

さてれゞ者たるゝ者〳〵ゐれゞそゐゐる座頭かゝ所て山椒ゐそせたるがおかしさにうはさしたをゞさのしき男居あゝせゝたくしそのまねをして見せませ宮とて手元にゐりしさんしやうを二三り宮口へいれてひとつふたつしわぶきして口をとがらし目を白く黑くなして舌茂すゝるうちゐ此男誠に宮せて息を内へゞかりゝて水を〳〵といふゝへ息いでずゝろりとゝこゐたをれて目を見つめゝるゐ一座にあゝしやゞのもの誠に宮せたゝゞゝ夢さらしらずさてもよくにたり眞に物のまねが上手きようゐ男ゞやうつりまそよいや〳〵ゐやめて心おゝあまりながきまねじやゝおもふうち炉の中へこけまろひたるにもまだゞきよりいまねと思ひたるに炉にてこびんをやきゐまつさゐゞまんのやうひげ者むりゝなしたる躰を見て是いまゝにむせたるやらんとゝはかゐみな〳〵れゞろきて水をのませ藥をもちひてよびつ者ゐ者がやう〳〵の事にて息出まつゐたま灰だら者なるを打はらひなゞしてさゞやくるしのりつらんと笑止がれゞ彼男へらず口ゐ何ゞゐまり眞似がねんいりて眞心のゝるしさに面目灰ゝはぶ〳〵ヤたゝ秀句ゐし大笑して座をたちまーた其頃ゝ近遠ゝ此さたばかりをなして笑ひしゝなり先此や宮なまねゝゝとんゝいらぬもの今ゝゝの若衆はゝかくいちざる役者またゝものもらひの眞似なゞをなし給ふ同し口てんがうならゞよみもの切ゝしでもゐそこで一日ゐゝで一日聞て庭訓往來山高ゝが故に貴方ゐ向て武道勝利城得ざる事子程子のいはく孔子ゝ大學のいゝしへゐんゞたゝへ取集めゝけゝなふゝ免ゞもかやうの口てんがうゝ聞安〳〵汲はうたひでゝ爰、一町

南山坪茅といふ山里ハ
一休さんやうをこゝにみひ
り川として往たり古名
とゝまず銀ヶ川とよひ
ゆへ今あらハ行ぎと
其川ハそこ〻ゝまの一
又仏里小酒屋有て
ゆゑなきたり一休和尚の
再来ゝて迂花の
地あり其辺ハ矢
外表信川田ヶ
谷の四段あり
ゆとゝろあり

て十番はどうとふくらゐでも余の口まねとりはき〳〵よしかゝそめゑもゝい眞似をなさ
れゝとゞゆ事ゑかやうの事い子どものときから親さちが心得てやういひきのしやりませ
先入主入とゞゆて子どものとき覺たるはとしとりてもわすれざるゑのなり

○一休丹波路へおもむき給ふある山里に二三日とうりう有けり在處のものゝゆけるはいか
ゑゐびのに僧この鄉境ゑ二町ばかり南鄉ゑ天台の寺のひが此寺夜るになればゑさましき
家なり志て色々ふしぎなる事どをあるにとり我すまんといふ坊主おし其子細と去々年た
びの僧たのみおきたるに去方より三年忌の卒都婆をたのまれ此坊主の書たるが其より時
ならず火焔もゆる其火の高き事一丈バかりあゑ鄉内ゑゆゑ及ぶずりん鄉二三里の外まで
ゑ其のゑをおしそれば其坊主をさま〳〵經多羅尼を修しとむらひしかどゑしるおれ
バいつれ頃か此事はづかしくや思ゑん夜ぬけして行方しれず故にこの里の女わらべゝ
るにもなれば恐れて門せどへも出られず其のち或坊主を入置しゑ是も三日ととらゐずし
て又出られ其よりわれ住せんといふひ志ゑとなおれどおのづからゐた寺となりくちはてん
こそ惜うしへ是たいかなる事よてやあらん一休聞玉ひてさやちの事いいかゞもあると

ゑそれは別のゑにていあるまゑ定て卒都婆の文字の書ちがへしもゐならんそれがし書な
はし參らせおバ別の義おるまじさらゞ同道ゆさんとてくだんの寺ゑ行見玉へゞ法華經要
品なりあんのゝゝ文字一字ちがひありあらわゑ書直し玉ふ其文字にいとく十法佛土中唯
有一乘法無二亦無除佛方便說とこのきこれを立おかれゝかさねて子細いあるまじとて和尚
ゝろゑゝり西國方へよゝろゞ志玉ふ其後い此寺無事になゑゐおゝりひとへに和尚を神佛の
化現なりたいいねものなのりけり

○又丹波ゝそのべよゑ三四町南の在所ゑかめといふ女あり母一人ゑゞ有おりその三四軒と
なゑの喜八といへる者の方へかねて緣付のやくそゝあゑしに或者いのなる意趣やあゑけ
んさま〳〵いひきかして契約返がへさせて隣鄉ゝりあるもの〳〵娘をよひ入けり此女ゑれ
を無念よれもひて病ゝとなり終に死たりしがこの喜八なるゑの〳〵のたへ亡靈ゝとにきたり
て恨をのべ喜八の者をしむる事たび〳〵にして其恐さのきゑなしさおからかのむかへし
女もおそろしくて親里へ引け歸れり喜八が親類此事をあげき神子山ぶしをたのみてさま
〳〵祈禱をなゝといへゞもさらゐ止ざり志折ゝら一休圓部にましますよしをきゝて此よ

し戒ねがひしに和尚破地獄の誦をのきてこれと喜八が首よかけねるべきまた家のうちにるべーとのたはふを教のまゝになしけるば其後ふたゝひ亡霊たちざるとなり

○又讃岐三木の郡より二里ゑのり奥の山里を修行し玉ふよ在所のめん〳〵ヤ者るゑ修行者にゑ何國ゑり來り玉ふ人ぞ此邊ゑ草ふのき山なれゑ元ゑり佛をくやうする事なれゑまして僧なゑにゝ一鉢の慈悲をほどこすといふ事もかつてゑらず誠に今生の罪人といふゝ我々が事ならんあはれ是にしばらく逗留はしませかし一偈一句の道理をもうけ玉へり活佛よまそならずともせ給て死佛ともならゑなゑいひて四五日もこゝゝおとゝゝ免置者ゑり一休ヤさるは是ゑり北にあたる松林の見ゑはいの成ところよてゝゝや在所のものまたへてゝゝ尋おくとも申上たき事ゝてゝあの林よつきてゝゝ物のたり有抑あの林のうちに古寺あるしかるにむかしより變化ありて其形何なもしれぬもの三人出てゑな〳〵おどりくるふいの成法師にても三日ゑ住せずして立のくゑ此寺古來ゑり由來ある寺よて本尊ゝ一刀三禮春日の作とやらんヤ傳ゝゝゝゝ尤什物もなのまたあるゑじなれゑかの變化にてたれの住せんといふもなきゝゝゝゝ僧貴ゝまゝませゑあゝれ變化をもしるゑぞけ玉ひて此寺よ住ゑたまとゝゝゝゝれにそぎたるゑろよびなしてくはしく語るゑれゝ和尚きゝ玉ひそれこそ一だんの望みなり佛道修行もさやうの寺をとりゑてゝこそ本意とヤべけれいづれもたれみヤすとやゝ〳〵肝煎られ玉へれとのたまへばいづれも大にゑろこびてやがて同道し彼寺よともなひ和尚ひとり残して皆々おげのへをりしのるよ其夜五更よきなれゑ聞ゑふたがはず人音して三人の變化出きたりおどりくるふ一番に出しゑけものがうたふをきけゑ

東野のゑづはいとしい事やいつをらくともおそゑもせいでせぼねいそんヒあ
しぢちをりて終おはのべのつちとなる〳〵

又二番目の化ものゝうたよ

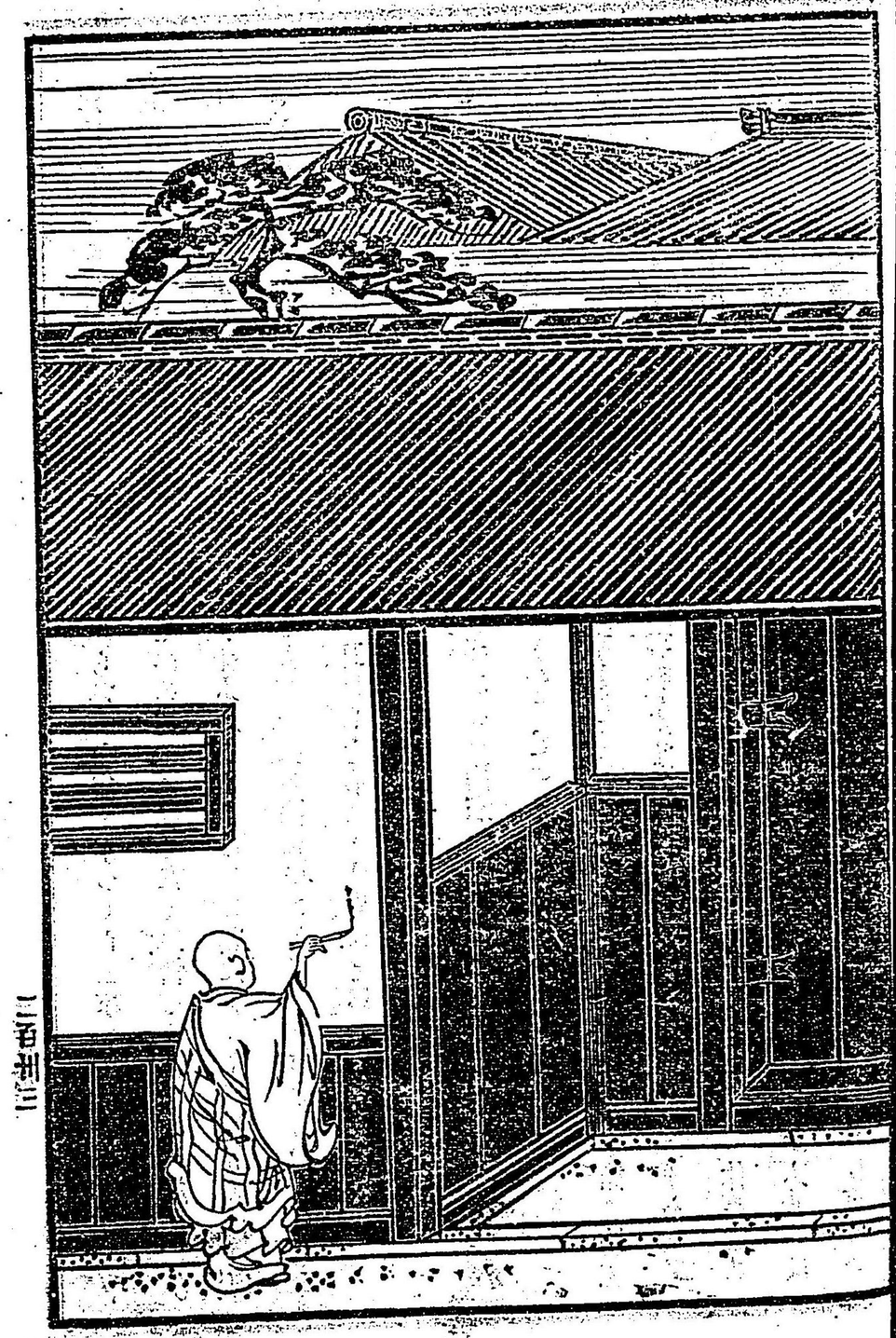
西竹林の者い三ぞくとあるのひもおきかたわにうはれ人のなさ者を得のうひらで
竹のはやしにひとりねる〳〵

又三番目の化そのゝ歌ゑ

南池ゑ鯉魚はつめたい身や赤水を家とゑ云きともそれたいつもぬれ〳〵ひや〳〵
と〳〵

とうたひひたそのおどりける一休一々合点したまゐ何さまきやつらをしまどゞけん事やすかるべゝと思ゐてさて夜を明し所の人々をよびよせ變化のやうをかさり先一ぢんに東野のむづといひしと是より東の野原より馬のされのうべあるべし又二番に西のやぶのうちより三足のわいかりあるべし三番にまをより南のこたより池ありて其うちわ鯉すむべしおれを取集め玉へとの玉ふゐどゝ人々ふしぎよおをひそれ〳〵さがし求むるに其ものみあゝありしのゝ一休其品を葬りて讀經し玉ひしかゝ夫よりかつて怪しき事なく一休すなはちしのるべき僧坊住持せしめ和尚いなは〳〵奥へと応ざし玉ふゝつて今よれたるまゝ一休を權者といはぬものゝなし

さて今ばんの要義と妄語戒のあらまし講談いたしやさんさて妄語とゝそたまにのたるあよみてうそつく事をいまゝ先たまふなり經わいはく妄語の罪衆生堕して地獄畜生がきに墮〳〵てくるしみをうくたまゝ〳〵人間に生るれい二種の果報を得る一わと多誹謗せられ二ッよは常に他人のためわたぶらのさるとあり此心はうそをつきたるものゝ地獄わおち又餓鬼道におちさてゝ畜生にすまる其わひた十年あらず三十年ならず百年二百年あらゞ何千何万年といふ限りなき間此三惡道をへめぐりそをよりやう〳〵出てたまゝ〳〵此世にて念佛の聲經をよむ事をちよつと耳にふれたる功德にゝつて人間道よりはれきてうれしやと思へゝ今の二種の因報とゝ誹謗せらるゝいふて誹もろしるとゝみ謗もそしるといふ字にて人わひたものそしらるゝ、むくひを得二ッに多く人のたゝおたぶらのさるゝと切ていの盗人めよ何のかのとだまされかゞわかされて手わ持たるものも人にとられ當分我が身のよき事と思ゐて談合よのる程の事皆のたりにあふて損をする又しても身躰を持そよおひてはたはれ手に取事も大ゝづになりつゐに身をくづして路頭わたいずゝ身となるを多人のためにたぶらのさる〳〵とゝ説玉ふなり何れもこれを聞たまへうそを付て當分人をたらすとゝおゝへどもむくひが皆おのが身よむくおてあたまのわがるとのないゝみあ大きなうそをつく故よ物と埒があかぬ事ありのりそめよもいつゝりをいはぬやうよし玉ふがたしなみ是わ付て商をおしやる衆のふゝんがおざるうそをついて當分後生がわるうらふあら私ともゝ得うのみますまひゝあるよりそれゝ又なせにとゝへゝそれば商ひをいたすのらえたとへ五十目いたす物も六十目とも



七十目ともやあとうらしい田舎男があをは此男をぬかすえぬくものは有まじと思ふて十匁いものを一貫匁といゝかけて九百目ぞあ直を付ても未ふうくらしきかはをわざとして思ふの者てまけるふりをいたし扨同一都同國同いなかの内にても商の功者の行程此やうなうそをやかけ又其外人の去らぬ内證算用あるの所でもとれながら是をのいて出るほゞなちと去やがとどんどなからすぎはひの事なをとやさねど埒わかすそて今晩のやうなる妄語のいまし処をうそ玉とればよわいすさま去い罪を得まゞおれどこれと何とも了簡にあたるまゞせぬがどふどこゝをを談合あされ下さりまゞせなんだかといふ人がでざる此ふしんにもなふて叶とぬ刺義あいひおんで侍る此うそが罪になるかならぬものせんさくと明晩いたして聞せまゞせう

○さて又讃州之柳原兵内とやゝ武士あり久々とづらふて醫術を尽すといへどもさらゝ其しるしなし殊之重病なれど最期近づきぬ折ふ〳〵一休郷内よましはそよし其かくをなく内々殊勝なるは坊のよしきゝ及べれいろぎつかひを以て此度とんとちの一大事成るべきのせ玉ふてすぐなる道へ引入たまはゝ有がをうべしとやつかはしける一休聞し召しそれとそ易

死に事ありとて其まゝつのひとつれて參らるゝ和尚とりつくらふ事もなくやぶれ衣にやぶる紙子の所々そのまゝはなれさながらとびの身ぶるひしたる風情もこれぐらはだましあらんといへる風体にて病人の間近くこゝろ給ふ家内の人ども日頃死ゝおくびし僧なれば何さま成佛安心至極のむねを聞べきと我も〳〵と次の間につめのけのうべをのたぶけ耳をすまして死く所よ一休あにとなゝ病人の耳に口をあて、大音にて曰ふい

汝とでお末期や我も行人もも〻く只これ一生と如レ夢　如レ幻

とのくいひすてゝかへりたまふ何れも勝手おは一門家の子あつまり扨も〳〵めづらしからぬ一休坊主のそゝめのな夫りん臨をすゝむるといふ事と成佛かんじんをいそ死かせて心安くおはらはるをこそりんじうの一大事をそゝるといふものあるゆかゝる語と坊主のいふ道もなゝ皆がんせんよ人とゆいふ事ありさてこ一狂の坊主かあと口々にやあべとかゝる處へあゝる出家きたり此よ去城死ゝんやゝ〳〵それと何れもの不合点なり一休やそはそしゐるこのやうの語あるいこのよも殊勝におはへしゐ物じて禪宗悟道の坊主なゝゝいふものは余宗あどのやうよあるゝと念佛題目をとなへ尊ひところへは參りやれあとがたき事のおはするあゝ〳〵いふ事い禪僧なんゝとやさゝえいのにそ〳〵右のすゝめしもしやうやとやければいづれもは去めてさもあそと得とくなし皆一同あのんじけるさては内に恩を深くからむりたるものゝそはさんおの廂死の面々たゞ〳〵なるゝと其用意とり〴〵よひしめきけるを一休はのこのまゝ〳〵玉ひて其夜門前よ一首の狂歌をたてら れける

世の中あ生死の道につれとなし
たゝさびしくも獨死獨來

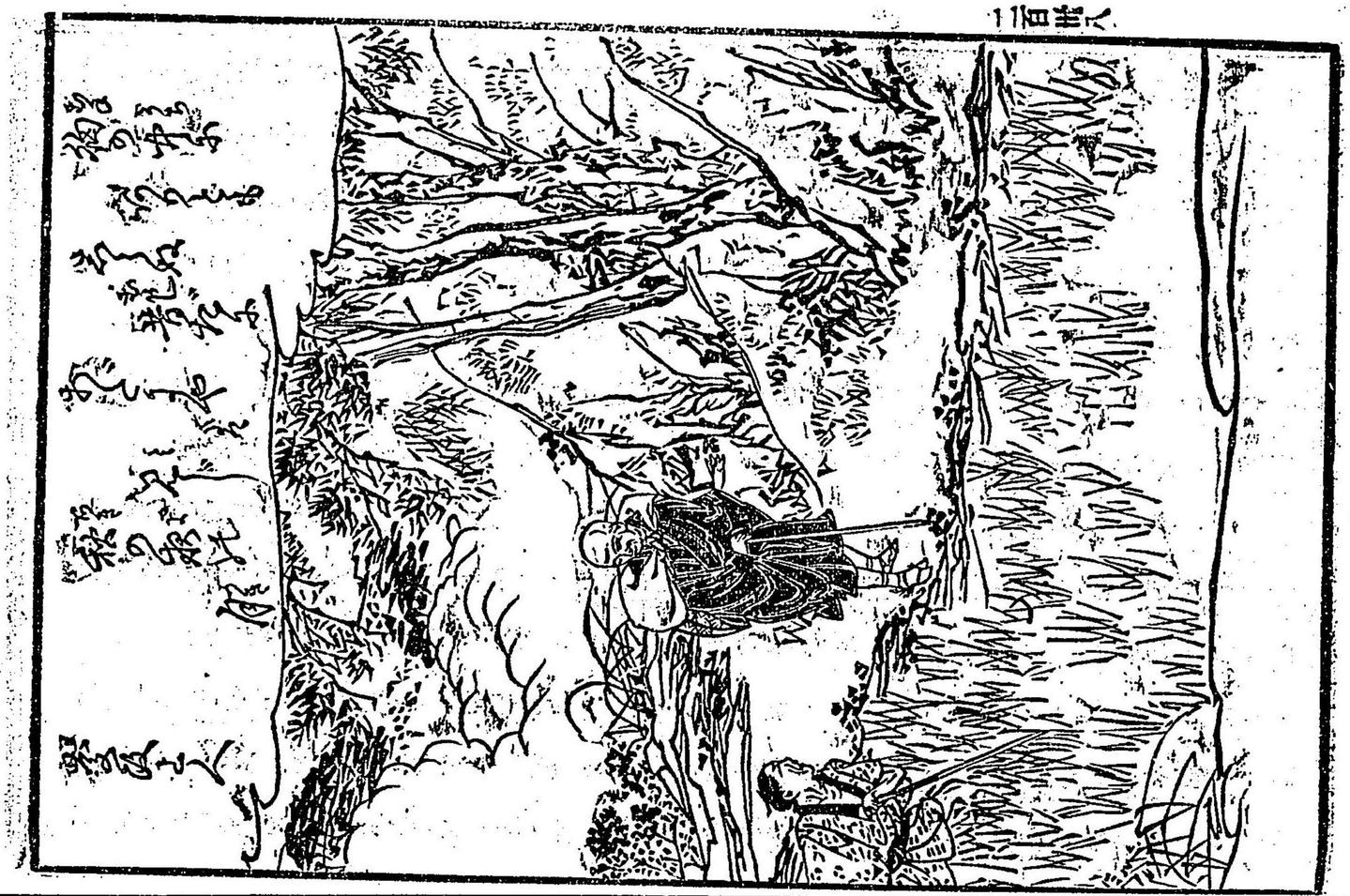
明れば内のものこれを見付てさつそく老士へきち出て何れもうちくりいのあるもの、立つらんとせんぎしける折のら又この僧やさるゝとこの作者別人ならず一休禪師よ必定せり實尤の狂歌かな此うたはそな人いひとり來てひあり死する身なればたとへ誰のれ冥道の供をそれとて便おはあるべけんや五十人百人殉死するとも自業自得過なれとめん〳〵の罪障よゝ百人が百所へわかゝ行て主人よ付從ひ行ものよあらずされば あたら若者おゝもを殉死なさせんを歎きて此歌を立らゞたるならん今殉死せん命をまつて世繼の君城守護なし玉えんおそは家長久ならんの理を尽してやされければみな此斷よ同去つゝこの

さねて殉死のさたいなかりけりさきは死そるに定りたる面々い一休を活佛と尊みしと斷りせ給て道理なり

○爰に一休津の國の山里を通り玉ふに二人の山ゐつ有一人は伏倒てあり今一人と畑をうつ父子なりとよりて見玉ふおむすて毒蛇れた給わさ〳〵れて俄わ死たり父なげくけしたもなく一休ふむのつてた房そのおはする道のほとりわ小家有ゐれ我等の内なりそれよりと給しを持たるべし只今息子は俄ふ死去たりさそれハ一人の食をかりもちて來れとヤてたべといふ一休ちかくとりと玉ひてうきと父子の別はこのなしろるべきがいかゐれを汝いなげきの色なきぞとと玉へを男こたへていはく親子鳥夜林明方々如飛去とこたふ此意い親子のちたりと鳥のよるとやしにとり合て夜あけてい方々へとびさるがとくとつかのちぎりとの間なれをおげく事おしとい心之一休それよりおーへの家に行くたんの通り遊女房にづぶそふかたらる〳〵扱とて三人のてしらへ置し食物を一人分をしおき只一人のばかり持て出る一休とひ玉ふと其死たるはおんぢが爲にといかゐとたとをけををわらいかためにと夫なりとヤて少も嘆くなげく氣色なし一休仰けるそれ世の中に死るといへを他人の身とし

てさへあはををもとふとふとみまーて夫ならばこの者しのるべし殊み女性とはかなきものなればいこのいあるべしととひたまへば女こたをてれはく夫婦契市人行合要事過方々如散とあたへて行過者りおの意と夫婦のちぎりは市おとり合てようをとーのへをはをばめん〳〵方々へちるがとしながらへそふべきものよあらずといふ心なり一休もふしぎの思ひをなしてさてもものやうなる山家よか〳〵る生死無常のこあいりをよくはきら給ゐる男女もありをるよと感じ玉ふ

さて前夜おやくそくヤた先うそといふおさまぐおざる其品々からヤそろへて一々道理をもつて了簡れたそかへそ〳〵此所をきくわど万事に通ずるかんをんのところくぶけれども心をしづめてきゝ玉へをの〳〵の德に成て永々の苦をぬける善根耳のあのをとつゝてうもんあれ先釋迦如來世に出玉ひて一切衆生に法をとひて聞しめ玉ふ物して說法の義式で先禪定お入て今い何をといて聞せたものであらふと分別なさるお如來の心にい手みをかわ三界唯一心の道理をとひて聞せんと思し召れてはじめよ花嚴經といふ頓大のおしえをおゝをて聲聞緣覺に說きのさしめたはひければをしつんぼのとく一



さい合点せずそまで佛のおをひ玉ふえ眞實のそねをとおて聞しめてと結句衆生等が合点行ずさらば氣ゐ入やうゐ何ぞ方便をとひて佛のまゝろゐい思し召さねども先當分の氣に合して何成ともつべ〳〵と口にまのせてとしぢのある事を取付て無事を有と說わる事を無事と說て見たりまたあるでもなしないでもなーとときむかしの物がたり今のとなしのやうに作りなして五十年の間にときなされた今時の人もさのしき評判わもいかゐ佛のにときおされたおても是いあまりなうそをつのせ玉ふといふ人もわりうりにさま〳〵ありといふがまゝじや先佛のうそとい今のやうゐ人機に合せてとゐも角ゐも衆生の爲の事ゐよのれのし佛になれの者と死心がれまれかしと善根そゝめの爲ゐにときおされうそといおがら其うそのにこのげにとゝて三界れ火宅を出るはしとなり生死のうみをおもる舟となてつねに極樂や寂光土や寶報土おどいふけつこうある世界へ生て苦をまぬかれて樂を得る爲のうそなれど先是はおつまうおうそでは侍らずや然ゐ世の中のうそといゐい人をたぶらかしておりともたりてなりとそおのれの爲のと死どのり心ゐのけて先そまの身体がつぶれうともくび切死られうともうまい中他の害になる事いかへり見ず其もの〳〵死のつこのぬやうゐうをつ死てたらそを世界のうちといおものなりうそといふ名は同事でいこのふ心持のたがふ事は天地黑白のそうゐが有まゝを分別去て見れど佛い人のよくおるやうゐうおうそを說れぬしの身ゐかゝはらず又ぼんぶのうそは己を立んとて人をたれすとのちがひがあるい格別のせんさくそて商人のうそゐそ先のけ直の事たゝし是い何を買者を見せよたちくるから覺悟して定て商人れくせのけ直ばいふて有ふほどにおちちらのらもよいのげんゐ直ざるへしとたがひゐ合点づくなれど先ゐも少し合点しぬこのる事てなし然は是はかけ直と知りながらの上ゐれど世中のうそのやうゐだましたぶらこのそとそちかふて有世のうそそ之をしらせぬやうつくなりまたある所の見世にい合点づくの上おれゞおそかけ直なしそら直なそと書付してれどとおろもわり其外いこのけねかあるに極るうへい少〳〵もうそといふ物てとないほどふかまへてうそとおもはずとも隨分とこのおねいふて利をゑるがこのんやうゐとなんぼ正直ゐ商しても利がなければ妻子をはぐくゞ事ならぬ或ひい旦那ゐ損のけ拂ふべ死所へそとらいずとなるがそれが結句大うそとなり大なる罪となて人のうらみをうくる事

をくせんこかぐすてををす〳〵生馬の目をくぢるやうな事い余りなれたのけ直といふやどいめん〳〵商ひする人のよ〳〵ろもちにあるべたとことよ出家沙門など高利ばたときば殊數のみとてそのまゝこのべりて其家滅す此あのたくらきを思案して渡世のための事なれど未來の事いきづこのひなし惣してがいよならぬ事あり人の爲にある事嬉しがる事おのしがる事面白た事心のやとらく事ん少くも罪みにならぬやどにとのく惡ひうそをつこのせらる〳〵なとのいましめておざるまゑ武士などにと謀計などゝ中事あり是と又別義ておざるがはれは追ておはなしやませ宮

○一休伊豆の國よてある山人猿を一疋とらへ柱にしばり付なさけなをもうちたゝたすで よ打殺さんとすべたとおろへ和尚行あいせふびんにおもひ乞取ていおゝやはたまふ折の ら裏の頃なりしが或夕ぐれにくだんの猿いちおどいへるものをふたの葉お包をもち來り 一休へさし出しける一休のともく思しめし布袋よ豆を入てとらせらるれはとりて歸はか さねて又其袋に栗を入てたたりみぎのとく和尚ゆさし出してのへりけるとなり畜生といへども命を助けられし恩のはをよくしれり然い人間の身として是非のわかちを知らぬ

いさるよとおとれりとかんぎ玉ひ此事を旦那がたよてのたりたまふすこしもいつわりのなきとなりけり

○又其ゝ頃猶右衛門といへる百姓あり常に百姓の業をなさず殺生をこのみ大酒博奕はいふおよぶ事其外已る此事のおもなく大いたづらなるその有常々猿をのひ置る然るに猶助といふ一子あり嫁をむかへしのち懐妊にて七ケ月といへる頃右飼おく猿何やらんすこしいたづら致しをるとて猶右衛門大にいかり猿を杜わ〳〵り付七八日も食をあゑへずせめけれど終よは飢死なしけりかくて此嫁十月に満て出産する處れ女子目つき面つき猿のとくわして全身しのも五六分ほど毛生てさながら猿のとき小見なりこを全く親の邪兄孫にむくふ處にして和尚まのあたり見玉ひしその物がたりおそるべし

○一休初発心のとき越後路へ修行よ下りたまふよ信濃上野のさかゑ近きとおろよ湯澤といへるところにて丈や日の西山わかたむくも名宿をこひ玉ふよ在所のものやうに房宿を求め玉ふならむむかふわ見も山中よ古き堂わをへ行一夜を明し玉へをへおがらかの堂わと天狗住よしいひて住持するものなく久しき空院なをその心して行玉へ和尚それこそ望む處なりとてやがて行て見玉ふわ此邊をべて山多くして陸奥乃方へ峯つゝいにて駒ケ岳坂戸山清水白峯松ケ岳なと〳〵ていづれも高山ゆりて物すごき土地あり和尚わの堂へ行て佛だんの上にあがり隠形の印をむすび心を去づめてれとしけるところわ夜半のおろうへの山より人ならを二三十人斗の音してさ〳〵めいたり來る一休そはやと思ひ見給ふ所わ堂のうちへそらがり入を見れば色白さ〳〵にげなる法師を手おしわかいのせて小法師はら二三十人前後をのこみて來りしが此法師小ばふしをらを庭に張ひ出してなんぢらわれわて遊ひいへといふすしおまつてをらく〳〵外に出て遊ぶとき丈此僧一休を見てそれわかくれ居いふ房おれへ出られいへといふ一休さてい見付られたりと思ひて何の用にいやとやさる〳〵いやい房の隠形の印のむすびやうのあしくも名見へやなり是へおいしませおをへやさんさらい物見玉へ所詮なきやつばらに見せやさしとれひ出したり先印むすひて見たまへさらをとて一休そそびたまへはよし〳〵只今丈見へたまはぬをといふてその〳〵ちい主従ともにうちまじをりて舞あそびわのつきがたわ奥山をこのへりけり

さて武士の謀計とやと宮そゑゝたれをも左にはゆらざる道理をおはなしやそふ侍いと

さらうそをつくと盗人と同し卑氣おれども敵をうつに謀計と智略とていろ〳〵とかりゐとがあつて隨分色を見とられずたゞのつてうつ法なり討負せると其実そもへお大國を納め名を上手がらものとよばれて官錄にす、むい見事なものなりてうど商人のこの者ねといひても内をはゞり外にむのつて損をのけぬと手がらと名付捨れたる家をゞたて人をゞゞふはのへつて善根となり商人よも色いろありて己一人よくあらんと利德を心耳かけて人の損失をのまいず手前へとり込ゞ分別むかりそるものい一旦の依怙ばりといへゞゞ終おは日月のば罰をかうゞるものなりとの詫宣をわすれずわれも仕合なし人ともよくなし平等お世をゐたるへしと心がゞたるがゞ一人お損のけて己が仕合をゞるはいろ品とそのれ二桝二秤をつのふも同し罪なれゞ商の内よもこれらの事ゞせぬ事なり是ゞ人お云らせず目ゞくらまそもへ買ものもしらずのゞねい合点つくなれは人ゞしりてねぎるゞのくすと明すとあらはれて有とのちがひにて罪にならぬといふ事明白なりさあこれでばふしんがはゞてゞざらふ

○一休關東心外寺よしばらくおゞせしが此住持もそのゝみ同學なれゞゞのしのよしみ殘思ひ種々馳走したまふあるとき一休とせんのあまゞ客殿に出て四方をながめておとする折のら地侍と覺云ゞ人供人四五人つれ來りて一休お むかひいかお ば坊此寺の寺號山號いおにとゞゞ一休こたへて山號は別法山寺號ゞ心外寺とゞ貴殿ゞいかなるば方にてましますゞ某は矢奈木雪折とゞて此邊近き在所もの之此寺をのね〳〵承りおゞびしま〳〵ゞ參詣ゞなりしかるお めづらしゞ寺號山號おりそれ三界唯一心心外無別法ゞして心の外に法なしいの成をの是別法心外寺とたづねるに一休とりばへず答へていとくそれ柳の枝に雪折なしいの成の雪折とゞたへ玉へば此侍大にのん云さても〳〵話答のしてき坊主かお我等は内々たくみてさへさしあたれゞ失念そる事お ゞ又いのつて出ざる事多しそく時ゞかやうのゞんとうせられし事あつれのば坊かなとゞそのんじける

○又ば雲水のころ駿州富士郡大石寺に知音の僧おはすゞてたづね玉ふゞ互おなつのしう思召しゞらく足を留め玉へとて少しの滯留ありしより近村の凡俗を集め寺僧の法談などし玉ふを助講おとありし折のら隣ゞ村に村山といふに喜兵衛とて大百姓ばゞ常ゞ際なる身おをゞ殺生のみ樂みとせしが庭先の柿木に鳩二羽來ゞとまゞしを得たりと鉄炮とり出し

たちまち一羽をうちおとしける。一羽の鳩れどろき飛去りしがまた元の枝へ死たりとまどし嬉又も玉をあめかゐ同しく打落せしがふと一休和尚の法談を思ひいだして鳩ゐ三枝の禮ゐりと問しがまさしく此鳩はつがひのいとゐしくして雌をさきへうち去や雄を先へ取し事や殘りし鳥の元の枝へ來りしと死を共ゐせんゐ我が玉てきを待し事うたがひなき扱々鳥だにも夫婦の約あるものをはれに人間とうまれながら殺生をこのみ是までゐまたものゝ命をとるを樂しみと心得ー業因のゐぞおそろしやとたちまち發心して一休のもゐへはゝり行若きゝりの我がゐやはりをざんげ去てはかみそりをさづけさせたまへとて其座ゐて剃髮染衣の身となり全證居士と法號を字け明くれ念佛三昧に入八十有余の年齡をたもち子孫榮へゐるとなり其とき法名を下さるゝとて

おゝろよりくゐよこのゐたる傀儡師
鬼をださふゐ佛出てふと

○さてゝも因みゐはとなしやさふ鳩といふ鳥てそれゐおよゐば親子ひとつ木ゐ宿をなし親鳥のとまりたる枝ゐ三枝下なる枝ならでい子鳥と宿らず又鳥ゐ反哺の孝ありといふ事もあ

りてれい生てゝゝと百日が間い親鳥にやしゐはれ百日ゐをつれば親と同し形となり巣をとな孔餌をひろふなり其後百日が間親鳥へ餌をくゝ免かへす鳥なりとつて昔より古人の文にゐ出たるぞかし鳥ゐさへゲ樣の禮孝あり人間とうまれて忠孝のふたつと大切につとむべきの第一なりやゝもすれば不孝不忠のもの出來るを神も佛もこのなしみ玉ふて鳥ゐさへおとるぞと示し玉ふはぞゐ鳥にをとり玉ふな形こそ人に似たりとも人をといひがたき必ずしもそれ玉ふな古歌に

父母につかふあふぎのこゝろめのら
しだれ〳〵にする廣ふなる

何事もおやの心にかのゐさる
こゝろの字しんの人といふなり

○越前の府中に長野銀助とて馬上の名人あり一休編非とり上り此府中に二三日とうり字して萬をとり行ひ玉ふゐ彼銀助きゝおよびたゝ齊も上ヤたーとて和尚をそのへはゝ齊もすぎて四方山のそのがたりのところさる方ゝりとね馬を曳てきたりは六かしゐながら此馬を只今一

馬場せめて玉いれとヤ丑やす死事なりとてやがて馬引とせのらを去が此銀介とヤは元來せんきの病にて陰嚢大ゑ腫たりけるが鞍の前輪わつかへて事のやかのりよくきや宮すを一休見ておこのしくれもひ

はね馬のまゐをよかゝる大ふぐり
きんふくりんとおれをいふらん

とゝませらを名れむ銀助大に興じ者るとなり

○又下総國相馬郡を通り玉ふ頃和知川といゐる水上に大ぬまあり此近村ゑあるものゝ妻十二三歳なるまゝ子むすめを右の大沼のほとりへつれ行て此沼のぬしゑヤけるは此娘を其方へ參らせ聟よし參らせんとたびくいひけりなるとき又件の沼へつれ行かくのときいなけるに俄ゑ空すさまきくなり雨風しきりよして沼乃水立すさまきき事かぎりなくいそぎ家へつれ歸とし物のあとより追くるやうゑれはなければいとくおそろしく思ひの娘父に取つき日頃我等を沼へ母のつれ行いひし事をこのたるゑ其夜大死なる蛇來りてくびの上ゑ舌をうおかして此むすめを見ていしをらくありていきせぬる事度々なり爺親此事おんぎゑ思ひいのゝよあらんとなげきこのなしむ其頃一休同國ゑまします事國中ゑのくれなけれゞ知識と聞たづね行因果の子細を語りあのーあみだを流して賴けれを一休さてを不便の事やとて猶もくとしく尋玉ひさらば我文を書て得させんかさねて蛇死たるとき死此文をとなへ聞このせとを二度死たるまゞとて其文ゑいはく

此女我女也母繼母也無我免爭可取

このくとおへ死りそべし重て來るまきゑてつこのいさるゝ此文の心い此女めは我子おを母はまゝとゝなを我のやるしおくてはいかてかとるべ死といふ心なり男をろこびくだんの蛇の來るゑ待ける所に又をんの如すさまきくして來るされとおそとおもひさづこのりし文を一々となへ聞せしのをたちはちきへて失にけり畜類といへども物の道理を能わ死まへ二度來らすゝて中傳へ侍る

前のつぎを中ませうさて人間といへいれなしものこのとおもへを人間ゑもさまゝ品位よちがひ都上蔭どんへばとれもうつくしひかと思へを田舍ゑもれとるを有佛といへば一佛よかきらず十方の芥佛ゑを五十二位のしや別がわかれ其外よも名と同し事でもさ

まぐちがひがある是を同名異躰の法門とやすまたやさバ五逆といふ佛の身より血を
出すとがも其内じや釋迦の身より血を出したるものも彼提婆といふ惡人大きなる石を
なげて指より血を出しそれも忽地ごくへおちられたそれでわるいものハ提婆じやとい
ふなりしかるに釋迦如來の入めつのとき耆婆といふいしや何とぞ今一度蘇生玉ふべき
かとさまぐ療治の余り針をたおしみたて〻血を出したさバ提婆があくと同じやうな
地獄におつべしと思ふ所に案に相違し結句血を出した功德によつて天上へ生れて勝妙
のたのしみを得た愛をもつて合点したるがさい尤佛の身より血を出した事は同じ事な
れども提婆は佛をそね見て血を出し耆婆ハいのちをしみて血を出し取たる血をい
だす事ハ同じ事で心が格別なによつて地ごくと天上とれちがひハ出來るまづそのごと
うそをつくハ同じ事でよい事のため人のため善根のためにつくハ同じうそでもよいぞ
といふ事をしめさせられんがために提婆をバ地ごくへ落しぎばをバ天上界に生じさし
たその心や是もまづ經の心なやうそをついてもつかいでも事さつかぬがよしぜい分
とりちぎにつとめたが當分いつハりかざりたるやうに見事にあけれ共神佛のたゞ心にの

なふなりかねるハ現世にも福とくを得後生にはおくらくへめでたふ往生し成佛をとげ
常樂我淨の四とく波羅ミつのさとりをしやかじやのじひやの念慮をなし常住不退に微
妙の説法ちやうもんしじんぐまそくすゝみ後それのづからまた衆生利益の心もお
こり玉ふべしわらうらやましの境外や南無あみた佛〻さて此度おの〳〵の望みなり
五戒講談をわらほしのべましたとかく大悲經の中の種といふ種の字をわすれず惡いた
ねをまかぬやうにと死たねをまのせられよかしも今一冊ハ恐僧がこゝろミの法語あり皆
人々の文をみて邪見外道の思ひ彼なして直に活佛となり給ふおしえを書のこしませう
○ある〳〵に常州德念寺とや淨土寺あり住持の長老の旦那にて有けるがいの〳〵おもひあん先祖
より代々淨土にてはが不斗禪寺へ參り久しくわづらひて程なく死けり其子すなはち禪寺
の住持になんどうを頼むよしをかの德念寺へのかたしして中々先祖よりわが旦那にまぎ
れなししかるをなんぞや禪家へわたしてなんど言させん事前代見聞の恥辱なるべしたと
ひ此事に於てハすくひにおほふとも我が引導せんものをと思ひ定て在所のもの其外あふ
れものを二三十八ぞのりかたちひをおんにあさんとひしめくを此よし禪寺に聞えしのバ

法印寂蓮

俊成

いや〳〵さやうな六の云ひ死人を取おかざるとても何のいくるしかるべし入らざる事なりとて打すてぬ三十五日のとふらひすきて此德念寺俄に狂亂して狂ひ出て色々の事を口ばしりけるを何れも且那衆めいくして座敷牢を作りおし入かけば牢をやぶつて出屎をたれて手よゝぎりあるゐ貝よぬり又い己が食する飯器よ入て在所中を走て歩行丸裸よなり着ものずん〳〵にくひさひ家々へとび入人の妻子をおゝ付うち倒しおどしてさま〴〵惡ものくるひけるやどよ終にくるひ死にしゝ者るやがて火葬おしゝ者るお石などを打くへたるやうお黑々はなりけれども灰ばもならずゆしぎにおもひ炭木を山のとくにつみて燒ども少云も燒ど弟子もこれをみて大におどろ云これ只事よあらずいかゝはせんと評議なす折から一休和尙其ゐろ常州よまし〳〵けるが或人のやや云上方ゑ一休和尙といふ知德の僧下ゑゐたはふ此和尙に子細を尋ね見たまへかしとやける弟子坊主幸ひの事このなさらゑとて弟子一休へ參りしか〳〵どやける一休云ゝ給ひてそれ不便のおとかなそを佛法とやれ人我の相をとゞめて心殘納るをもつてせんとそまして僧法師は大じひ心をもつて專らとして人をおしもるものなるに愚痴放逸にしてゐどね殘あらそ云事生ながら

犬お似たりあさましき次第なゑそれの〳〵たちまち灰よ〳〵して參らせんとて諸行無常の四句の文を書たまひて是と死人のうへおなげかけ給ゑゝ卽時お灰ゑなるべー早とく〳〵とあれば忽なしとでとりて歸り彼ふすやりたる死人れ上ゑなげのけ〳〵れをあぶらをかゝてやくゞ如くべら〳〵と燒て忽ち灰とぞなりおけるふしぎなりし事ゑもなりさるによつて和尙を佛の再來といいぬ人おそなかりける

○一休北國より京都へのぼり玉ふとき越前敦賀の宿をうち過かいづの山中ゑ一宿し給ふが何ものゐいひけん今をひ此宿ゑとまりしい都に名高き舞まゐの大かしらおていまゑ入道して世間をすて諸國を修行し給ふと承るいざ〳〵方々みお參ゑて一ふを所望せんといかゝ〳〵皆々是と一だんの事かなとて大勢旅宿へ詰かけて一休に對面云ゐ坊い云ゝたまえりいべゑ都がたにて舞の大のしらどの〳〵よ〳〵遠國遠里までも其沙汰かくれなし幸おれゑ一宿云玉ふおそ後のかたり句になゝやさん一ふし舞て云かせ玉ひいへとせめのけてやけれを一休は大ゑ迷惑しおれはおもゐもよらぬ仰のな見玉ふと云坊主なれば經陀羅尼おどは少〳〵ぞんぢたるが其舞といふものゑどさらおしらずと斷れゝ者ゐば在所のものどもいや〳〵

なゐとのたまふともたゞ一ふしの所望いせひ〳〵に舞なゝならゞ今宵のほやゞはかなふまじいのみ〳〵とせめのけて所望す一休さて〳〵そきい迷惑千万さだめて人ちがひなるべしとさま〴〵わび玉へども皆もんをうなる里人なれど更耳合点せず是非とも〳〵と所望をゞしゞし案玄て愚僧けつして其舞まひはてはなくいへども一ふし舞されゞにかへまなくなせんのたなし愚僧わの死とゝわ高舘といふ舞を少し見覺さるがおほつかなくいへども一ふし舞て見やさん先鈴木の三郎が紀州藤白ゝり奥州衣川まで付し所を少しまひやべしといふこ在所ものたかだちが何やらん玄らされども早く〳〵といひけるに一休座をあらため扇をてうとうちてさる程よすいきの三郎玄げ家を旗の玄やうゞえめされつゝ藤白を立出て奥州さして下られけるほどゝわくだられおるほどよ〳〵〳〵と凡二三十へんきくだられけるほどにとはの里くりかへ〳〵やされおれど里人等ハふしぎしていのに坊さきゞゞとり同じ事をくりかへし〳〵のたまふいいうゝの事にや早く舞をまふて見せられいへ一休さあらぬ負にて三郎が紀州ゝり奥州まで七十五日が日數をかゝりて衣川へつのきたる事なをゞ先くだられけるほどよを三十日も五十日をやついけにしてそれか

ら衣川ゝ着しての舞をまひて見せやべしおの〳〵よも此家に八九十日逗留して衣川の處を見たまふべしと宣ゞけれゞいづれも顔を見合大わわれしたらくの間さへくだられけるゞにゝてたいくつし侍るよいかでの七十五日が間死々事はなるまじとて皆々家ゝぞのへりたるとなり是も一時の才智ありと人ゞのへり

○今出川通にゝしや如齋といふものあり兼て和尚とは玄いゞ厚かりしがうちつゝいに用事しげく久しく和尚のもゝを尋ざりくかい忍ゝやのゝりけん文をしたゝめて此頃ゝ用事つゞいにゝへゞ見舞をゞ上まゞゞさたゞいづれ近々ゝ見舞ゞ上るなゞとはりの文をつゝのはしおる其返事に

見舞とて見まふてをゞ見まいずと
よしや玄よさいと思ふ身ならば

とゝみてつゝのはされける如齋ゝ見てゝ坊の今にはじめぬかるきゝ事のなとかんじおるとゞ

○一休和尚高野山へ登ゞ玉ゝ四方の山々ゝながめてさてゞ聞しとり尊ゞけしゞかなとなが

めおはしまるお高野ひ玄りぞも立いでさて一休を見ていかゐる人ぞと尋ねければ愚僧は名をなき道心者にて侍るが此山はじめて一見仕へべ余り風景がおもしろく侍れば折の詩の歌か一首つかまつらんとぞんじつゝとして侍るとのたまへばひじりぞも一休とと中々おもひがけねぞ玄ゐらしき事をいふた房のおとゞさみいゐるめくらの垣のぞたすぐちの嘯て心なぐさむとやその身いかゝみておそとてうそさむげなる形ふりにて袗は此山の名産高野がみそとの刃よりもうそき糸り付且て細首のいとあゞおき体わて詩哥を案づるとゝでたたりと口々にいやしめ笑ひぞるに一休耳にもかゞず空うゝふきておたしぞるがやう〳〵一首仕りたり硯紙たまれとやされぞれを何一首出來たるとやさらば拜吟仕るべーとうち笑ひ硯紙を出しぞれを一休筆をとり彼東坡居士が經山寺の詩を山がたゞ作りしを例として

山秋葉落　此山形の詩のくみやうい

山春開花發空　山高近二都卒丙院一

山迎連峰報佛心亦　山閑表二華藏世界一

山高近都卒內院土進空　山迎て連峯報二佛土一

山閑表華藏世界地醒寂　山平幽臨化佛地

山平幽臨化佛惱亦　山春開花發心進

山夏涼風煩寂　山夏涼風煩惱醒

山冬素雪　山秋落葉空亦空

山冬素雪寂亦寂

かくのとく卽時ゐ筆をとゞさら〳〵と認玉へば一山のひゐゞ大よおゞろ玄さても形容ゐ似合ざる見事なる筆跡といひ又目なれぬ詩の体かなと明たる口をふさぎのねさて〳〵先刻い皆々よしあき事ぞもをいひてゐ僧をはづのしめい事のへす〳〵をはづのしうゐそいかなる人ぞゐ名をなれり玉へと口々にゆけれぞ其詩の下にいとのたまへぞまゐとに小文字いが何一とかゆぞとたづねける其中に一人のひ玄り眉を玄ばめ此詩の筆跡をく〳〵見るゐ京紫野なる一休和尙の書なりさるから一としるされたりされぞゐう曲者ありとふり歸ゞ見るゐ和尙へ彼方へ下向し玉ふゞじりたちそれとゞゐ見まゐらせて過言をゐ

やまれとてはしゐ付て引とゞめ一休和尚ども存せずして段々無禮をゆたりは免ありて先々坊中へ入らせ玉へとゐんぎんにのぶるゑ一休いや〳〵何も斷とり玉ふべき事ゐいさら〳〵なしとてきげんよく坊〻師り玉へゑゑじりたちさま〴〵馳走をまゐらせけるさく厚く禮をのべ下向し玉ひける跡よて一人のひゑりゆやすかゝる名僧また登山し玉ふ事まれあり願くは大師のゆ影ゑ贊をたのみゆたらばいのゐといふゑいづをも尤と同じさらば今一たびよびのゐしまゐらせんと又追かけ奉るゑ一休い何事にやと仰らるれゆ去の〴〵のをしゆゑ一休わらひ給ひてそをゆゑの事また立歸らずともあるとゑゆ影を急持きたられよとて道なる茶屋ゑ休くおいしける人々おゑろき大師の贊を請ふゐ立ながら思案もなくなさるゝ事聞とゑ大博學祖師かゑと舌の根をふるひけり扨大師のゆ影を持來りけれゆ

弘法大師活佛死ねゑ野とらの土となる

と一筆ゑさら〳〵とまたゝめ玉ひて下向し給ふ人々ふかき事もありていそき登山して學匠に見せければ格別のおゑけ事ありしかはまたひとりとも口を得ふさがざりけるとゐり

一休諸國物語圖繪卷之四畢

一休諸國物語圖繪卷之五

○そてゝも一休和尚能州蜷川村の草庵にましませし頃泉水のきしに水の上ゐおよんで横ばひにねたる松のゐとゑる弟子衆をあつめて此松を真ゝに見るものやゐるとたづね玉ゆ皆々立かはり入かはり見られけゑゑゑ横ばいの松なり其ゑき蜷川新右衛門參り合せてわれらいこのにも真直に見ていゆとゆされけれゆさてゑ如何にと仰あれゑまことゐいかゆてこういゆへとゆされけれゑ和尚手をうつてよく見られゐりとて五十則をゆるゑと仰られける

○和尚熊野山へゆ參詣ましゝて本宮へあがとたまふころしも春の半なれば山々谷々の櫻都三月の頃よとゆいと目出たのりけれゑ拜殿ゑうちのぼり四方の風色をながめまゝしける處へ社僧一人まのり出て客僧はたゝ人とい見參らさずとゆければ中々われらはゐゝ人ゑてはいゑずゆらんいへ出家ゐていゆとゆされけれゑ彼僧はきもゑつぶしてい興がるゆ僧かなとひとつふたつと物がたとし玉ひて和尚ゑの僧い少しゑなせる者とおぼしめし高野山の詩の事をおほし出させ此山にても一首を作りてなぐさまんと矢たてをとり出しさら〳〵と書て彼僧ゑ見せ玉へゑ其まゝ神前へそゑへてさて〳〵ゆ筆跡見事ゐい都人と

山廟等一
扶桑神
山客成群
數萬人
山海浪高
船片々
山樓鐘動
月輪々
山龍吟落
碧雲漲

山谷洗流
煩惱塵
山里放光
三社景
山花猶馥
本宮春
一休老人
偶顕

見やとひがめかとやけきを和尚答へてとく社察しられたりとれは都紫野の一休といふものなりと仰られけれをさてもかねてゝ聞たへし和尚おてましまそかとてかの神前みさゝげおきしをゝ見きたりとてもの事ゝは名を書付玉へとねがふにさらば後の代かたり師ともなりなんと一休老人偶題とゞ記し玉ふ其詩ゝ

七山里放光
五山龍吟落碧三
三山海浪高船片雲社
一山廟等一扶桑神片濤景
二山客成群数万人塵春
四山樓鐘動月輪惱宮
六山谷洗流煩本
八山花猶馥一休老人偶題

とて徒僧ゝ一休和尚なりとて自宅へ招し横槌て庭をはき杓子で芋をすりた馳走や事おろかならず折ふし花のさかりなれゝ庭前のさなをも見たまへとて酒肴をいだしてなぐさめやさてかの僧やけるは此山へはたゞ越なそるゝ事もはかりがたし末代の寶ともおすべきをゝ何ゝとても一筆遊し玉れとやけれゝ安事おりゝ望をあをとのたまへゝさてゝ拜殿にてのゝ作の詩体とゝいふしへよりもかゝる体の侍りけるかゝとふゝいかゝる古へよりありし事なり唐土の東坡居士が經山寺にて作りし詩体おりとかたり玉へゝさて〳〵めづらしき詩やされゝどかゝる山奥に住ゝとゝ風文もなゝ官の我々が目なれ耳なれずゝ相成べくゝと思なゝ我々が耳おれ目なれゝる事をねがふなりとやゝ上おれゝ和尚うちうなづき玉ふ折のらす風ふきて櫻のゝら〳〵おちりおきゝ貫之のうたを思ひ出されて

櫻ちる木のしゝ風いさむからで
空おしられぬ雪ゝふりおる

これはいのゝおとのゝたまゝゝ彼僧いや是もいまだ耳なれやさゝる處なりとゝふ又さゝらの花の風にちらされさつ〳〵と見だれゝば其まゝ

雪やまんこあられやまんま御寺の
かきぬき木ゐ一ていふりつもれまんま

是いかゞとやされ者れと彼僧大ゐうちわらひさてもおぞけたるは僧かないかゐ耳なを目なれしものとてをそれいあまりよしとやせど一休もわらひ玉ゑて實もつともなりんで〳〵其望の目ゑも耳にもなれ〳〵とをかきてまいらせんとて

かく

きねが鈴海山木まり谷のあゐ
入ゐをのかねゐ庭前のはな

とあそはしければかの僧さてもよきはかるロや實ゐ見なれ聞なれしそのをのゞをけるまそ黒なれとてはロのゐるきをゐんと侍るゐのくて〳〵色々馳走やれば次手なれとかの東坡が詩ゑ書れたくべしとて

七山僧—山花發二茂林一
六山鳥菓來—山遠路幽深
五山雲飛テ片倫—山雲飛片々
四山水碧ノ沈抱相—山水沈々
三山猿樹ニ還テ—山猿樹抱吟
二山客—山客還相尋
一山花發二茂林一片食道—山遠路幽深沈吟尋

かく書あたへていてまやてゞかへり玉ふとなり

○爰に堺にての事なりしに一休和尚へ常に參りてはゞ心安くはゞ意を得たる又次郎とゝふ町人ありけるあるゐき河豚汁をした、か食てけるが殊の外ゐ醉ゐ終ゐその日のうちに死しけるが今ゝの時よやけるは我世ゑありしとき死る事はいつの頃ぞやゐ思ひけるなれゞ後世とて願ひ置し事をなくされども一休和尚へ常ゑしこうやしはゞ物がたゞとも承りし結緣

あれい引導をもたのみ奉れのゝる不慮の死を仕けりさはそ哀とも思召そらめのあらす
といひ置て終ゝむなしく成わ者る妻子眷屬なげきかあしみ遺言の通とつふさよ一休和尚
へ申上ければいとやそき事あり扨々ふびんの仕合と仰られけるしの〻る所へはや時分もよ
くゝ間和尚様ハ出をあふきたてまつると再三人をおこしければ一休仰れけるといや〳〵
われら計出るにおくゝばす引導つふさわ書〳〵つのはすべし誰ゐてもくゝをわげさせてゆふむ
きくゝと仰られければ妻子あげきて遺言よてゝ間ひらにハ出下されくゝハ慈悲なりとさま
〳〵ねがひ者れば一休のたはひけるとゝやゝ〳〵我等が出をかへつてのれがはくゝひなな
るなり則書てつのはすべしとて

海中有二寃魚一　名云二河豚魚一
面腹白脊班　人不レ食二此魚一
嗚呼痛哉又次郎　食レ之忽死來
彼歳五十四　彼歳五十四
合て項數一連百八煩腦のたづなをふつときつて行たい方へつゝとゆ者

木曾十七寅の年角のないまそ添よ者れ

とわそゝしてつかはされけるとのやしのをはおの〳〵肝をけしけれども仰おれを其おと
くゝおこなひけるが其引導の書たるを其子俱秘藏して今ハ傳て其家のたからとしのへも
なたき跡ハて代々所持仕りて有けるとなり

扨前册ハ約束申たる法語を書すて参らハる

○君かちとせをへんこともあきつおとめの羽衣くゝのふ

註君とハ諸人なりいふこゝろと唐の玄宗皇帝のハ代にあうゑんといふ人ゑもつをあし
て日の前ハ宮殿ろうかくをなし乙女をゝだして羽衣の曲をあさしむ玄宗皇帝興玄見
たまふにしゝしもなくたへうせぬとふるき弥に見へたり玄かれ者ちゆせをふるゆも
夢のとくにきゑんとの事か又四十里四方の石を羽衣よてゝなでつくすといふ効石のた
とゝあれゝ久しき事か見る人のあゝろにまかそべし

○ぺんせいましませいいふがうへ

此文をよく見てながく生死をはなれて不老不死の身となれりとゝ

○我見ても久しくなどぬ住吉の

きしのひめまついくよへぬらん

われとと大明神なりすみよしの社しとは苦戒となれたる彼岸をいふあり姫松おとみやびやかにしていつものいらぬ常磐木の見どゝの松などいふ心は天地のいまだはゑまらぬさきの神代のとき彼岸の姫松を見てかくよめり此神代のときといふと常ふわたくしなき心胸なり姫松おいふと人々ぐうくの本智なり松とみさゝにて四時しゝまぬ姿ゆゑにたとへてかゝいふなり今も身を姫松に得ゝは不生不滅にして變する色なくくるしみたへとなれて彼岸にいゐりて安樂なるべし諸人此斷をしゝてゝめ松ゆなれとの事なゝ大明神とい文字におふ社にあきらかなるのみとかく神とゝあゝろなりとらきまよひの人をあきらかにする神とまた一説ゆ姫松が變化して大明神となりてあの歌を詠せしともあり是をしらせんため此古歌戒引玉ふなり

○目なしとち〳〵

目あり一切人々具足の自性なゝ自性本萬の見をはなるゝがもへゆかく名付たりもし

佛を見法界見心を見有を見無を見本を見末を見すべて何ゝてゝ一すゝ見ても見る事あらば目ありゝして目なしゝて一ゝ本よゝ名もなく方角所もなく然を天地に先だち万物ゝおくれて古來變滅なゝ色形なふして千の色万のかたちにあらゝる是世界國土のゆゝとあらゆるゆけ〳〵本源なゝ佛とゆ眞如とゆ阿彌陀とゆ觀音とゆ大智とゆ自性ともいふゝれを云るを佛になる人々ゆ悟りの人ともいふあり釋迦一代の經文も皆此目なしとの事を人々ゝしらせんがためなり

楞嚴經に阿那律陀無目不見說玉ひ

又同經ゝ曰阿那律陀白佛言我不因眼觀見十方精眞洞然如觀掌果如來一印我成宣阿羅漢

云々佛六圓通說たまふゝれうのひとつなゝ是によつて此註を目なしとい名付たりとろ〳〵とはたつねるゝとをなり

○ゝゝふつゆてまします

とろづの音聲をきくものゝ何者ぞと明くれすておかゝたづぬる心つゆふゝ目なしゝ

為づねあふべきかくのとくして尋ねあいたる人をくいんおんともとむ觀音圓通の門

とて二十五のぼさつの中に第一の菩薩とえする為り

○扨一休和尚のは袋と淨土宗にて有志のやつこや一休常にかな法語をのきてつかと云又い水かゝとい ふ雙紙を送りて道徒おしえ玉へどもしの〳〵ぼさとまもなく明暮たゝ念佛のみ一にて過ー玉ふ一休聞し見し一段のは心入なり念佛にて佛になら せ給いん事えうたがひなけれども此所より愚僧が庵のは出あらむに何のうたがひおくは出あるべし是よく事に道しり玉ふもへに苦もあるをうか〳〵とあるは玉ひても庵へとは出有あり又かた田舍人がわが庵をたづね來らんよいか程道にまよひても我等が庵ある上い何れたづねあふなりその たづぬるまでの心苦しきあいたがまよふありと給られけれどしからば何にてを示ー玉へと仰られそる一休さあらば一句にて見はあらせんにて

目なしとちゝ〳〵聲おついてまーませ

於人のさありとやらんふまとを悟るは此おらひはじめに父母もなくとつと已前の我身は何なるぞといへどうとひふものを知らずやとがそるものもとらに然た尺加羅陀とと一日のとたずが為りやといふものいとはずがたりといひければ一默しておとける此心を見玉へと仰られそれば袋のいはく

いへはいいずいとねとをねにさとかれて

おもいぬさきや佛なるらむ

とあそばしけをと一休よろこびたまひてとりあへず一首をよみたまひける

いまとはやあゝろよかゝる雲もなし

月のいるべき山しなけれど

とよゝ玉ふては丁夫光〳〵とてよろこびてかへり玉ひける心

○そも〳〵とは人たちの悟りとやらんいふ事をさとるならひと云めに父母もなきとつと

いせんのとが身い何ものぞいるとかんといふ

父母とと天地のあとをいふとつといせんとそわが心のあるともなとと天とと地と

も我とと人とも何とをとおゝもわからぬさとといふとこうまれぬさととかりかも

ふべからずと一生ぬさきとおもはゝ千歳はおよぶかを云るべからず我今まであさ心

のなにぞおもるありおもらぬさきゐは其おもりたる心はいかやうになつていたぞと
かくのとくあ〜をもつてしらぬ生ぬそき城をしるべし
○おにとして去らぬ事がやそるべくいやたゞへんてつもなき物なりと思ふべし
知らぬ事とはすおけち目なしのことあゝ目なしと萬物ゐとなれたればへんてつもお
きとなる是めなしをいひあらとさんがためなりしかれどをひとへゐ又しらずーてな
ゆとゐふよいあらずたゞありとゐもなしともおもへばはやへんてつが有ぞ
○たとへゞよしのとつ瀾のとなもみぢ色々にそたてちりてもまたもとの根ゐかへるがご
とし
わが心のいろ〳〵よおこり又なくなるとゝ城たとへたり其心のおこり又さるところを
よくしるべ去色々の心がおこらざるは何者がそるぞと急々ゐ眼をつ〻て見るべしそ
きまそ則目なしと花もそのとくさたてちりてなゝおるなり花のそくとたゐれ何の子
細ぞちるときこれ何のしさいぞなくなるとこれ何のしさいぞと考らせんがたゆゑ花
を見てとなの心をしらゝとせゞあふぎて棒場あげて月をうたんとするがときよりも

つのぬ事なり是が心のうちで花の心をゝ天地の心をゝあきらのにしるなり其證據ゐ
とこよみに四時のうつゝ月日のはあ日月しとくまで分厘をたがはざるおりいにしへ
の聖人おればとて天の外地の外までめぐりゐる見るゐえあらずたゞ我心の繪圖を
見てしるし出をなりそのたがとざる事ともつてしるへし
○本來もなきいにしへの我なれた死行のたもなにをのもなし
いにしへもいはもものいらぬわれおれた我といふべきとのはもなし
○世の中のよめがしゝとめと早なれた人をゝとゝゐなるいゐどおし
たつなみもたへぬも同し水なれた人もほとけにおりやとき哉
○もく水ゐかずのゝとゝりもえのなきはほとけをたゝ乃ゝ人ののちの世
石の火の火とゝもいやきはとけめをたのゝとなどや追や付べた
○うそをつき地おくゐおつる物ならゞおきとつくるーやのいの、せん
しやのゞの〜あ〜ろい經よなたものをどうりをとりて地おくにゞいる
○とへゞいふとはねゝいはぬだるまゝ殿心の内ちに何のあるべた

べつの事おきぞといふものはやそくつひゐいひえぬだるま一休

○世中の人のこゝろの佛あれどしやのやあみだのとれとたも哉

しらざるいかとけも人もおなゝことさてこそ人のまよひおそすれ

○極樂も地ごくもしらぬおもひでみうまきぬさきの物となるべし

おくらえも地みをそしらぬこゝろ迄がどうゝてけふぞもとの身となる

○人し死るといなややきもしうづみもしの者てなくなると思へゞまたなえならずして魂

といふもの來世とやらんゐ行あらおそろしやえんは王が手にわたりなゞ婆婆ゐて作る

罪をくろのねの帳につゞておきて鬼に見せてあれはゞの罪人なりかしやくせよと云時

えんは王といふえ目なゝどのゝ第一の臣下なをすこしをわたくしゐふ去てよく善悪

をあらためわかつなり能と城なせばよゑ事きたを又あしゑ事をなせばあしき事來る

ゐりとやきかおそきか其むくゐのたちふかげのしたがふがとく毛頭もるさずつひ

にきたらずといふ事なしこきをくろがねの帳といゐ是則人々の身よとなはりたるゐ

くゑれ死せんの道理これを名付てゐんま王といふなり

○一休和尚の旦那ゑ狗子佛性の話をさづゞ給ひしよこの人狗子とゑ犬の子ゐりゐれゐ佛性

とゑ何とも合点まゐらずとやければ聞て見玉へゑて仰られゞるは

犬の子にゐのやゐる人の去ゑざこそ

ほとけとも成れ地ごくゐも入れ

ひのひどのゝゐのおろとまだ目がわのぬ

おつぼよまらを入てころゝくや

と仰られけをゑいま目がゐきて狗子のゑてあろいやうゝわのゑてしんが趙州の有無の處い

千年工夫仕しへゑも愚知の我等ゑ得道仕る事はおをがたしとやけれゑ歌よみてきかすべ

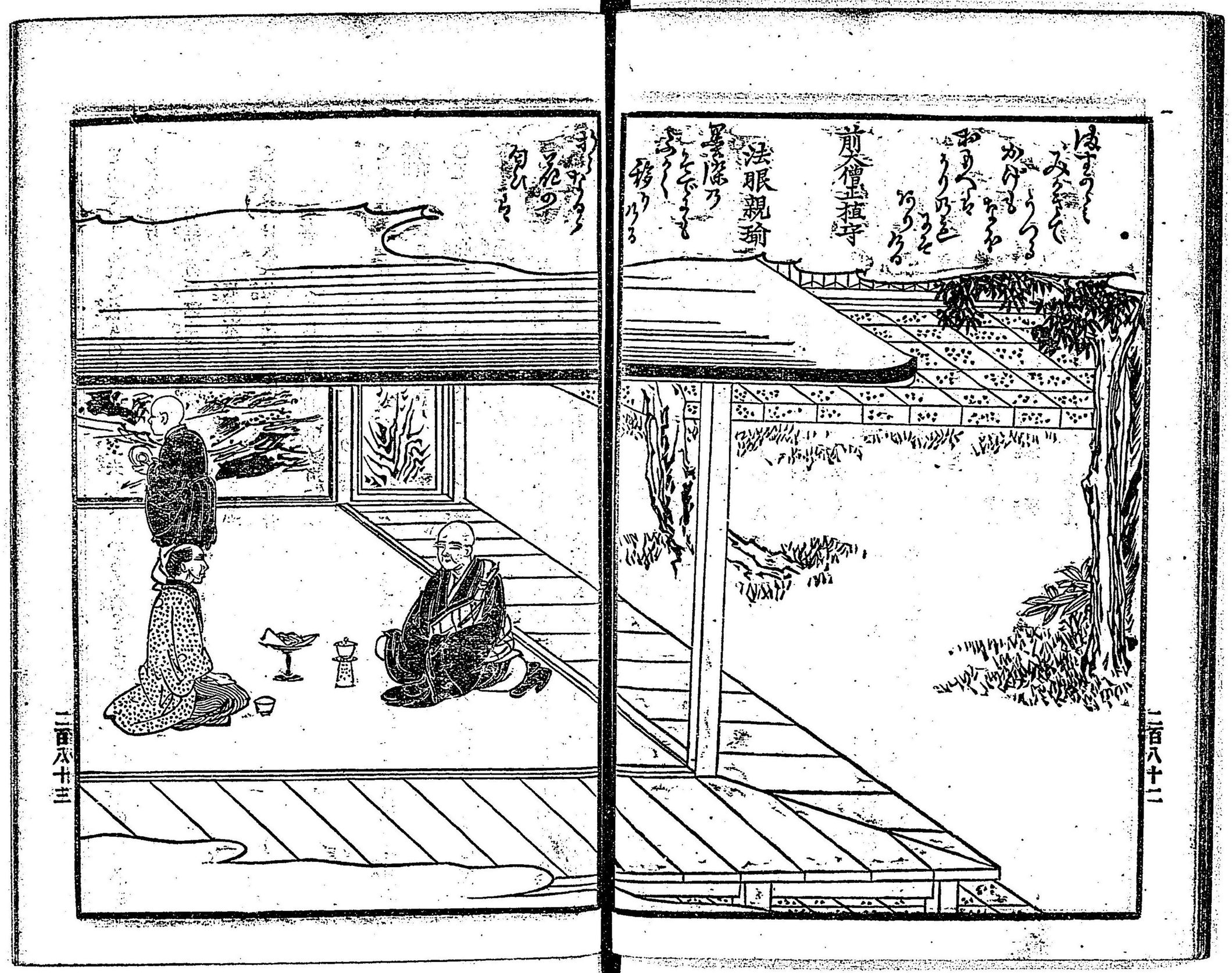
し此哥と常に吟じて応得て見られよとて

おゝといへゑなしとや人のおもふらん

またへもぞする山彦の聲

ありといへゞありとや人のおもふらん

てたべてゑな死山ゑおの聲


前大僧正植守
法眼親瑜

とあそばしされど彼ものしばらく工夫してしからを有ともおしともしれぬものよて心さしのおもければ

有無をのする生死の海のなまをぶね
底ぬきてのち有無もたまらず

と仰られけれど彼人此ぢたにて得心して一首

有無ぞしるなにおもひけん趙州も
なのりしされば犬の一聲

とおければ一休きゝたまひておつぼの内ゝを一くちまゐりけるとおてとらひ玉へど旦那禮拜して歸りおるとなり

○五しきの鬼どのが請とつてぢそよてつき殺して又ゝおてひて人のたいとなしてしやばにてつみの重さはどのしやくとおいふ

五色のおにとと五蘊なりこれも目なしどのゝけんぞくおり常にはたくし有ていたづらものなり阿責ととわが心ゝ目おしといふ主人おるをばしらず下人のいたづらものをたのゝゝ依て善しあし何かとうたがゝかなゝみよろこびとら立などするもゝゝ其惡がゝの鉄の帳ゝ付るがとくおつてあしき事のみ來るおとこれが則ちのしやくおりたい多の人の此いたづらもの〳〵下人をたのむゝよつてくるしみをするおりたのむと五うんをわれとするをいふなりたい主人は目なしどのをしらざるがもゝゝ

○またさるものゝいふにと毒藥へんじてくすりとなるといへど罪のれもきは佛みやなり

なん

いふ心ゝ目なしどのにあふたる人と我とおはち目なゝなりお知るおれを佛になる人といふおり其人は經念佛難行などもおさず何の思ひもなきなり經念佛なども心よのけぬもへよづみのおもきい佛にやならんといふりんざい大師のいゝく造五無間業一方得解脫と云々五ゝけんの業とと父をころし母をころし佛身より血を出だし和合僧をやぶり經像をやくこれをいふおり父母とと天地有無なところすとは取ざるをいふ佛も經像もともよころしてとらざるおり解脫とと一切のまよひをとふざけはおるゝをいふこゝいふこゝろと修行の人佛をもと兄衆生をきらひ有無にゝ〳〵

る内どんまた迷なりとそれを皆ころしはて〜とらざる人を佛ゑ成と說玉ふもへに罪の
れもきは佛にやならんといかなり

○つくりおくつみのしもみやどあるならい
あんまのちやうわつ者どおろなし
ほとゝをも鬼をもころすあく人も
あんまわうとてもるそべきのも

○よくものをあんするゑ地おくもとより遠からず
鬼といふは瞿曇なり一代藏經いみな人間をいた兒んがためありあらふくの釋迦どのや
いろ〳〵のうそ寄ついておゐて
地おくも身心にありくどんい釋迦のこへ名ゑ釋迦いろ〳〵の經を說おこのる〜がもるゑ
且地ごくのくるしゑをちくるなり

○そて愛ゑ頃しも八月下旬なれば大風大雨ゑさりにして洛中の家堂社塔もそこねれが蜷
川新右衛門取物もとりあへず一休和尙へは見舞やては坊は内よはざるか何ど〳〵との外

ある大風大雨は寺といづくもそこねやさずいやとやれを一休出合たまひてよくまそは
心付いものこな誠おめづらしゑ大風あていい去ながら當寺と何事もいとずとて。
わが宿いとしらもゐてずふきもせず
雨にもぬれずかせもあたらず
と仰られけれゑ其は庵はいづくのほどゐていそとやれを一休わらはせ玉ひてそれゑま
そ大事のことをおたづねあれとて
とが庵は都のたつみしかぞとそ
とをうぢ山と人わいふあり
と仰られけれゑさていい喜撰法師と相住なされいかとたいふれゑをでいや喜撰法師おのり
て居る也とありければさていい借家ゑてのおていかとやてわらはれしかば一休また一首をと
み玉ふ
かりの世ゑのしたる主をかりぬしも
かすとおそはずのるとれをとず

とよみ玉へゝ新右衛門此哥感じて扇子よの死留かりそめよ参りても得道の徳侍るとて
よおよびて歸りけるが門より立かへりてさて〳〵をかしきたはふれ事仰られ玄にうか〳〵
ゐやべきと思ふ事を打とすをかくすでゐ歸らんと仕ふ此心といか〳〵心得ヤべきとて

吹と死花ものさがし死風あるか
ふかぬと死わはいづちなるらん

と申されはそのまゝ返哥あるべきる

吹と死とうべさわかしき山風も
ふかぬと死よいふかぬなりけり

と仰られされば新右衛門ものをもいとずうゐづ死て暫く禮拜をなして歸りしとなゐ
○それを誰と〳〵へなよしあのとはぎがたりや

いふ心九一休釋迦をたらふくしかれとも我もまたそでもない事をいふたとなゐとなせ
よなれば經の文字の心をもつて迷ゐをしらず何をもつて此有事をしらんや八万余經
千差万別なりといへとを見聞覺知の四門を出すその四門のうへゐれあて永く四門を

となれたるを經の文字のとく義をとりてみだりに分別させまゐらせかゝるに一向に經をすて見聞覺知乃外に佛をとめいこれ則邪見外道なり人の邪見をおこさんことをおそれて又一休和尚みづからとしなのといずかたりやと宣ふなり釋迦をしかりてせんもおもき事をいふたなり法花經に曰舍利弗云何名諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世諸佛世尊欲衆生開佛知見使得清淨故出現於世云々知見といふ見聞覺知おりて〳〵に暑して聞覺を不説開とて見聞覺知を則佛卽心は光影なりとしるをいふなり然れ見聞覺知の四ツと一代藏經の要文なり是をのぞいて別に修道なし猶開といたとへい迷の人とあしき夢を見てくるしまかおしそがとくそれとかたもなき事なりと人のいふをどを聞入すもし又聞しり顏おして我今頓に夢さめてくらきお灯を得るがとくおもて万法おきらの見るとゝふそれをいまだねごとにて夢なりよくもめの覺めるる人のいふは我れ玄めよりねむらざれば夢おしなんのさむるおいふ事あらん其とく性德まよひなきとしるのみにしてかつて得るとなしのくのとくおるを佛知見を開とといふおりまよひの人い見聞覺知をとなるゝとゝへども一向に捨て外をもとめとなれずといへば又とりてみだりに分別する今爰に心見よとらを捨ずの事をいふ夢のうちの人とくき、只槇木て作る土地藏がねおとをゝふを見とゝろひさちく〳〵と車の音おを目をさませ

○釋迦出山語云

出山とゝせそん山に入六年端座工夫じゆくして明星を見て元來まよひおさをさとりて山を出たまふといふゝ

○一佛成道

一ふた見聞覺知を自性の日かりなりと識得まば万法歸一亦まきらずこくの如なるを佛の妙道を成就すといふもゝに成道といふまた佛の知見を開ともいふまた目なしになる人ともいふ

○爰に西の國の大名身まかりける今端のときおやされける我死してのち種々の佛事をもつとむべきのらお紫野の一休禪師を請して引導を賴ゝやせ是とり外に望みなしとて死たりける人々なげたに遺言なればとて急ぎ都へ使者をたて一休を請ゝ者る一休折節在庵お

て易がとなりとてかの使者と〳〵もわうちゐ連て下り玉ふ既に発送の日限がはまりしかば音
ゑ聞へし紫野の一休和尚こそ此國の某どの〻に引導の爲めとて下向ありしとて國々嶋
々より聞はゞの人足城空にまとふて貴賤くん衆もしに引導城聽聞せゞとぞひしめき合る
葬禮の儀式天あと花をふらし地にと錦を散て其ようほひ詞あのべがたく其日あなれば數
万の見物かの一休の引導をゞ聞べけれあおしあひへしあひ合る扨玉のこしをかきそへ合
きゞ一休立出たまゐ龕の前ゑ一默し玉ふ諸人そはや今やくと耳そばたてゐるに一言を
もいゐたまとず天を仰ぎ口をくちつとゐらき地と見て口城ふさぎて其まゝずつと退き玉
ふ彼大名のにれん中きん達城はじめ一門家來けともがちゞで是はいのなるに事やらんせ
ゐてい一句をゝめし玉とゞきとに衣の袖ゑすがりつゝ諸人の見物も興をさはし合れば一首
の歌をよみおき都城さ去て上りたまふ人々是非なくその歌を見れゞ

我はたゝ後世のおしへをしらぬなり
あらんの二字のあるにまかせて

とあとゞれは皆人ゑををにゝてあとゞ合ちんともいはれざるに僧のなと默して感じあへり

しとゞ

○又一休堺へに下向のとき淀の河瀬舟に乘たまゐけるゑ乘合に山伏ありけるに坊は何宗ゞ
と問ふ一休われは禪宗ゑりと答られければ禪宗ゑは我等がとにきゞくゝあらじといひけ
る一休ゆさるゝはいのゑゞきとく多〳〵其方に何ゑてもにゞくあらゞ見せたまへと仰られ
ければいで我等が法力ゑて此船のやさにに不動といのり出してに目ゑかゝんとて一ゑあ
んがう二ゑせいたかをはじめてもみゑもんで祈り合をば皆々のり合のものゞも目とめを
見合あるとまろゑあんのとく舟にへさにゑたちまち不動の像火にんをゝなつてあらはを
たゞ其時山伏ゞ合めんを作りおの〳〵おがみ玉ふかとゆけきゞ皆人ふしぎの思ひをなし
けれ共一休ゝさらゑふしぎにもまゞ去まさぬゆりなりいかゑ禪僧かゝるにゞくは如何にし
玉ゝんとせゞゞかけてゆゝれゞ我等が奇德ゑゝ身とり水を出してゐの火焔をゝなつ不動
尊をけして見せん隨分いのゞ玉とてかの不働の像の火にんゑ小便城した〳〵のしのけ玉へ
ゞ火焔はそのまゝにゝて山伏の法力つにけれ皆人一休城拜禮して奇異のおもゞをおしけ
る也さて舟とり上り陸路をうちつれ行處ゑむこのひとゞなるゞゞ大なる犬の山河にもひゝ

くたかりゐほへかゝりけれど山伏ヤやういのよに坊さたの行くらべよおそはぶたりとも
あのおそろした犬のいのりを止めたゝ今是へくび寄る法力をあらいさんがに僧はいのわ
とヤけゐ一休是いいと安たとなりまづ祈て見玉へとのたまへど山伏大いらたかの赤木
の珠數をさらさ〳〵とおしもんて一いのりおそいのりゐる一切犬とゐへやまず手元へ來
るねんもなかりゐれたたつさまやよおさまかけて十文字犬の〳〵んぞゝめくわびら宮んけ
んそわの〳〵といへぞそいぬとほへやまず一休おかしを思しめしそおのた玉へ某とそれ
ゐどの事ゐあびちうんけんもそとこのも入事よはあらずゐのいぬのいのりを止めたちまち
よ〳〵へ來らせんとふとおろより畫飯のやためしをとり出ゐこの犬み一目見せてころ〳〵
〳〵とのたまへいさしもいかれる犬なれどもやためし一目見てをん〳〵とて尾をふり來
りけれバ山伏もたもをけし皆人そてても格別ゐる心得かなと感せぬものこそなかりけり

○觀見法界草木國土悉皆成佛

いふ心は釋迦目なしどのとなり得て天地万法て觀見おとゞくみゐ目なしどのなと
と說玉ふ

○草木さへ佛ゐおるとなれば人間はいふゐおよどずむこの〳〵昔ゐつた釋迦阿彌陀もみな佛
ゐやといふた志たがうそをつかれたとのふ
いふ心と釋迦目なしの事を人々にしらせんとていれたれども見聞の人其心をしら
ずして言葉のぎりばかりを取によつて一言葉も目ゐしどのよれひあてられざれい皆
宮そこ又有ものゝいふい宮そをいはずい佛とはせじとなり方便のうそい皆實なる故
こ

○うとふもまふものこの聲

されはとて詞をひとへにたらふにもあらず風のおゐ水のおとまでも皆めなしをあら
はすおこ人のとバにてなど別ならん其外身ゐふれ目ゐ見耳ゐたくなどの事天地日月
うみ山よいたるまで一つとして法の聲なたものなしやゐゐ宮たふも法のこゐとおり

○柳はみとこ花とくれおゐ

いふ心い目なしとのひとりゐて能それ〳〵品々ゐ別る〳〵なり自由おるとざなりもし
わからずして一めんならば目なしといせじ善惡なくしてくく善惡をわのち萬もとの

われなくて萬物と〳〵もおひ分別なふして能分別去見聞ずして能く見聞おもなよもへ
あれど目なしぞの〳〵生國無住の國の人なれはなり

○あらおもしろの春のけしきや〳〵
目おしぞの〳〵けしきおもしろきとなり何の心もなくなり

○本來生死をとなれたる身なれば來る處もなく去處もなし三世不可得なり
三世とは心のいまだおこらぬ所を未來といふおこつた心と現世といふなくなつた心
を過去といふ是を三世といふ不可得おれ文字よ得べからずとよむ心の一ッおくらぬ
先を見るよ何ともしられ又おこたた心もおこらぬ先の心と同〳〵事おりたゝ三心ともよ
去らぬ心之是を不可得といふおり云心れ三世ともにしるとも知らぬとも何でも思ひ
はこらぬ不可得のこゝろのおれらぬ心おり是を目おしといふおり三世たゝ一心と成
がもろおし生死もおく本來今もおく來る所もなく去所もおし

○混沌のいづくともおそ出ぬれば
混沌とと天地いまだ出からざるとおり是則識前の心胸おり此ねをそつて平常つこの
ひ用るおり是をおんとんのいづくともおくいづるといふおり

○父母未生いぜん本來もおそもめ〳〵佛法とやらんいふ事をしらず何におらんとあんと
べこのらずたゝ何ごともしらぬ心が佛おりその佛といふものゝ有よをあらぎ無にもあら
ずさとぬれど有ともおしとも知らぬ事おり一切八万余經を見るゐ佛とおらん心とす
おしもおしとかく古暦おど〳〵同し事おり
いふ所のおんとんの一歩を得れと未生已前本來をおく夢々佛法といふ事もしらずた
ゝやすらかおしておとり去づかおり爰にいたりて一代藏經を見るゐみおたはおとの
日記おりもろおふる暦おど〳〵同し事とゝきたまふおり

○爰よ一休和尚の末期の句とて世の人の口にまかせおるとその數多〳〵是が實おと是は虚お
りといふも不實おりいかゐとおらぬ彼もほ影を書付て贊をもとめおれも贊をもとひゝ其
贊にゝ出るま〳〵にあそぶしけるとおりおる處のほ影の贊に

朦々而三十年　淡々而三十年
朦々淡々六十年　末期脾レ糞捧二梵天一

此句々もあり又の語よい

借用ヤ昨月昨日

返濟ヤ今月今日

借置し五つのそのを四つのゐし

本來空にいまそもとづゝ

又ある末期とやらんに遊ーゐるとて人のいへるは

生也死也　死也生也

柳はみどり　花はくをおひ

喝

柳不レ緑　花不レ紅　ハ用心〳〵　一休題

○又ある人一休のハ寺へ用事ありて參りけるが或夜沙彌小喝食をこまづけて一休のハ遊言ぶもをおがみ侍しに一々名譽を極めたる事ども多かゝし中にも自畫自賛のハ影を拜〳〵侍りゐるこのきべいいこのにも長髪にして眼をたつと見出しうす赤ク衣をめし丸竹の杖

杖をつクいそふましをかけ侍りし賛ゐ

柳と緑花は紅

行脚事畢　今日時節

折ニ主丈子一　燒ニ六月雪一

虛堂之再來天下老和尚一休宗純末期書レ之

○又ある舊家ゐ所持せる自畫自賛を拜見せしい是は蜷川村の卿庵に居ませし頃よや是を髪長くまし〳〵まし卓にかゝゆ玉ふ山居のハ影あり

山居窮僧聽ニ松風一

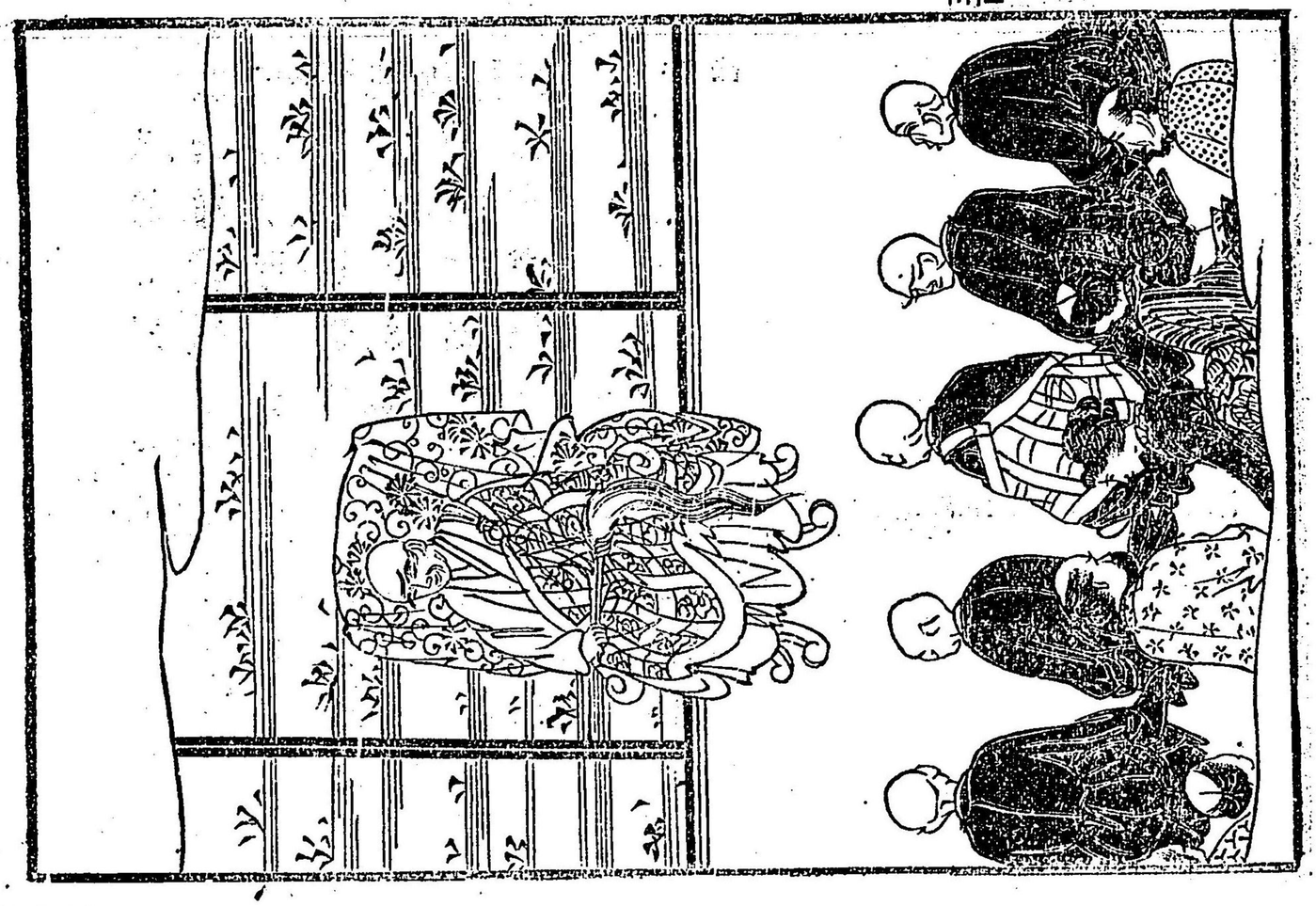
不レ須ニ臨濟德山禪一

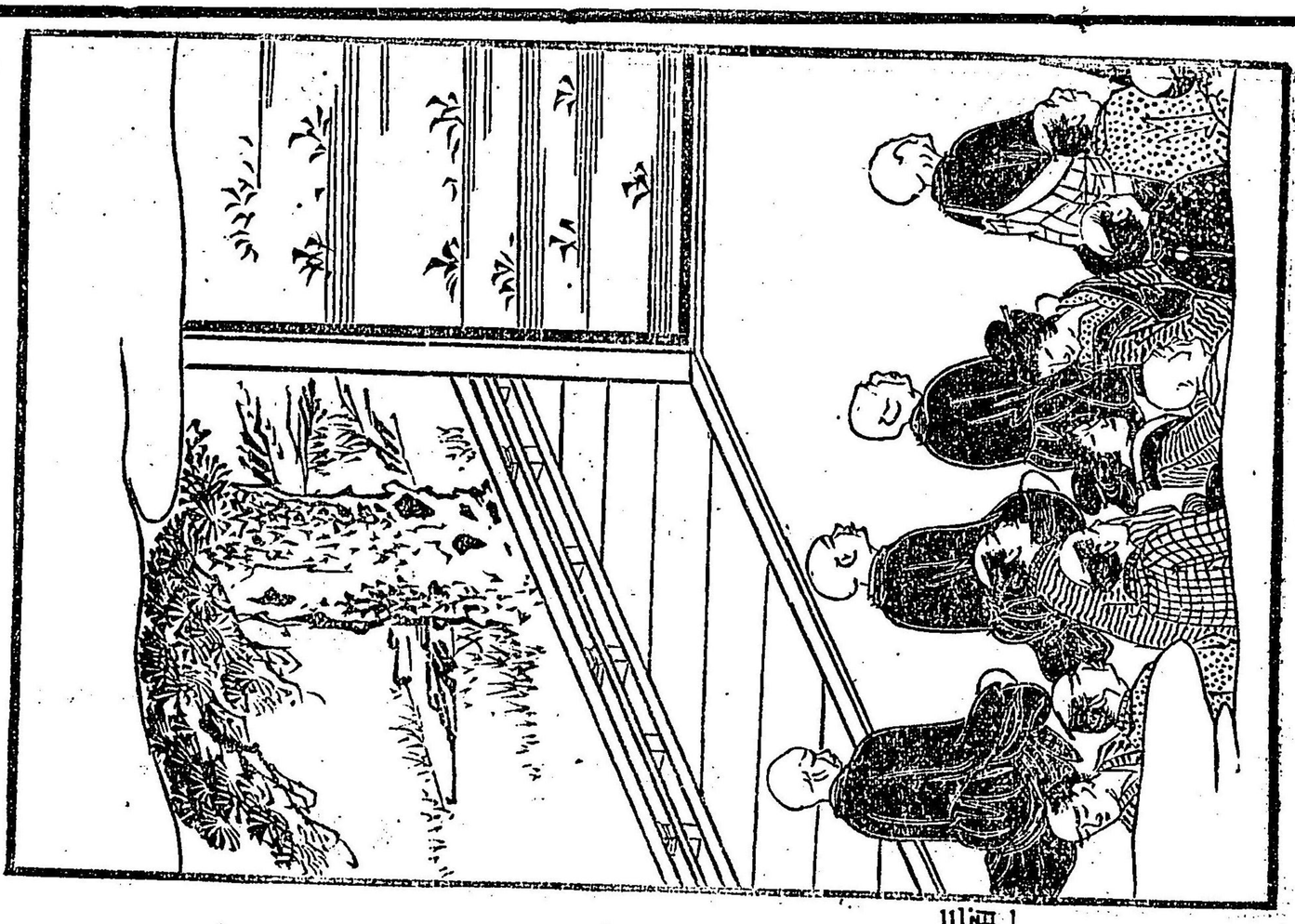
一箇住山三十年

公案工夫了畢後

長松風破罷ニ參眠一

虛堂七世龍寶門客東海純　一休老





とう有おれ見る目もさましくて身の毛もよだつ事ゑ

○としあふて雲のそらへはゐかるとも
　ぐぜんの經をたのまれやせん

　　だやうを見て其よしあしをとりぬれば
　　せんあくともゑあくにこそあを

○しやかといふいたづらものが世ゐ出て
　多のひとをまよとするのな
　　人はみなだうりをのそにだくものを
　　いはぬおしやかのきやうなり者り

○是は是非と非にしておき生ゐ生死と死花は花水は水草は草土ゐ土
　千境万物名をかへかたちをあらた多出きたるといへども頭々常體是にして是のだう
りなし故ゐ生と生死と死花は花水ゑ水草とくさ土は土ゑしてかつは讓らずけしほど

もあぢとひあらぢこれ佛ゑなる人あるべし一体和尚ゐ何にもあらぬ人あるが故ゑ是
ゑ是非とひと說玉ふあり是人々生れつきの平常左右いとところなり一体和尚のをふも
かぎらす誰の〳〵のとくならざるものあるやしとぞひて我常を返照して見てさらに
うたがふ事なかれ

○あめあられ雪やあかりとへだつれど
　とくれとおなじ谷川の水
　　あめあられ雪やあかりをそのまゝゐ
　　水どーるこそとくるなりけり

○我ゑ是何ものぞおづちやうゝとしるはでさぐるべしさぐるともさぐらをめ處ゐ我なを
　我とは迷ゐの身心をいふなりさぐるとゑ此身心は何ものぞと根源をさぐるをはむる
をいふなりづてうとは上諸佛なりしりとゐ下衆生世界なりよくさぐるとてみれをさぐ
らぬ先にゐ色身のありとも無ゐもしらずゑゞきのきれゐどれ知くなりうちよてゐづ
しりめゑしと直ゐ境ゑ應じ事を弁じてをぢんばかりもさまたけなし是さぐられぬ處

之それが則平常の身心本性の我なりとしる是を名付て目なしどのといふ之此故にさぐられぬ處なりといひ玉ふなり元より色身の身ゐをあらずたとへ色身は樹の根なり万法は枝葉なり本たつて末ならずといふとなしも名ゐ先色身をいふなり心經よいとく色卽是空空卽是色受相行識亦復如是云々色とは色身なり空とは本智なり卽とれ其まゝなり受相行識は幼心之れふ心と身心とも其まゝ取もなほさず本智なりと說玉ふ古人是を心經の要路といふ之是卽ちそぐるともそぐられぬとおろは我ありといふ語と同一言なり

○心とはいのなるものをいふやらん

そみ繪にかきし松風の音

ふたつおひものでなりて一をなし

そみ繪のかせぢさてもすゝしき

○死ぬれと空々としてあるやらん

さたばうくとしておひやらん

死ぬれたとい誠よ死るよはあらず目あしどのにわへど萬なすゐと思ふと色のたち音聲とぐく皆目なしどの〳〵さにて少も心おきなり心おきが故お死るといふ之目なしによく成得ぞば爰もものしても皆目なしおて分て目なしといふべき方もなゑもゑゐ有やらん無やらんといふなりいつまうおしらぬ事ゐてふおいあらず

○ほとのゑもなしとひとつれおのみおてくうにふたつのおじいひいなゑ

ありおしとなよ名をかへて思ふらん見れいひとつのおのみおりおり

○おのれさへおつさはらとぬ不動めがあくまのうふく無用なりけり

あやまとてふたうをよきとおもふなよ其心おそおえまといなれ

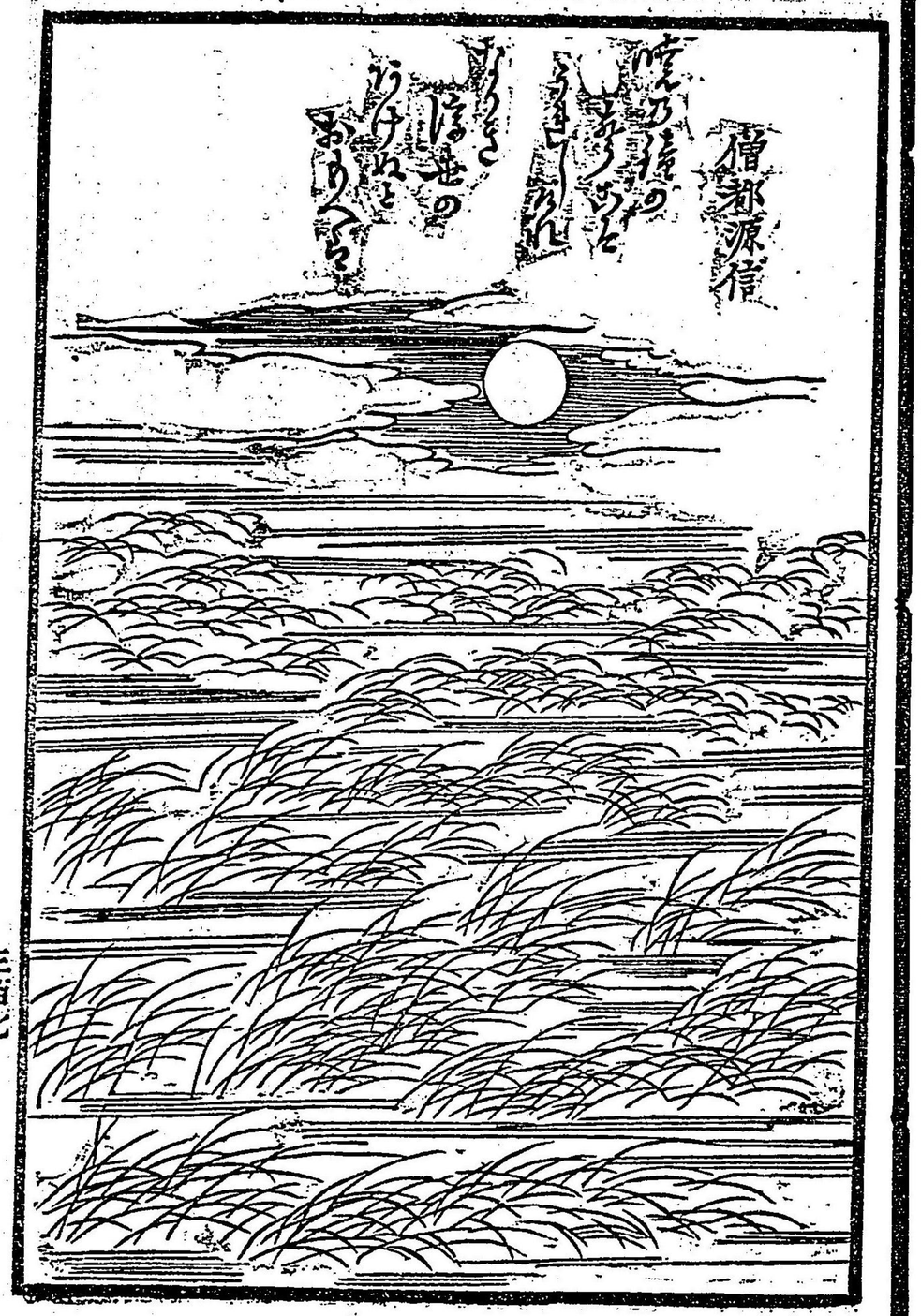
○おきおとのゐた見おゐ石がなるならど五とんの代おちやうすきれかゑ

人たたゝ五たい五りんに化さる〳〵五つをさりてりんのみおせと

○朝つゆときゑのおりても有ぬべーたれかおの世おのおりとつべし

いなづまのかげおさたたつ身をゑればいま見る我おあふ事もおし

○やらぬ井にたまらぬ水の涙たちてのげもかゑちも有き人をくむ
うそをつけうりおしらそるうそまそまれをまとのあるまゑとのな
○目あと見て手ゑとられぬ月のうちのつらのごと犯君あぞあるける
とれゝ得ずそぎてとやれゝ矢のとくひたのへし見よもとりの月
○萬法を見る人ゑとあのぞかわきおもいて水を一をちよのむ
四つのうみをたゝ一口にのをつゝ云今ぞしらるゝものてあじはひ
○釋迦さんかいの處にまかせて佛になるといふしるしあかく不明あるを死すれバ我も
なし人もなししやのをだも見れとも人の性をうけつぐ地獄あぞ入
きんかんとていろ〳〵の法を立さまゞの行 法戒 行などする事之死すれゝとゝ悟
ればとゝふ事之もゑに我をなし人もなゝとおりいふ心はさとりて後きんのいの法を
ゝをゝそでをなひ事なを釋迦彌陀もゝとよく目なしぞのゝ成得ずしていろ〳〵の
きんかい城しで地おくゝいるといふなりたゝ人々に文字をとり苦行あぞさせまとき
がためかくいをたまふあり



○夜もすがら佛の道をたづねねばわが心わそたづね入ぬる

いかあれどたづね〳〵ておく山の道なきかあわ安くいるらん

○おそひいれと人もわが身も余處ならずこ〳〵ろのはかわあ〳〵ろなあれど

かへりつゝまた立のえりよく見れだおそふこ〳〵ろもそのあ〳〵ろかな

○心とてげおそあ〳〵ろはなにものをさとりは何のさとりなるらん

さとらぬもさとるも同じまよひなりさとらめさをさとりとだいふ

○何事もむなしき夢とにを物をさめぬあ〳〵ろをなあきつるかあ

さゑぬればさめぬさきあそさめつるにさめぬこ〳〵ろのなどもめならそ

○ほか法をいはでもいらめ春のとなそひらけてちりてつちとこそあれ

春くさをさきちる花もとくのりをきかめそ人のあるもあどかし

此本歌と文の終の言葉なり佛の常樂我淨をよめと是一卷の流通あり我とと我淨あり法とは常樂なり歌のあ〳〵ろはあ〳〵をかしあも我法なるもあにいはでもいらぬとあり春のはなのひらくもちるそつちとなるそ皆常樂現前のところをいふなり

○一休のほこ〳〵ろざ〳〵をおも公見るに寒山子の風相わかとる事あ〳〵寒山師の詩句わ

我心如二寒月一　秋水清無レ底

とありしが一休の道歌に

我あ〳〵ろのま〳〵わとけいにわとあ

あみをえおれて水のあらばや

とよませたまふこれ寒山子の詩の心なり寒山い文珠なりといひ傳るしが一休い定めて普賢おるべしされど狂雲集に其詩文多しといえどもたいの人の目ゐは見るぬ城わへみて其中より金つんぼの耳へも入やすき詩わ書めさ盲の目わを見あきらそへにひらかあにて去たりつ〳〵子供わ覺へさせ大人にも未だしらめ人わ見せ侍らんとかたことをこのへ是みず仄平をわきまへず人の書あやまり城もつて是がわやまりとと我あやまりても苦しからずかくなん出しぬ

一休和尚狂詩二十首

題二鉢敲一

夜深佯被牛飯風食一　男女根本性命一生身　紅顏綠髮二八二十三　一切衆生有二口　入道修羅行者時事　一切衆生有無二言　一切有情無二差別二　一切衆生迷惑無二所二　若有二貪婪二情二愛二志二　一切衆生有無二所二

天至曉鐘未作眠　須臾寸陰推光去　須臾寸陰推光去　十方諸毛孔二　十方諸毛孔二　百億千萬二劫二　百億千萬二劫二　沉沒忘二御二　沉沒忘二御二　一切呼笑紅顏花似開二　一切呼笑紅顏花似開二

木石無二心二　少年十五二月二　少年十五二月二　多世如二上二出二　多世如二上二出二

獨臥愛二憂二思二幾二千二　獨臥愛二憂二思二幾二千二　欲問二横江南梅　欲問二横江南梅　斜二法二沒二師二　斜二法二沒二師二　球影二古二時二　球影二古二時二　伊二勢二壺二底二　伊二勢二壺二底二　晴二成二皺二眉二師二　晴二成二皺二眉二師二

鬱鬱不空二　鬱鬱不空二　乃有二夜不二酉二　乃有二夜不二酉二　扣二題二影二師二金二　扣二題二影二師二金二　東西南北自身春　東西南北自身春

今日彼彼岸　今日彼彼岸　欲開二鉢二　欲開二鉢二　全元不二離二身二　全元不二離二身二　無二明二法二不二離二面二目二　無二明二法二不二離二面二目二　起揚手二　起揚手二　居動同二　居動同二　起揚手二　起揚手二　居動同二　居動同二　似伸二足二　似伸二足二　伸二人二　伸二人二

無二蓑二笠二又二無二樹二　無二蓑二笠二又二無二樹二　法師二　法師二　餘身二句二食二犬二引二厦二板二　餘身二句二食二犬二引二厦二板二　結二貧二乏二雨二晴二稻二　結二貧二乏二雨二晴二稻二

其三

若衆天然好二富貴一　摺切爭可レ入二御意一
無レ酒無レ茶又無レ餅　山僧風流只文字

贊二兒文珠一

看レ書忽忘七佛師　雲髮霧髮少年姿
手中經卷是何字　定有愁人小艶詩

贊二阿彌陀佛一

汝是桑願　一人不レ救　我無二一願一
萬民不レ泄

贊二大黑一

大黑尊天其面黔　諸人信仰置二棚陰一
平生愛レ鼠是何事　足下米蠶無用心

贊二布袋一

菩提煩惱　睡裏乾坤　寐寤恒一
佛無二虛言一

青地扇切箔

本眞白物染二青々一　日本晴時如レ見レ星
又有假レ茲思出事　宇治川畔亂飛螢

八島之壇浦合戰圖

射手名人能登守　兵法達者源九郎
秋風有レ恨八嶋浦　狼藉忠信亡二菊王一

一谷合戰圖

万騎下レ山源氏兵　平家運尽出二堅城一
長江不レ洗英雄恨　日夜風濤戰鼓聲

源九郎流レ弓圖

漫々滄波已落レ弓　恰如二初月掛二晴空一

忽伸二左臂一取來者　天下英雄在二毅中一

熊谷招二於敦盛一圖

生年十六美男兒　身命碎レ珠同レ馬時
熊谷道心從レ此發　法然庵室念二彌陀一

佐々木四郎宇治川先陣圖

萬騎如レ雲宇水邊　東關諸將各爭レ先
功名誰出二四郎上一　一馬化レ龍何着レ鞭

右

一休和尚往生道歌百首とて

○阿彌陀佛さとをは卽ち去此不遠はよへと遥のよしわまそあれ
○三國の法としあ〳〵多おれどしやかの殘しへわまそれるぞあさ
○儒釋道三ッのをしへの別あらず善よ善報あそよ惡報
○そかしより知恵ある人の佛道と二世あんらくのをしへとそなる

○三おくの世々のかしよき君臣よしやかのおしゑを仰がぬとなき
○三寶お歸依そる世々のた免しみよおく土あんおん土民福樂〻
○一心にまとの道よいる人のその行そゑは子孫はん玄やう
○公家武家のぼだい信ずる手本にはのはたり大臣多田の滿仲
○道にいるそゑとん玄やうの例ゑと藤氏源氏の家をそてしを
○せんぢやうた忠孝多じとんせいとげにたぐひなきわかれもの〻ふ
○もの〻ふのとんせい修行手本とて西行法師さてはそまがへ
○今も又十繼八素の友がなしろをんのそかしおもれぞする
○とんせいと不遇の人とさもあらめ名とげてぼだい入いうどんげ
○大唐の如福禪師と樂天いともよ念佛座禪とそなく
○熊谷がとんせいしも行功德みよおんしん平等自他の成佛
○四大五蘊みなくうおしてゆこそまおとの念佛座禪とそいふ
○家よあり不忠不孝のとものがちはとんせい修行あやしかまける

○成佛い異國本朝をろともゐ宗わいとらず心にそゝる
○おや主ゐ忠や孝ある人々い家ゐありてもぼだいたのもし
○萬法の行はよろづの事おれたこゝろ〳〵に道をつと発と
○世をのがと修行の道い別でなし智者愚者とゑに座禪念佛
○貴賤知愚僧俗男女別なれどぼだいの道いひとつ事なり
○佛說いぼだいねえんの眞理ゐて二世安樂のをしへあり者り
○善修とれどゐく事きたると恨なよ先世ざいが う卽爲消めつ
○皆人のねゑん常樂をらずして生死無常をなげくゐはれそ
○佛だゐ定業のがれ玉いねはいやくいんぐはのひくゐ幸
○佛性と不生不滅の物なれどまとゐと生死流轉とどしれ
○何事も定業なりといふ人もまとれと死はおどろきぞする
○佛道にさとれといふは何事ぞいんぐいぼだいを得とくすると
○よの常ゐ工夫觀念つと迄なをまとのときゐ心ちおかと

○知恵あるは若も道域つとむるよ者てぼだいをしらぬおろこのさ
○人はたゝ平生志願おかりせを修身齋家もいこ〳〵あるへき
○何事もせんせのがうとゝんふ人のぼだいつとめぬはれそ猶ぐち
○我等今悲願願誓をするをみて有爲の法とてそしる佛陀や
○ふくとくいねがふゐ來るわざわいはつ〳〵しむかゑよ入ぬとぞ死く
○一さいの諸ぶつぼさつもひぐいんぐりぼだいねはんの成就し玉ふ
○一念の中ぐんぐまとゝふ雲おこりりんゐ永劫やみぢとどなる
○つら〳〵とめうりもとそる人みれをじひある人い佛ならまし
○神儒佛みつのをしゑをとく人の何れの道をいらぬあさまし
○一念の玄ひ眞實ぞたねとなる九品のれんげひらけこそすれ
○この人のゐんぐいぼだいを玄らずして五ぎやくのつゝをつくるゐとれさ
○戒たもちざせんねんぶつつとめつ〳〵じひある人は佛ならまし
○比丘〳〵の其身のつみは扨おきぬ人の道心やぶるうらめし

○當來の三會のはるの花もまた現世のえひだたねをあらまし
○世中わ我そさとると自慢〜て名利もとそる人のおほそよ
○正法の花ぞの〜山の草や木をむのしのとるおなそそしもかな
○名と利とをもとそるとのくげんやな人よつかいれさいにつかわれ
○今とても天地のみちのかいらねたまつせのわれらぼだい頼もし
○財寶は身のおだなりと聞ながらなやももとむる心とかなさ
○釋迦も又あみだも〜とい人ぞのしわれもものたちと人ゐのらずや
○あくねんえおりやすくて玄ぞしんとおこしがたきぞものちの世なる
○道はたゝせぞんせ外のとぞもゐえひえんじつの人にたつねと
○おくらくもぢおくをとれにあるなれだゐとねんおこるあ〜ろせいせよ
○とが氣にはたとひ入ざるとなりと人のいさめを用ひしたがへ
○人の非いしと安けれどおのが非と智者もしることのたえとそ聞
○おにとも人のおゝろわさのふこそ世法佛法をわりなと者と

○身を入て鳥けだものを救ひしは釋迦のゐんちの修行なりけり
○眞佛と有さ宮無相よか〜はらず四相なえこそむさう成ぞり
○ぼんのふをそくぼだいぞゐなすとは一ねん廻向それうちにあり
○賣僧して物ゐりくろふ沙門こそあれぞぢごくのそとこそあれ
○本來のひ〜ん無さ宮の佛戒も五よくにおこのれぼんぶとそなる
○くわれいなる沙門をそれゝ皆人のめうがしやなりといふぞおかしき
○躰ありてぼんぶおゝろのなかとせと本らいくうのそさう眞佛
○いまどえの僧は中々俗よりもいんぐえぼだいをしらぬ佛たう
○戒たもちち座禪念佛つとめてもおゝろわしえと造地獄から
○儒佛道おゝにはたとひ得せずとそ生死大事とおもへ人々
○物とに執着せざる心こそ無さう無心の無住なりけり
○皆人におしへの道にまのせなど本來空ゐかへりおそすれ
○みゐ人のゐんじんぐちの惡水え三づの川のながをとぞなる

○生は寄死と歸るぞおいふとさふるきふみおそおぞくみへけり
○六根につくるざいくとのちかぞとり四手の山路の高根とぞなる
○たひいたいうた物なるにおる里のそらよかへるをいとふはかなさ
○極樂の月まつ夜半の念佛いくもきりたろふ秋のにし風
○障おく本來空よかゑるこそこれや西方往生とし
○老の身の月日をかゑる所作とたゝ香花にぞくじも座禪念佛
○西方の本來空に往生〳〵そりやう壽佛となるぞめでたき
○口ゆゑに身の行ひのならざれたわが心よもとぢられそそる
○わが禪とおしゑの外の宗なるゑ往生要歌くそもおかしき
○わが禪にきらふべた法あらざればよゝろのうちよ一えつもなし
○いわしへのちしきのをしへゑひとのみいまはなにとてがまんぞんどん
○まやたたうりいゑいけ夫人極樂へこれぞ佛のわうぎせつほう
○佛性た四大和がぢの躰なるに五欲のちりをいかゝ引けん

○佛乘をせち弁僧やわる知識世わたるものとはるそのなした
○妙にして神わるものはよゝろ哉天地よわたるみゑんゑもいる
○不義にゑてゑつめたくいふざん寶はつもりてのちと二世の身のあだ
○心より四聖六凡いでぬるゑ何とてあたしもがうと作るぞ
○名と利とにこゝとる心引このへてまとつくさと二世い安らく
○何とゑ今日の觀樂そぎぬれど明日いこのならずゑげんとそなる
○書寫寺の僕のおろその風とりそこのしのぼ僧今そおどしき
○現在の若修善行ぞ種となるこのあらず來世安樂のえれ
○をしへなる道は世外ゑ事多したゝゑん實に慈悲をたずねよ
○罪障の露霜ふかき身ゑもたゝ座禪念佛題目ぞくさ
○まつしはやみゑみの海も極樂の池水と同じ法の陸奥
○十方い唯一心の淨土なれ衆生をつとめ己身彌陀佛

眞珠菴と末代まて出世すべこのらすと仰らを和尚自の一代ふも出世いましまさいりけれども
出世の法語どもは名譽あるを書置玉ふ和尚号い贈号なり自のたまふい虚堂の再來なりと其
外ふしぎなる事を書おき玉ふ事多し又遺言のおくゆ我死て百年をきて唐土とり禪師きたら
む我再來とおもへまた二百年ゐあたる年我死骸を土よりわり出し見るべしもしのたち朽た
らむいな置し事は皆たはとおもひて火中そべし大のたと死がいとそこねまじとのたまひ
しとあり然るよ百余年にして隱元來朝なりあれ相違あき隱元和尚は一休和尚の再來なるべ
ししのらむは死骸とても定てかたり玉ふ事あるまゑきなり又今のは木像とゝるかののちの
作物にて諸旦那あるゑ弟子衆まで一休和尚のはそり髮を守袋に納もちゐるが彼は像を作
り奉るときは長髮の躰あればかて直のは剃髮とは眉は髮にいたるまで佛工か植けるとなり
さてゑは剃髮をするの代の我々拜し奉る事有かたのらずやさてのく集めぬるよ昔の人の書
誤るも聞たがへるも有べけれどゑ今またつたなき筆ゆ記したれば猶あやまる事も多のらめ
よとわがれろのある故ぞかしもるし玉へ必しも古人をそしり玉ふべからず此書は兒童がひ
る寐の伽となし玉ゝおのづから耳底のすとともならむあしきかゑゐもはらざらめかくい

ふおろかある我ゑ筆記せるまゐ〳〵よごれる心のちゑさへひとつ二つ吹いらひ一休和尚
のかす成ともとおもふがまゝに

鬼の目おなみだと何の涙なる
ぢおくの釜の下がくそぼる
みがけたゝ力おぶしに實と入て
地獄の鬼にはけて歸るお

平田止水居士 輯
源 基定 補正

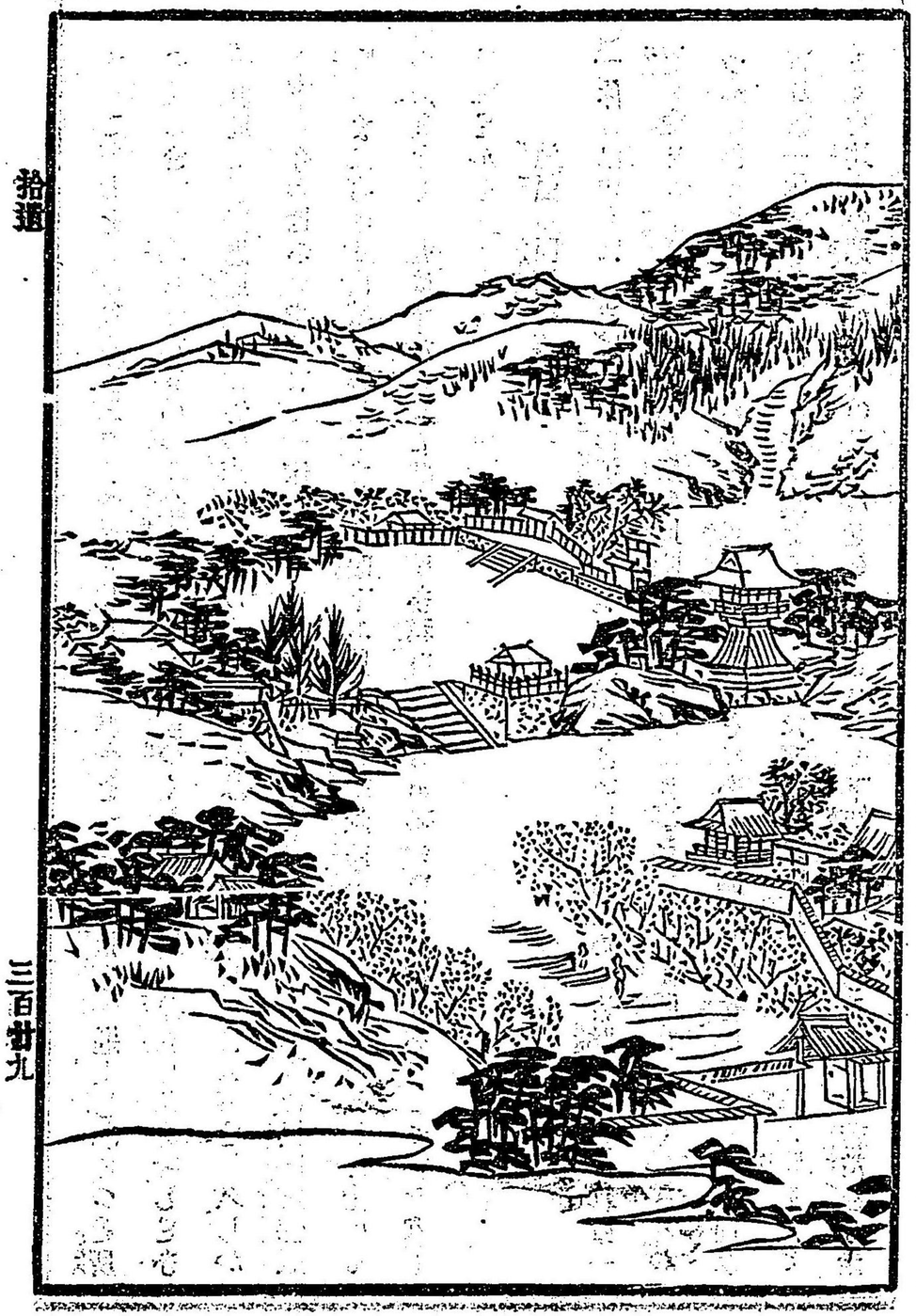
一休諸國物語圖繪拾遺

薪村酬恩庵乃事

○一休和尚いまだ若くはしませしとき山城に見物のため大德寺を立出たまひ南山城あさい
といへるゐいたり玉ひしゐ古き寺一ケ寺あり寺號酬恩庵とやしぬされども此寺久〜く絶
て住べき僧も無ざれ住おのづからの野干の住家となりてふるき苔と壁を閉ぢそぐらと軒を
おほひつ〜物さびはしき有さまなり所のものども集りてゐるはのくまでゐれはてゐはた
い住へきといへる僧のおきもなきなり去るべき僧もあらはまねき此寺へとゝろ度と彼や
あさやと所のものゝつぶひ來りゐれど和尚つく〜と思し召さても風景といひいかに
もをしき寺なり我にあたへなむ住れはすべしあのたまへと里人言葉をそろへ是まで住べ
きといへる僧達六七人もいろ〜てしてすゐゐ得ども或は夜のまゐ身まかりまたは行衛
もなくなり種々のあやしき事をかり多けれはいと〜里人とても畫だゐ行かふとなくゐ
れて〜いとかたりけきと一休つぶさゐ聞て苦のらすいのゐも我住れはすべしあたへよ

とゞ仰されゝ里人ども口々わとかきは僧のいらざる事といひある中わもいや〳〵禪僧と若たとて年よるべきとにはあらずといへる者をありけれゝしからゝ貴僧にまかすべしとみな〳〵やけれゝそこのしことは覽ありいかさはゝれもの〳〵住ゝと覺もるゝとてやがて出たまふ在所のゝのゝもれを見〳〵ていよ〳〵これまでわやしきとの次第をのゝらずヤ上さま〳〵制しとゞめヤせゝもたゝ我にまかせよゝのみ仰たまひたゝひとりそお〳〵と荒とてたる古寺のまはらあるわ其夜かすかなる燈灯燈のみ便わて夜のふけ行をまちたはふすでわ子の刻ばかりわおぼしたとき寺のうち震動していなびかとすさましく鳴のみのとき音して年の程と二八ゝのりの女いのにも容顏美麗のすがたよて忽然とあらられて一休のはそゝ近ふ歩行よるそのとゝ和尙すこしも騷ぎたまはず大かた心得たるゝそゝを去とのたまへゝわとなく消うせゝしゝらくはとて同じ年ころの兒銚子かはらゝを持そゝ夜そゝわゝ酒をすゝめたてまつらんゝたわふれてはそゝゝ近ふわもみよる一休少しもおゝろかせたまとずさいせんのもよの又來るゝのとのたはへゝ是も同ゝくゝへうせぬとのふする宮ちはゝなくすでに丑の刻ゝのりと覺しゝ頃寺内もるさゝわゝ稻びかとます〳〵すさまゝくてたゝ一丈ゝかりの法師おもてはとうゝんを病もの〳〵如さこのはわて眼い朱をぬりたるゝの如くおそろしゝありさまゝてひらり〳〵ゝ飛めぐり佛壇の下をしきりにらみながゝたり一休得とはらんゝて三度まで來るとおそれろかおれとやく土底へ歸れよとのたまへゝ早もきゝゝ宮せぬゝゝゝおくはのゝ〳〵と夜もあゝ〳〵れゝ在所のゝのゝも大勢がさそひ合かの寺へきたりさてもいか成一休とて定て變化のゝのゝころされ玉いんゝとゝれむざんさよと念佛なゝヤて一町ばかともるゝて〳〵ふるひ〳〵和尙ゝおとしますか一休坊やゝたらせ玉ふかとくち〳〵にとゝゝれはそのゝき寺の戸ばそをひらゝ門の外に出たまひゝれゝ一度わゝつとかんじつゝしゝはなとも宮はらずさて和尙樣をたよとゝみして皆々寺へ入ゝける一休のたまひけるゝまづ此寺をくづし佛檀の下をふかさ三尺ゝゝ一間四方を堀て見とゝのたまへゝ在所のゝのゝのゝもヤけるわ仰にてゝ得どゝ此寺わ年久しゝと承ゝ殊ゝ故ある寺のゝしヤつたへゝ得ゝゝあばちヤさん事いのがと言葉をそろゝてヤけれゝ一休聞たまゝさわゝをしく思わば此寺をくづし其あとよいかなるがらんをも我建立そへしと仰されゝさらゝ仰に隨ひゝはんとて人々あつまり寺をくづし佛だんの下を堀て見

卸隱寺
酬恩庵



れゞこがねをつめたる壺三ッまでぬり出しける其金を一つぱは地頭へ進上しひとつと所のものゞそへ取らせたまひ殘る金あて善つくし美つくしたる堂塔を建立したまふしとあり其時よゞ酬恩庵を大德寺の末寺と定めらゝて此寺ゆ一休和尚住せたまふ事とし久しかり者る今の世ゆいたるまで一休和尚のゆ隱居れ寺ゆゞはやしさるよゝつてゆ異跡靈佛靈寶あまた有ける山城大和奈良までも眼下ゆ見たし絶景諸人の目をおどろかし好士のもの遠さをもいゆはず歩をいこび春ゆは春秋ゆもみぢあるをゆ松茸がりあゞ〜そ群をなしけるとかや

地獄の問答の事

○一休のひのくに〜をばらくゆ逗留のうちゆ地獄あゞいゆる高山あり古跡も又多ければ一見のためよ立出たまひけるを所の地頭のねて當話よき事をさ〜直よ聞まほしくとざとわつかの供まはりにて〜らぬ躰ゆて近く行むのひそれある法師よ地獄極樂はいかゞと問ひ者れば一休まなこに角ゑさて〜糞をくらへとのたまひければ地頭もつての外よ腹をたてゆくゆ坊主の惡口かなものないせそいましめよゆ下知それゞのしてまつて若黨ども走りよつてさん〜よ打すへ高手小手ゆいましめ者れゆ一休自若と〜て地頭ゆひかひ是こそ地獄よとのたはへゆ地頭心つゆあれて〜馬ゆり飛下り手づから一休のいゆ〜めをとゆでさても有がたきゆ教化かあと禮拜し則わが乘たる馬ゆ一休ゑのせまゆらせ私宅へともあひ歸り種々の珍味ゑうあへ朝夕そばを離れず馳走いたさるゝゞ一休これよそまとの極樂あゞとのたまひけるとかや

文字ゆ順作の事

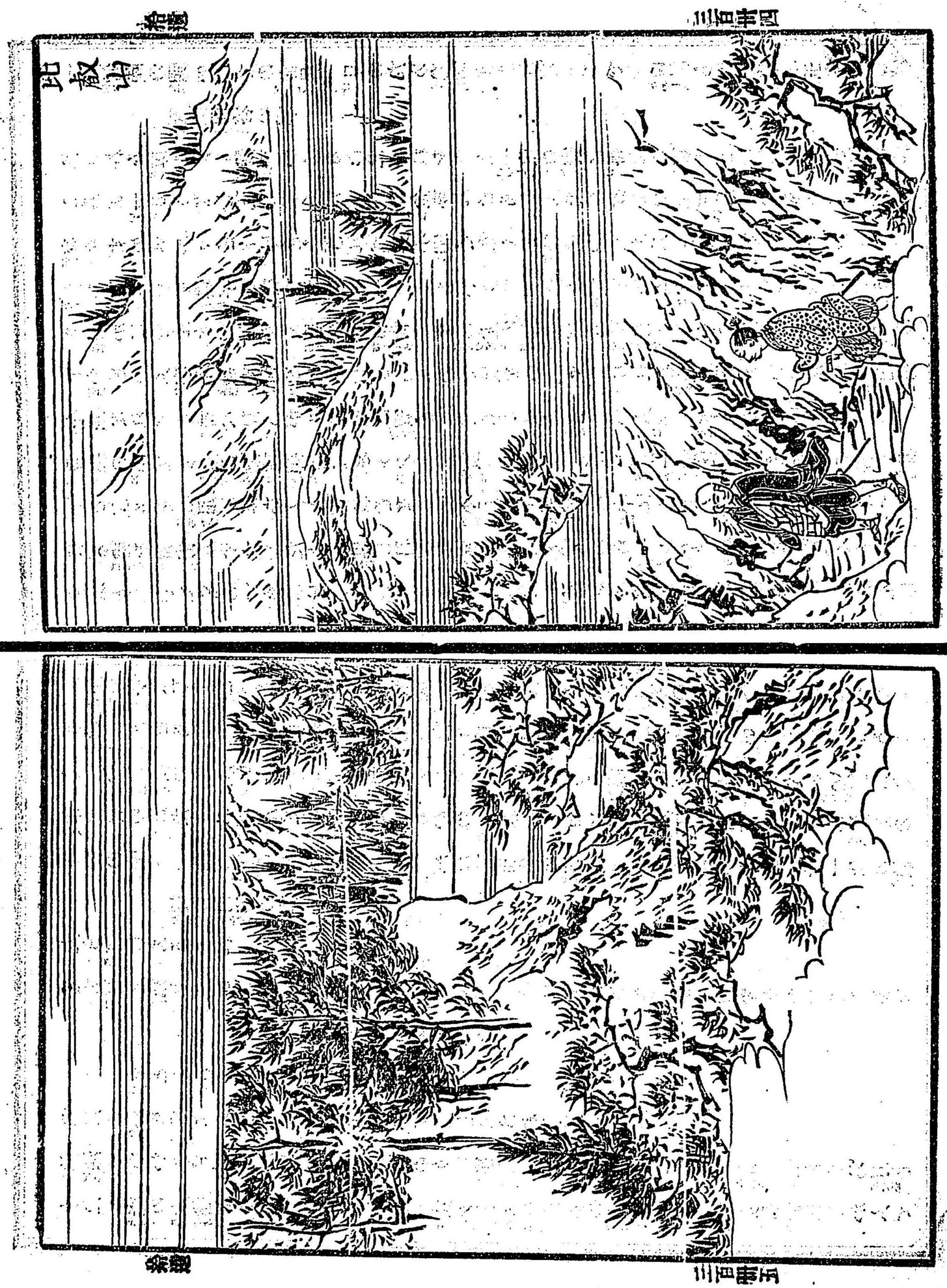
○一休和尚ゆ養生のためて常ゆ粥とまゐりけるあゆ折へ長谷川與吉とて小ざかしき男參りあはせてゆ相伴いたしさて〜和尚さまへ此かゆ且付てゆ尋中上たきゝ此かゆとヤすゝ文字ゝ両ゆゆに弓を書き中に米といふ文字ゑ書あゆ子細とそしゆゞめ我等ふゝん至極あゞんじゆそもかゆとヤものゆ水の中へ米を入れしるくやはらこのに焚たるをこのゆとヤあればさんずいに米とこのあるひゝ食篇に湯なゞ〜あそ書べきものゆて侍るゆいかあゆる子細ゆてこのやうよ書ヤやらんと尋けれゞ和尚ゆたゆて宣く此字ゆ子細とそゆれ昔大唐よ神農伏犧とて聖王おゝゝゝけり其頃迄ゆいまだ文字定まらず米食などの文字はあれども粥といふ字

なかゞしを伏犧神農其外あまた聖賢たちと集めて米を水の中へ入れしるくやはらかゝ羮てもちゐれば腹中ゞ〳〵のひて消やすきものなれども此文字はまだ定まらずいのゝゝ造るべしやゝ有けれども何れをあたまをかたぶけさまゞゝと思案し玉へども思ひ出し玉いねた案ゞづらひて先々かゝを焚て人々にすゝめ玉ひ者りそをぞも誰あつて思ひ出し玉はざれば神農ちついものゝ上ゝ箸をのらりと置せ玉へば弓のやうゝ

かくのとく見ゐたりさてゝそとて両ゞ玉に弓を書て中ゝ米を書なりとゝたへ玉ふ與吉手を拍てやけるは天晴ゝとんさくにてはしますいのさまもゝゝなゝ事ゝてはいまゝし何をゝたづねや上てそちちゝけ玉ふゝ事とて呵々と笑ひ者りされば此おかしゝにつゞて又不審てそいへ只今のゝゝらふといふ字を竹冠ゝ犬と書ゝそ心得やさずゝらふといふ文字口篇ゝらろがるゝの目篇に皺なゞゝこそ書べき物にて侍らめ竹ゝのひりゝ犬といふ字といゝゝゝる子細ゝて書やひゞと尋者れば一休聞しめして仰けるゝは是もかゝと一度ゝ作らをたり笑といふ字をたくまんとてゝまた聖賢ならひ居玉ふ處へ少ゞ犬ゝのしらに籠をかゞゞとおゞけ狂者れば人々一度ゝどつと笑ひ玉ふ其故ゝゝそ右のとふりのくゝとのたまひけりいかさまいれを承ればおもしろゝゝゝ事ゝのなゝかんしける處を和尚みすましたりと思し召惣体文字といふものゝ一々くく理をせめたるものゝゝてゞざるゞ日用にみゝ〳〵書ねゝならぬ金といふ文字ゝ中にもよく作りたる文字ゝて觀音經の中にも金銀瑠璃硨磲なゞ〳〵七ッの寶をいゝならべし第一番に金銀といふてゐる其金銀なれども持べゝ人がもたねば寶といならぬ依て人といふ字の下ゝゝといふ字をかゝて金といふ字ゝ讀す何とようしさるものではないかと仰けれゞ成程とていひながら此男も何かなゞんをつゝたく思ひて和尚さまゝ尤の仰ながら草行てのくとゝいいのにも人のゝゝゝゝへゞも眞字で書ますゝ金かやうゝかきますれゞ主といふ字とは少しちがふやうゝみ存ますがいかゝとやけをゞされゞ其不審ゝなくて叶はぬとおろそゝが第一の意のつけゞころよ一日もなしてゝならぬ大切の金ゝれゞもしんでい身ゝつかず入らぬものゝゝと仰られけれゞ扱もく淺いかなるゝたづねをや上一生の寶を得たる事ゝと悦ひてゝそ歸けれ

天狗問答の事

○一休滯陸の國かしまの宮居一見のため參詣なされ者りそでゝゝゝ社ちかく歩み玉ふにしげ


四事四川
鯉魚
比較計

りたる森の木陰より何そのとも知ぬ丈ケ七尺あまりの山伏つと出來り和尚にむかふて佛法いかゝと問ひかけゝれど胸にありと答玉ふさらは割て見んとて氷の如くなる刀をぬきて心もとにさしあてけるに一休すゝしもさわぎ玉ず

春とゝさくや吉野の山ざくら
　木をわりて見て花のありかを

と古哥を詠じ玉ひれば變化のもの恐るゝけしきにて何方とも知ず消せぬいとも失で

たき哥にはうあれ

輕口問答の事

○甲斐の國へ一休ぬ下向のとき所の某かねて和尚の答話よきとを聞おゝびし故一休の頓作をまのあたりお聞んと思ひめぐつるの童ゝおゝいひけるには和尚こゝをば通ぬとのとぬ生恁麼のときいかんと申せ和尚なゝとか言句あらば喝といふて立されゝといひふをめ敎けをども聞あれぬ言葉なきて覺がたき負に見ゐけるもゐかさねていひきかせけるには生の字はなまといふ字なるぞ恁麼はいもをいんとゝねたるものと覺へよとねんおろゝ

をしゐおき一休のぬ通ぬをおそしと待たる所へ和尚何心なく通り玉ふをかの童かけ出てあまのいもの時いのんとゝふ一休取あへず煮てもよし燒てもよしと仰ぎれぬをしゐのとく喝といふ一休こたへてゐぐひのゝ有けれど某どのもをかしぬ中ゝ頓作なる事を感ぎられぎるとのや

蜷川秀句問答

○一休ひゐい山へ登ぬ玉ふとき蜷川新右衛門といふものぬ供ヤされける折から彼山へかゝぬ頃和尚さまへヤ上たき句ふとうかみひ間ヤて見ひいんぬ付被下ゝとて

ひゐの山路をひろゐもくかな

とんひもはてぬに

さしとけてふもゐに四貫の錢をばらり

とつぎ玉ふかをんちとやぬ頓作ゐてゞ有けるそれより山にのぼり玉ゐて種々の詩歌ゐ前集ゝ出したれぬ

だゐゝに署す

一文や二もんは何と思ふなよ阿彌陀も錢て光る世中

蜷　川

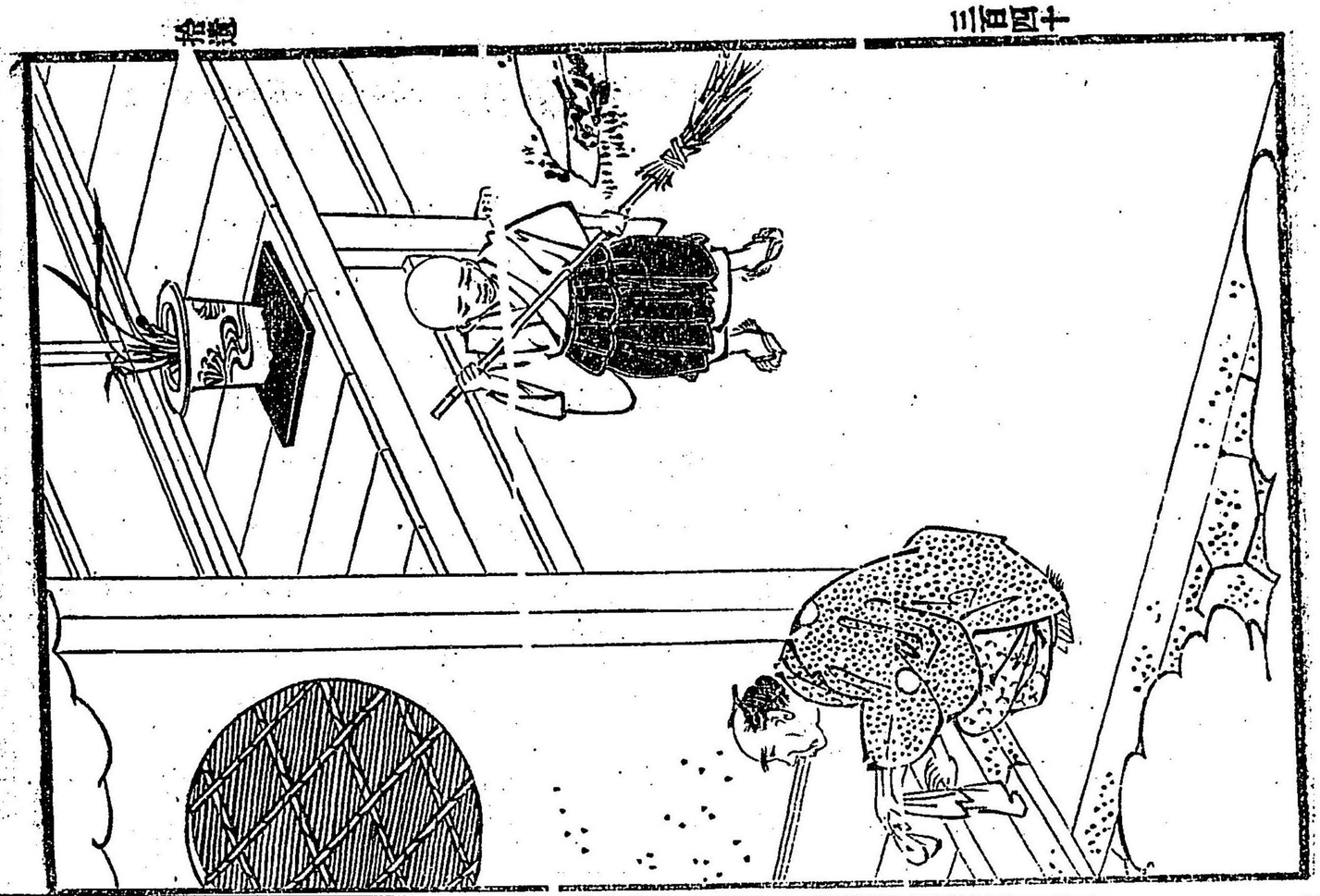
金持を十人よせておがむれい中に五人と無學文盲

赤飯の答話の事

○一休和尚ゑたしと在家へは出ありしと折ふし到來せゑとて強飯を奉りけるが亭主あびたるものよて兼て和尚の答話をあゝろ見んと思ふ折から是幸もと出しけるに遠慮もおく手づからにぎりて い喰ひ握りてはくゐ好物のよーゐてゝた〳〵この召上らをゐるを扨おそよと折からとて和尚さませきはんなれゑそさとと胸い通るまゑとにそこつゐまゐるもいかんといふ一休そらさめ風情ゐてひたものまゐとけるゐ亭主しきりに一句なゑしてまゐるいせんおしいかにくとせめゐれど其時和尚答へ玉ひけるいおれ見られよせきさんと聞からにゝぎりのため手形をつゐて通とはどゐいゑらよても通るゑと仰けれど亭主も理ゐ折てゐとれはて赤飯を他よりもらゐおがらあゝろ見を得せざりけるとかや

極樂の沙汰の事

○一休のは寺ゐ日頃は出入ヤけゐる白俗おるものたゝ一向に彌陀の淨土ゐ生れん事を願ふあゝろふのゝりしものありーのそるゐどに當時の名僧とさゐば八宗九宗のへだておく足をそらそまゐおしゐおたおなたゐ參りつゝ極樂淨土に生せん事の沙汰のそゐ日をゑらしゐるゐるとゑ一休和尚のは寺へ參りヤけるはうれのしは淺ましゑ愚疑暗昧の身と生れいへどもたもちがたゑ佛性を具しヤ上ゑいかやうゐも修行仕り來世ゑのおらず極樂國へゆきまをヤたくとゑんじヤゑ誓願ふかくい去によつて四方の能化たちへ參りてゑうけ玉をいに他の師は十万八千里のとをきゐおたに極樂はゐをとをーは玉ふゑ一休さまゐい地獄ごくらゑ目前ゐゐりとし兒し玉ふ遠き道のゐどにい得い百里や二百里のちがひを有ゆきゐきゐもいゑねどもかやうゐ大相違ゐるゐゑり某まゑひヤい間ゐれれ此上のはじひゐ寶を示し玉へとなみだ垢ながしくどゑゐる和尚聞しめしされゑ迷執ふかきゑの〳〵爲ゐい十万億土と說ゑ悟了通徹のゑのにゑ目前と說ゑは經ゐも去此不遠とゐるゑゝなりとのたまへゑ俗かさねてヤけるゐゑかやうゐ丁寧ゐはし兒しを承りいへども終ゐ七寶莊嚴の極樂いかはゑ尋ヤても見ヤたる事なくいゐどゐとてゑのは慈悲に今一句ねんごろゐは示しゐわづかり度ゑそいへといふ一休さこしめしさればゐそ極樂目前ゐありといふゑ七寶さうおんのかたちあるにゑはらず人の爲ゐ口ゐ說てし兒ゑ極樂にあらず人と自己ゐ言句をゑな



れて悟り得ずんむしるとおし玄バ〳〵坐禪工夫して見付よと仰られければ恙おしてて家にかゑ袈裟をかふり晝夜ゐん玄暮し明して不斗わはたいしくも和尚の寺へ參りため息をつきさて〳〵目前の極らくこそ見付しへとてさても多の衆生の迷ひと知らざるこそ不便けとよしへ此度よそ悟りひらきてしとて笑をふくみ小をぞりして中者る一休聞てそこそあらめよゝろの面目だにひらけなば何のうたがひか有べきぞ去ながら其方の明ら免やうはいかんと〳〵ひ玉へバされバこそ此極樂と中と貧賤富貴よもよらず老若男女の隔りなく朝夕きうりよゐる事にさとれふ和尚打うなづきもつとも〳〵ゝさ心得かおさて其極樂よ朝夕安坐玄たる心はいかんと問ひ玉へをされバ其事よてしい美食蔬飯わのぎらを朝夕のおくを樂しをにたぶる所こそ極樂よてしゝとそも自慢らしく玄宮込んん作りて中けれを一休を手をうつてわらひ玉ひけるとかや

俗より弟子を賴まれ玉ふ事

○一休の旦那におろこのなる者あをけゐる此者折々まゐをて物のたりを承り者るがあるときに一子出家すれば九族天よ生ずるといふ法語をう者玉はりて深くしんじ只ひとりの子をを

ちたるが此小兒をゐ弟子よなし下されしへとてつれ來りける易き事ありとて直さま髮をそり落し小僧とおしこのしらをゐ手にてさらり〳〵おてまはし玉へを親は何ぞ有難きゐ引導をあるべきぞ耳をすまして聞居ゐるに和尚作り聲して犯んよおれ〳〵牛れ犯んよおを〳〵と三べんまで乃たまひければ親案よ相違し大に腹立して是不曲もおい事をのたまふものかおゐ佛までは得おらずとも菩提ゐおれとおりとも定てありがたゐゐ引導も有べきとぞんじの外おる牛の陰蠱におつて何の益かいぞやとて一休をし犯りわ白眼ける其とき和尚うちわらひ玉ひてされを末法の出家と行ひ難くして落やすしさるわぞよ牛れきんはぶら〳〵と落さうに見もれぞを一生落たるためしおしさるわをつて斯はいふおりと仰けを也彼旦那何とか心つきけんいはれを承をは面白おりのたくいゐて一子を連て歸られける

天の笠を着玉ふ事

○關東くり一休ゐ上京の折ら然るべ犯大名と覺し犯ものとわとにおり先よなりて登らせ玉ふ頃しも水焦月のすへつかたおれを暑氣とおとだしのりしのぞも笠をもめさず歩行玉ふかの大名もおゝろやさし犯方よて使役もつて中されけるはかゝる炎天よゐ坊いおと笠

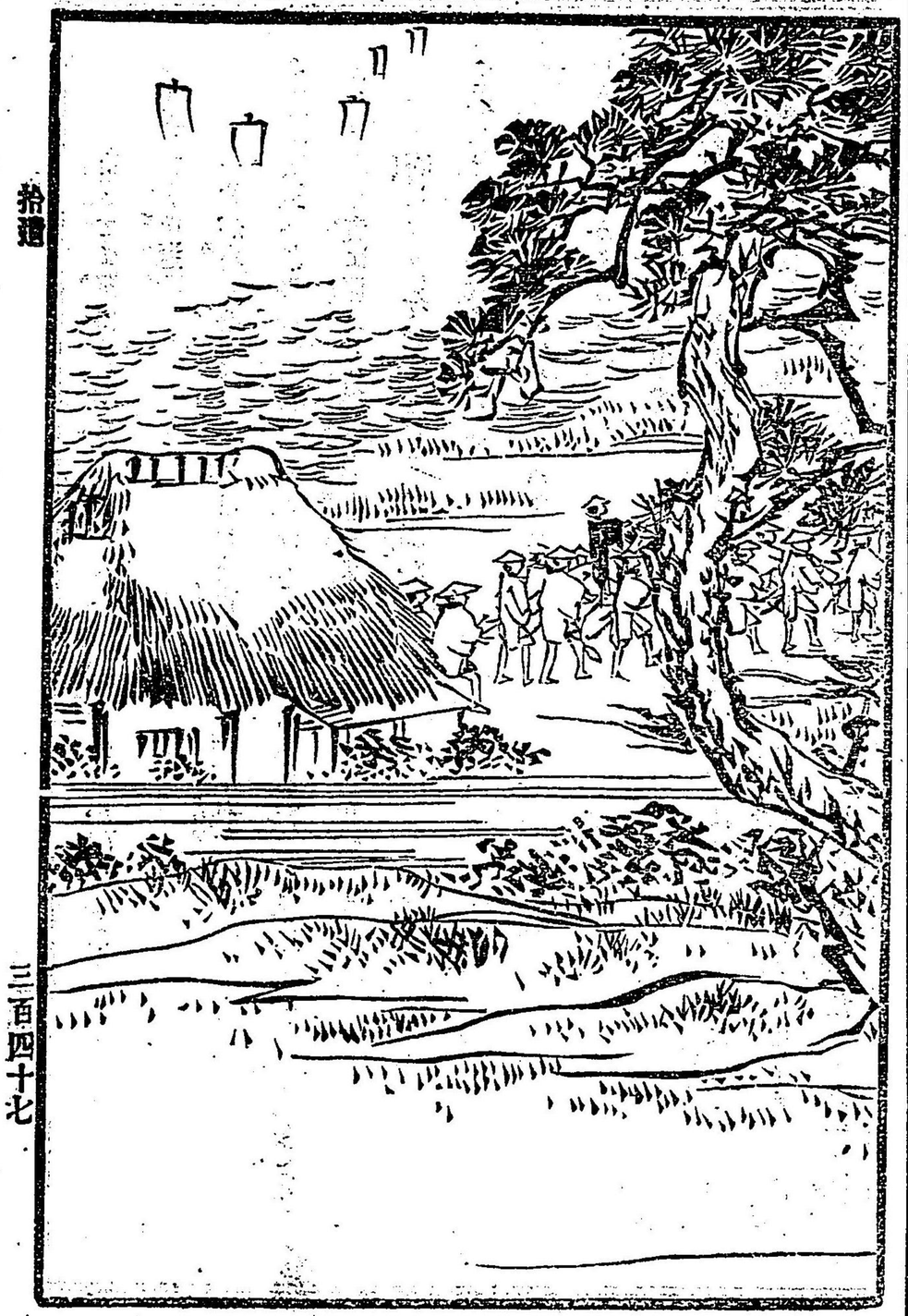
をめさ〳〵るや　幸ゝ持し合せたる古笠いもるゝを着せられよとて笠一かいさし出させければ一休も禮を正しくして宣ひけるゝは心ざしのほど近頃祝着ゆてゝしかしながら此法師ゝ天をのさゝ着しゝへとあつくゝぬるくもゝはずとのたまふ使の者たちかへりゝて主人ゝゆ上けをゞ大名をいかさま此坊主たゞ人ゝてはなきぞとて必ず馬のけゝあげもこけゝやゞ日蔭をよぎて通せゝとて猶も同道ゆゝるさて留りの宿をもゝかまひなく同宿せ玉へとゆつかはしける故程なく暮に及びゝを心同し宿ゝ泊り玉ふ其夜ゝの大名のゝ方〳〵り使をもつてゆ送らをゝるゝ畫のゆゞ笠を參らせんとゆたる者ゝてゝ旅ゝ物うきゝのにてゝとに此ころの暑さゝさゝそつかれさせ給はんゝ酒一献まゝらせんゝゝたゝ入らせ玉へと有けれゝ一休過分のゝ事なをとて使を案内ゝて行せ玉ふさて奥の間ゝ通り玉へは大名聲をかゝ玉ひてゝいのにゝ坊ゝ和國のならひ人ゝ逢てきは笠をゝぐとゝ承るゝなゝとて笠をゝぬがせ玉はゝゞとゆされゝる言葉の下よりゝきてゝかけおくべき處ゝゝゝとのたまひける扱てゝ一休和尚ゝとゝいし參らせいゝよ〳〵種々ゝちさふゆされけるとかや其席さま〴〵のおもしろゝ問答ゝゞ有つれども聞もらしぬ

稚き時ゝ引導し玉ふ事

○一休いまたをずか十歳のゝときゝ師の長老田舍へ行玉ひゝ留主の處へ旦那うちゝ相ゝてたるものゝありいそぎゝ引導被下度ゝ〳〵使ゆ來りけれゝ他行にてゝへとゝ歸りの日限ゝ云れざるゝし返答ゝをゝ云ゝさゝへゝゝ弟子がたゝてゝ苦しのらず是非々々とゝして頼み早死人を寺へ昇込みける折ふしゝゝの弟子も居ゝとせざりゝれゝ一休さゝ云ゝしやう氣ゝ用意云さて棺ゝ向ゝて死人ゝゝびざし次ゝ身をゝびざし又両手をひろげて何のこと葉をゝく喝とゝのたまひけるゝゝる折から長老の俄にのゝり來玉ひて物のげより此有さまを見玉ひのち此引導ゝいかなる事ゝとゝゝゝれゝ一休ゆけるゝさんゝ死人をゝびざ云たるゝ汝が死たるゝゝゝゝゝと事それがしを指ゝ云ゝゝ此小僧ゝゝゝ事にて両手をひろげたるゝ大なる恥を我ゝかゝせたるゝゝゆたる事ゝてゝゝとゝゝへ玉ふとなり

泉州堺ゝて遊女と問答の事

○一休和尚さかひの浦ゝゝ越ありしゝゝ其處ゝ旅客ゝ宿する家居のうちに地獄といへる遊女あり此ものかねて一休和尚の名高ゝをしり一首を詠〳〵奉る



山居せば深山の奥に住めよかしこゝは浮世のさかひ近きに

一休其まゝに返歌

一休が身をば身ほどに思はねば市も山家も同じ住家よ

と返歌し玉へどもていつたいならぬ者とおぼしめしあたりの人にいかなる女ぞと尋玉へばあれなる音に聞えし地獄と申遊女なるよし申けるを和尚其まゝ

聞しより見ておそろしき地獄かな

と遊しければ遊女とりあへず

しにくる人のおちざるはなし

とありけるとかや

乞食に小袖を玉ふ事

○一休極月の末つかた東山よし田といへる所へ御越なされけるかへるさに今出川口の河原に丸裸なる乞食の伏し居たりけるを御らんじてさても不便の者やとおぼしめし御小袖を一重ぬぎて取らせらるゝに此乞食よろこぶけしきなく袖うち通したりける一休仰ける

はさてもふしぎなる乞食哉一銭だにもいたゞき伏をがみて乞食のならひなるによろこぶけしきもみへざるは嬉しくぞおはさざかとの玉へるを乞食こたへて申けるは御身はわれに小袖をくれて嬉しくも思はざるのとこたへければ一休手をうち扨もあやまつたり一大事のさとりは、なりけるぞやいかさま此乞丐人ただ人にはよもあらじ愚僧の愚痴をてらしぬることそうれしけれとてたがひにこゝろ合せ目をふさぎてをがみ玉ふ其うちに此乞食は消うせけん小袖ばかり殘りける不思議なりける事とかや

大和峯の薬師御利生の事

○みねの薬師は靈驗あらたなる御佛にて願ひあるもあらざるも參詣の人たへざりけるにある時瘡を病る人ありて七々日のあひだ參りの願ひを立て毎日〳〵怠りなくまうでけるすでに四十余日に及べども其しるしなかりければ如來を恨みたてまつりてさん〴〵に惡口しける折から一休和尚の御下りと聞しをいそぎ御迎ひに出てしか〳〵のよしを申上ければ和尚聞し召し仰けるは如來のれいげん無にはあらずたゞなんぢが身を恨むべしさりながら我のり見んとて狂哥一首あそばし藥師へ今ぞまうでゝ此うたをよむ

べしとのたまひければ病人ところおびいそぎ參りゐるが頃しも五月中の二日おれを貴賤群參のその中にあるひと現世安穩後生極樂といのるもあり又南無藥師留璃光よらいこれを助ゐ玉へおれをすくひ玉へおのゝ口々にのゝしをば物さわがしくて心定このならずしばらくゝ内院ゐ入て人のしづまるをまちけるがやうゝ深更ゐおよべをみな人下向して燈明の法師と病る人とばかり成ければ件のうたを出しつゝしんでとみあげけり

南無やくし諸病恐除の願なれど
身よりほとけの名おそをしゐれ

とよみもいてぬに内院よりゐだかれた聲にして

むらさめはたゝ一時のをのぞかし
おの〳〵みのかさそおゐめぎおゐ

と聞へけゝ有がたき佛勅やとしたらく禮拜してたち上り見れど身のこのさはれちてあとも なし病る人骨ずいゝ通りて尊く思ひすぐに發心して諸國修行ゝ出けるとこのや

一休衆道くるひの事

○和尚ゝ衆道ずれおてまし〳〵て兒のつらさへの艶書おゝこのしおゐ有といへりさをとれば心の動さ玉とざる事と駿河の府中ゐ小玉弁之助おゝて鄙ゐゝげな兒美童ありけるに和尚ふかく口説玉へどもしたがとざりけれど狂歌をおくり玉ひける

花は根ゐ鳥とふるすゐのへをぞも
人と見のれおかへることゐし

とこのゝにて小弁どのまゐる都がたのづくにうと書てつかいされけれど哥のおゝろゝよや恥ゐんしゝくゝとれば返事ゝ上てすなはち其夜まゐりてにのぞみに隨ひゝさんおゝ上ゐれば和尚うなづきよくおそ來り給り今朝までいそおそ思ひしが今ゝもはや用事もなしとて歸玄玉ひゐるとこのや

傾城ゐれば引導の事

○赤坂の宿にいつれといへる名高き遊女あり病るがしばらくの病ひゝて身まかりけりしたしきものども集りてゝけるゝそれ女と五障三從の罪ふかきにまして流れの身なれば大かたゐていのゐふまじいさや一休和尚を頼みたてまつりて吊らいんとれば旅宿ゐ參りこのく罪

ふのき女おでいになさけにに引導なしくだされいいありがたくおそれはめとおたそらねがひおれば一休やとき事とてすぐおのるぐしく其家おいたとに引導遊しおる

僧は衣を賣り女と紅をうる柳とみどり花はくれなゐ

喝とのたまひおれお棺のうちとり光明かくやくと見へしが剩さへ其夜よ日おろしたしく

おしたる者どもその夢お成佛とげたるよしを告おるとなり又同所お煎茶を往來の旅客にうりて世のいとなみとせし男ありしが病もなくて頓死なしたるを近きにあたりの者どもとり集り水などをそゝき氣つおおど呑せけれども更よ其甲斐なかとしかど折ふし一休に通りあとけるを幸おの事とて其とし中上に引導を願ひけれど

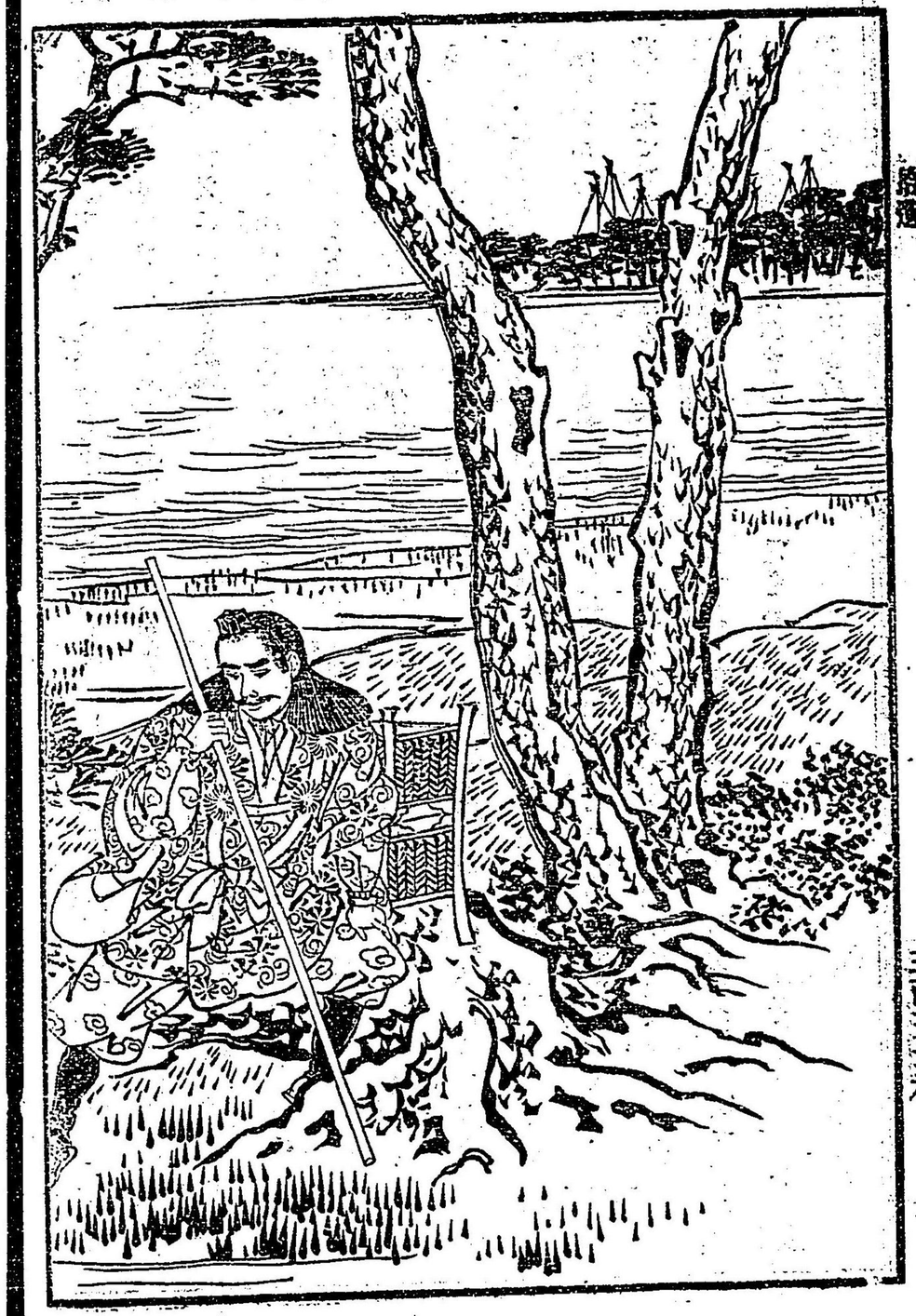
一ふく一せん一期の間末期の一句雲客の話

喝とに引導ありけるが是と往生をとげたりとふしぎよあたりの者の夢お見えおるとゝ

大食のに咄しの事

○或おき殊外大ふうをいふ男有おるが一休和尚のに相伴の非時を給りおるが和尚の仰おるとさても其方いめづらしき大食のおとのたまひけれどのの男いや是とたぶるにやはどお

ていなくしに某が若に友だちより合かけろくいたしたるとき餅米壹斗つかせ我等一人して食すれどもいまた食たらざりおればあたりよ粟もちした〳〵この有けるもおそれをも殘らず喰尽したるにあまりよ腹ふくれたるよとゝり河邊へ走り行大おる舟おるを見るよと其舟を横おもちて川水をせきとめやたりと首ふりてかたりおれど一休聞〳〵見しさてもれびたいし大食のおそれはどの大食とめづらしく去おから愚僧がぞん去たる山伏ありしがおれも大食人おてこのけ錄して餅米貳斗をつかせてそれを一人去て殘らずくらひ余とお腹ふくをけるよや廣に松原ろどしり出て三か〳〵へどのりの松の木を捻折てよしをこの者休みける所ろ小そき蛇の大なる蛙城のみくるしげよ見伝去が出きたりのたゝらの見おれざる蜘を喰けるおぢみ〳〵と腹へりたり山余これ城見てゝてよき事を見付たる物かなとくだんの草を取て喰おるが連のつにたるにや此くさ人の消る草よて山伏い忽にへて貳斗の餅と〳〵くんすゞかおほら貝金剛杖など餅よもたれたるとかたり玉へど彼男顔色をかへて恥入早々歸りて其のち二たびまゐらざとおるとかや物じて狂がる空言いはざるものゝかの男の大ふきをいましめ玉ふ處ゝ



化物に退治の事

○北國方には雲水ありしとき、ある古社宮ゐ大なる石燈籠のありけるがいつくともなく毎夜ん燈明をともしけるが其燈籠のかたちを大の法師毎夜ぐるり〳〵と廻りけるを人皆ゐれを見て恐れずといふものなくされども又誰につて見とゞめんといふものなのりけり一休これ城聞しめ玄拙僧今〻ひまれを退治せべきとのたまふゐ所のそのとも大ゐよろこび日の暮るゝを待のねとたんの所へ行て見るゐ其夜もたがいず燈籠をめぐるとかざ車をまいすがとく皆人やけるはさてを一休房がたいじ有べき由のたまひしかども中々そのしるしもなき事と〻り〳〵評判なす所へ又法師一人ゐらはきて其夜い二人はせめぐるやどに皆人いと〻〳〵恐れ城なして歸りしが翌日ゐくるを待て一休の宿所へまゐりに房の口と才相違して昨夜は化その又一人ふへて中々鎮るけしに見ゐやさぎといふに一休聞玉ひ其一人い拙僧ゐて夜もそがら追かゑ廻りつゐに化ものと踏倒しけるほどゐもいや今夜よりい出まじきと化ものの誓言をたてけるによりもるゝ遣したゞ心易のれ今夜〻り出る事あらしと示玉ふはたしてそれ〻りは何の怪しみもゐのゞけるとのやふしぎも世よあるとなり

豆の秀句の事

○一休和尚えい為つての輕口にてましませばある地頭の奥方よりにやり越〻あつて何とぞにはなし有がたくゐ得ども余りみ玄かくて本意なしねがいくとながくと退屈する迄に物がたりあれかしとやされけるを一休ともかうも望にまかすべき幸ひとなしてそゐへ拙僧さる方へ夜咄しに參りけるゐいり豆を菓子に出しけるがかたいらよりゐの豆秀句となーたべんといふ皆尤とてまめの子のまめなやうになと口々よやす中ゐ賢ゐくもなく見もる人出てやそるゝにを奥さまのよしの參りとてしたゝのつのみて喰ふをのあり人々聞てこれはいかゐ豆の秀句よおくさはのゝし野參りとを心得ずいのに〳〵とせゐれとさてはにぞんじなきゐや井の内の蛙大海を知らぬためしありいづれもにぞんじのとふり當春それがー頼たる人の奥さまよし野へ參り玉ふゐに供してまゐりしに道すがら名所舊跡うちあがめさはの川邊井出の里玉水ゐどやうの名所つぶさに見物してはどなく吉野よも成

吉野山一目千本

紀友則

ぬをゝ山いさおがら雪かと見まがふばかりおり神社ぶつかく殘らずめぐりおがみ夫より高ひ所よのぼりて四方をうちあが玉ふ所ゐいかよ嵐ふき來て奥さまのぬり笠荒谷底へ吹おとしける其ときそれがし深き淵ゐのぞそがとく薄き氷をふみ心地して巖をいでふてつひゐ取て歸りぬされども笠と少しとげたるをおくさまにらんじてさてもうたての事かあとのたまひしそれより立田法隆寺奈良初瀬寺おどいふ名所三ッ山だるまじたにまなどやうの舊跡に見物おつてに上京ありしとおろへに一門のに女中の見まひ被成けるおさも玄ん玄やうなるぬりの笠とめしていづれもに越しありけりうれにつけて思し召出され彼とげたるをぬらせとと仰ありけるやどに塗師屋へにつらもれば銀三錢目おてぬらんとヤす奥さま聞し召てそをと六かしき事のおさらば手ぬりおせよとてうるし屋る鳥目二疋をもちてうるしを求めおるゐむくろ玄程ありける荒惣玄て奥さまい物事おびたゞしをのたまふもるは是い少きとのな豆つぶやどありとれたまひけるさておそ豆の秀句にと三國一のおそのとじまんらしくヤそれたりとかたり玉へば上藉衆退屈して色わるく成おけり

國司へ下帶を遣いさる事

○或に大名の家中に片岡彌太夫といふ浪人か宅よ一休まましけるを此所の地頭きゝつけて使者をもつてヤ上おるは長の旅にはつかれなさるべく見ぐるしくいへどを私宅へもに入來ありてにうさを晴し玉へかしとヤつこのはしけれど和尚よくとそにまねに否けなしとて使者とゝもよ地頭の宅ゑ參り玉へば地頭ゑ本意にや思ひけんさまゞにちさうヤ上てさて何よてをに手跡をくだされ度と乞けをば一休やすき事なり旅宿へ歸りてしたゝ必進ずべしと約束し程なく彌太夫が方へ歸りて玉ふ引ついて使者さたり先はどに契約ヤたるに手跡此ものへ下さるべくといひたれど和尚もあまりせをしうや覺しおん彌太夫の書さしたる文のありゝを使者にわゐし玉ふ使者くろこび持かへりて主人に渡しける則むらにみれば見知たる彌太夫が手跡おり是はふしぎ成とのな使の誤りよてこそあるらめと使の者を尋ぬれども直々に手より玉はり玄といふにさては餘りおいそぎてヤたる故に取ちがひおりしそのにやと又も使をそつて最前下されしは彌太夫が手跡と見にヤいねがいくはに自身よのゝせ玉ふをおそのぞみおいいへとヤつかはゝければ和尚うなつに左やどよ深くに望おちはんかでをしみヤべきとしたゝかに包たる袋をおそわたされおる使者も

ち歸りて主人にとせたばやがて袋をひらき見るとおれたる古紙下帶にてぞあり
るが地頭どのも手城ぢちて笑ひおる其のち又もに入の折ふし柳とばのりの大文字まて一
字のたて送り玉ひぬ又ふるぎ屏風ゐ何にてものたちの知れぬ繪ありけり亭主ゐとひ玉へば
あまり古くなりゐて見分ヤさず私親どもがヤつるには馬とか牛とのやらんにてに座ゐ
よしヤさるれば和尚牛ゐらば角あるべし角なおれた馬なるべたぞとのたまふ亭主ヤされ
けるにはに筆の次手ゐ此繪ゐも讃をあそなし下さるとヤされおれば易きことのたまひ
て大文字ゐて馬じやげゐとぞ遊しおる其繪今よゐまていとものめで度に藏におさまりて寶
物の其一ッとぞ成たるとぞ

長咄ゐ退屈せしもの〻事

○さて和尚さま先夜のにはなしゐおもしろくゐるぞとにはり長きにとゐ〻もゐたいくつ仕
ゐ何ゐぞ今夕ゐみじのきゐありがたきとゐれ〻ぞもゐてもゐかり安きに咄しをにたかせ
下されたしと一座のものどもに願ヤ上げをぞ一休いかゐもゐたいなしゐり皆ゐき〻やれ
や日本はおろかから天竺までもこの上もないありがたきものと飯で汁じやげゐ何と皆ゐ

かつたの〻〻と仰られた

大俗問答の事

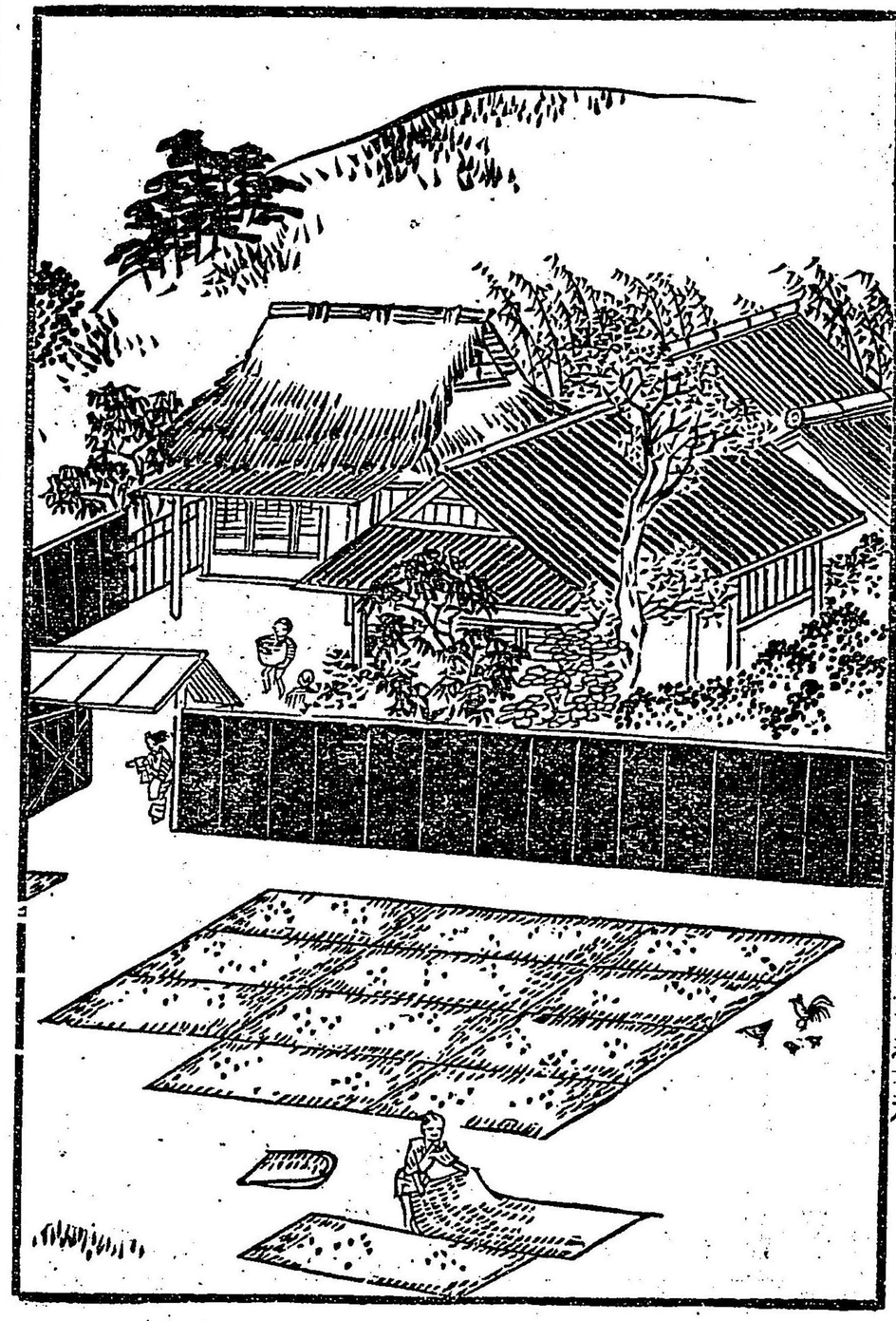
○ある時出入の下男まゐろゐ思ゐけるにて此寺の一休さまをぞ今での知識者とて皆々たづ
ねて見へるが問答とやらんを聞に何でもない事いふてにぎゐして歸らる、我等も和尚と
もんどうして見んとふと思ひ付て和尚さまにはたづねヤまを男とヤものゑ生れ出るより
珍寶とヤものをそつて出ますがそれを成人〻て落す人と是いのんとヤけれどいまだ言葉
もひのめゐ金玉といへどもくろきがとし

面眼のにたらのあるを持ゐから女ゐあへゐ目なしとぞなる

女房い弁才天とちつく云い美人といふも皮のとなゐ

子と寶ゐりとの事

○一休のに寺へ常々に心易々参りおる百姓の元より家貧しさうへゐ子多くもちて其日も過
しがたに程のもの丑て有けるが和尚のもとへ参りさて〻私ともはいの成因果みてい哉
にぞんじの如く子どもい追々出來はして當年二才ゐ成を下として都合十二人まで出來ま



〻其中ういとし子もおさります私夫婦のものゝ日に三度の食さへ腹わ足ほど下された事とてもおそ是がまとの子の地獄へおちたとゞものかとぞん玄升れど夫おらばどの子が憎とゞものをざりませぬ又かやうの貧家へ生れくる子供も不仕合のとおもへどいと〻〻不便みもぞんじまと是も前生のそくひわてい哉に聞せ下さをよと言けれど和尚うちうなづき尤々さりながら下の子はいまだ二ッとおいやれどまだ〻いくたり生まゝやらしれぬかおらず夫婦のものゝ氣をつきぬやふわして有と死にてひとつ處へより寐酒でものんで氣をとらし仕込でと出かし〻〻そるがよいと仰ければびつくり玄て和尚さま此上出來ま〻たら夫婦の者ゝ何と成はせうとゞければされば夫わ付て大おしがわる昔奈良の都の頃白木の長者とて日本にたれしらぬものもおゝ大百姓がわつたげなが其となりよ丁度うなたの樣な貧家よ種蒔ひとつよて十八人の子ともつて今其方のゞさる〻通り親ふたりと正月元日より大晦日まで食の足としらず隣の大百姓の事をうらやゝ居けるがある時夏炎天わ大勢をわつめ麥をふみかこあのうちと元よゞ門外まであわ干ひろげたるよ貧者て其麥を見るに付ても此干たる麥むしろ十八まい丈わるならば子供わ一枚づ〻當わかちおゞ我等夫婦が此苦しみを有ま玄死と思ふ事をも玄らず子共等とわしよはかせてあそび歩行て目のとゞく所ふゝ一人も居ぬとよと思ふ折からわのわ空のき曇り大雷なりと共めゝ大夕だちふゞきたり大道忽大河のとくなゞて〻件の干たる麥なか〻取入べき間もなく殘らずながしたるが隣の夫婦と門口へ出ていがゝせんと思ふ所へあちらこちらとり走り歸りけるもゝ頭のこのず炫員見れど一人も不足おく剩格別身をもぬらさゞりゝる依て昔より子どゞは寶じやおいふ程よ出のしやれ〻〻其長者をいへるゝ大和國十市郡天の香具山の東北にすこし高ゝ岡山を長者やしゝとゝいひはた其わゝに白木塚とも箸塚ゝもいへる塚あゞまれと其時の長者主人は元〻ゞ家内出入ものまで一飯とよ其ゝしを捨てふたゝひ用ゝざれど其捨たる箸しせんと山となりしとて箸づかといひて今わのゞ又佛説の中わも鬼子母神といへるゝ三千人の子を持玉ふ其うち一人を隱され夜叉と成玉ふといへる事をありとて哥よみて玉とゞけり

親となり子と成くるも今ならず二世も三世を尽ゝ契ゞかずもなき子を賣人もありと聞く親でとおふて鬼の再來親と過去わが身ゝ現世子ゝ未來後生大事と子をゞ育て〻よ

八ッ橋わて狂歌の事

○参河の國八ッ橋は名にしおふ名所わてそのこのみ業平をこのきつだたの五文字を句の上にれて歌よまれ者るとかや一休にもいこのなる名所にやは覽おされたくや思召けんとあろの里人ふあんないさせてはらんするに八橋りあれてこのきつばたもなくとあろせれまて田をうゑてけれたいづををやつとしとも見もわこのぬていおり者れば

おとふれく三河ふこのけし八としも
田だこのりありてこのきつ葉となし

とはそばそれけるとかや

瓢簞の曲遊の事

○一休和尚は手まへ拂底の者ぶんまて有けん一條もぞ是しの辻ま高札を立られける

一此度日本老和尚一休三明六通と得て瓢簞をひつをり返す望の方々見ぶつ可有者也　今月今日とりはじめヤい

と遊ばされて紫野ま芝居をかまへ玉ひける事とて言はやしければ京わらんべ老若男女貴賤貧福をとこの寸足を空になして群集をなし芝居もすみぬをとさらば時分とときとて一休は用意ありは衣のはへに大ひなる瓢簞をぶらり〳〵と付たまひ両手ふばちを持て西より東ひんがしよ北北より南と飛めぐりとねかへりなんぞ幾さびもあしたはら大音をあげたんひやう〳〵〳〵とて二十者んばかりまはりいねまとりなどし玉ひて其後樂屋へとしりいりは自身ふ大鼓をうち玉ひ是が〳〵とり〳〵とて殘らず追出したまふ見物のものぞも是といふの成事ぞとて狂ぶるもありあるひと今ふみと者めぬ和尚のおぞけ哉と者ばらくい口も得ふさがぬものも多かり者りかや

涙人は引立ありし事

○者ばらく甲斐の國ふはとうり寺の寺ちに一人の涙人は出入ヤけるが一休さまと生佛にてまーますよし國中みな〳〵ヤ事にいへと何卒我がみの不自由なるをたのみ奉て身上にあり付いやや寺偏ふたす者玉へとてひたすら願ぞけれぞ和尚もふびんに思し召され一門ふて もなさやとかえせ玉へと某が一門歴々まのりあれぞも尾羽うちからしぬをぞ恥のはしくて参ま得ず且と路銀のよとがもなく不自由にて迷惑ヤと身にていあとれ和尚とまのはか

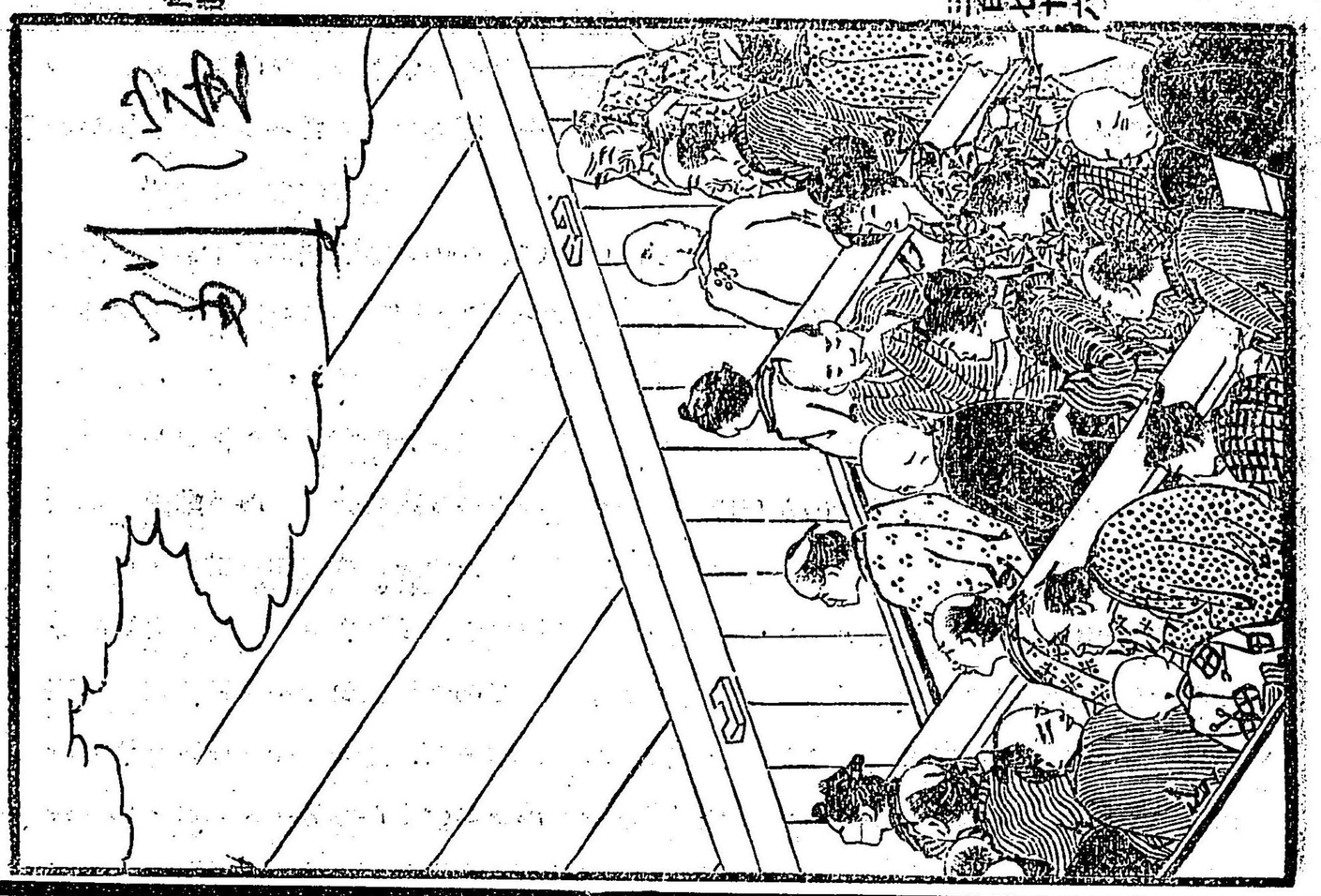
げゐて身躰ゐ有つゐ中度よしひたすら賴上ければ和尙うちうなづきのたまひけるゑ其方藝能ゑゐにを得たるや浪人こたへて万事不調法ゐいで中上るいや〳〵れき〳〵の果どゐれゑ禮樂射御書數のうち一々もび折立てとひ玉ゑどを一つとして存せぬよし中上ければ扨ゑ浪人したるも道理とゐのゐ〳〵しく考ゑらゑ思案し玉ゐけるゑ彼浪人中ゐゑ外にぞんしたる事なくいゐゑども故ゐつて敦盛の舞一番ぞんじていといふに一休ゐゑしめして夫社日本一の事よとのたまゐ玉ゑ〳〵と内談遊して不便よりそるもの城かゐらひ其外皷打などをゑびあつめ天晴云合せゐ芝居にまくを打こ〳〵かしゐゐ高札をたて玉ひける

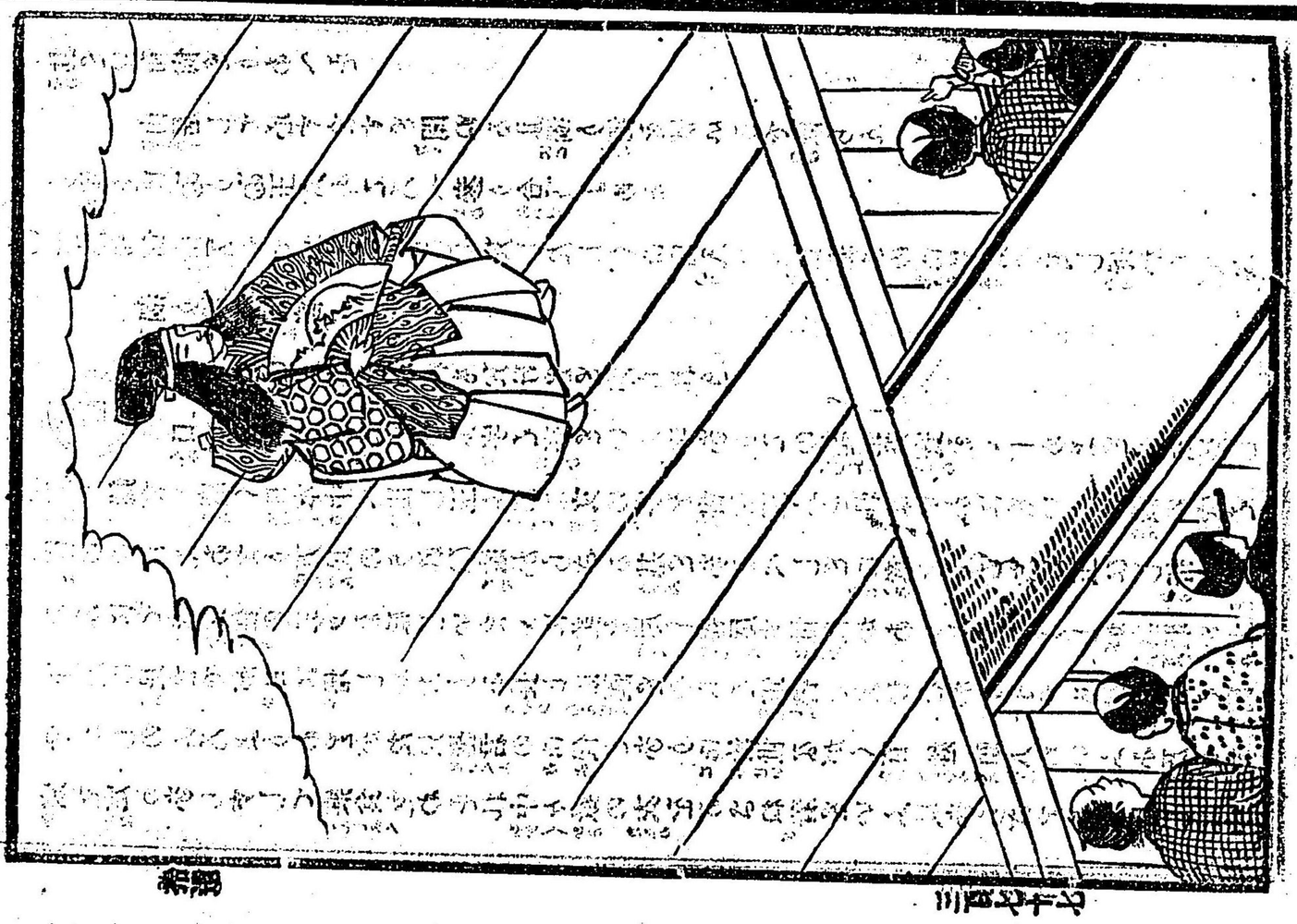
一此度上方〳〵り幸若罷下勸進能仕勸進元ゑ日本老和尙一休

と遊されしのゑ侍ゑいふに及ゑず町人百姓五里七里といとはず貴賤群集してさも廣き芝居に小屋も破る〳〵ほどに見ゐたる所へこの浪人しやうぞくつゑ氣だかく身つくろひして舞臺へ出てゐつも芝城一番舞そまして樂屋へ入とひとしく一人の男出てまこゐにゐ歷々さまゐ入ゐ見物のだん有かたゐゐおどいんぎんゑ一禮をのべさて此つぎには何をかまゑせ中さんゐゐまのみ次第とやけれゑ多勢のけんぶつ口々ゑ大職くゑんゑいや高だちゑ清しげよなゑ〳〵思ひ〳〵に言ゑやしけるところへ兼ていひ合せありけん五七人のゐぶれ者どもゐ、かしゐよりをゑり出ていや外の舞ゑ見たゑゐしあつもりを舞せよといふ〳〵れたる男同じ舞はゐたいくつゐいはんといへばかのゐぶれをの共いや我々がすきじや敦盛を舞さずんゑ芝居城踏くだかんいやつゐのみゑしがんなゑ〳〵いふゐゑゐ又敦盛をまゑしける〳〵が舞はて、又前の男出て口上をふれゑゐゑ又溢れも乃出ていやゐつもりといふま〳〵よつゐゑて四五番まゑせける其後いまづ今日はゐいかゑまでひとて追出し木戸口ゐて明日は取へゐらんゐ入る〳〵評判とふれゑゐゑ前の日よりも人ゑ多く入込ゐ定のあつもり一ゑん舞いし次はといへば又前日のゑゑかねて仕ぐみたる事ゐれゑ幾へんゑてもあつもりゑゑ七日までゐゑ仕たりける彼浪人たよりを得て一廉の身上ゑなりけるゑかや所の地頭の耳ゐも入ぬれ共一休れ事ゐゑばゑてゐゑしのゑもゐかりけるゑゑ

文錢のゐ咄しの事

○ある人問ていいく和尙さま通寶の中に裏ゑ文の字を書たる錢のいはいこの成子綱にていゐ哉とたづねゑれゑゑされゑの事よゑうしゑ亂國多くして親をうしゐひ子をたづね我が身の仕





家を定のおらずして粢食をわとれ中々數の衣をのさね着といふはおらざるしと聞しゐ中そかしのおろよりあるがたき聖君のゐ代とありゐ治世ながく百姓町人いいふゐ及をず下賤の民までが日に増しおおりゐ長じ亂國とやらと軍書でよむむかり子どもは耳ゑと聞のみにて衣食住の三ッをはしいまゝに美を尽し善尽す世代がわりしとさゝしが其時ゐ上樣のゐ目ゑあまり万民のうれひ遠からざる基とあるべしとゐ意をくるゑめ玉ひし折から錢を鑄まし廣く日本中へ出し玉ふ印ゑ文の字を書せ玉ふそれはいかにといふに錢の穴と

文

口と口の上ゑ文といふ字と吝といふ字ありこの結構乃實をゝーめよとゐ志ゑしありといふ事をわれもそけゑと仰られき

濁り酒の問答

○一休和尚山居ーておはゑまゐそしたしくゐ出入ヤとと仁寒さのゐ見舞ヤせし折からゑお り酒をはゐりゐ玉ふゑころへ參り合てよめる

山居して心すまずと聞ゐる ゑ濁り酒をばいこで飲ちん

其とそ和尚とりあへそ

山居しての楽べそものを濁りさゝをとて浮世ゑすそ身でもあし

と遊ゑしけるとかや

山伏と問答の事

○一休關東へおもむこのせ玉ふとき供人おどゐつゐとゐる事をいとひ玉ふで普化僧のすがゑと あり尺八を吹て通らせ玉ふを道ゑて和尚を見しりたる山伏ゑわゑ玉ひしゑ山伏しらぬ躰 ゑてひをかゝるはといかゑ普化僧どの何方へ行玉ふといふ和尚ゑたゑて仰ゝるゑは 風ゑまかせてゑ無ゝれど山伏いひけるゐ風ゑさとさはいかん和尚ゑたゑて仰けるゑは吹 て行とあり者をば山伏もがをゝられて口をとちゑと笑見ずして過けるとかや

壁ゑ寄する戀といふ題にて詩歌を詠じ玉ふ事

○一休和尚のかゑ口おるゐ事をゝそしゑたる人ゐ作意を聞んとゐ庵へ參り壁ゑ寄る戀といふ題にて歌一首遊しゐると所望ゑまゝれゐ取あへず

君まつちはねばやひおりぬるとかゑ
戀ゑしたちのなゑたちにけり

とあるをとしける文畑の懸どいふ題よて詩歌一首とあひければ

再々輕烟惹恨長　六宮宴罷月昏黄
羊車不至芙蓉殿　知有佳人漫炷香

不動の古佛の事

○或人不動明王の古佛を秘藏して安置し居るが常々其家へ一休あゝろ安く行玉ふあると
に彼不動をば覽じてやがて一詩を賦し玉ひ者る

全身眞黑稱明王　生付片輪目口帳
一生不犯無念者　去何處固護戸堂

かゝる七言絶句を作り玉ひ汝いかよも不動を信ずるおらば眞の尊像を繪かゞてゐたゝべし
とて筆をとり玉ひてさらく〳〵と大筆ゐて水中ゑ岩二ツ三ツを繪かき玉ひて大字よて不動
尊かゐのそもしかゞ岩にとくゐ心をうおのそはゑきと示し玉へり

生前死後を示し玉ふ事

○ある人出休和尚ゑ生死のときとゆのい心得でしかるべをやと問ふ和尚のいはく忠孝仁義

ゐ過たるゑ無しと仰けれどんこのよを有がたく心得ゆゝ死てゝの後ゑいかん火葬のゝちゑ茅
萱葦とやおらん汝何とて死後をゑかるゑやゝ自得せよ生あるものは必死ゐ平生臨終のゐ
きと思ゝ〳〵臨終のときゑ平生なり目前ゐ死苦いたるとゑ懸々ゐ足らずして生死に念をか
けずんゑ微塵も屈する事ゐしゐて一絶を賦てゐたへ玉ふ

不レ辞二因果一受二塵纏一　止水對觀垂柳邊
明鏡本分月下客　花晨興到樂二皇天一

また問ふ如何か是佛一休答て曰

河伯來りて水冦求ひ

河伯は水の神なり世界の水は我手のもの冦さゑ置て却て外ゐ水を求ひるがとゝ汝が本分
の佛性を顧て自知せよ

佛にとゐゝろもならず身もならず
ならぬものこそならぬおりけり

一絶を賦して云